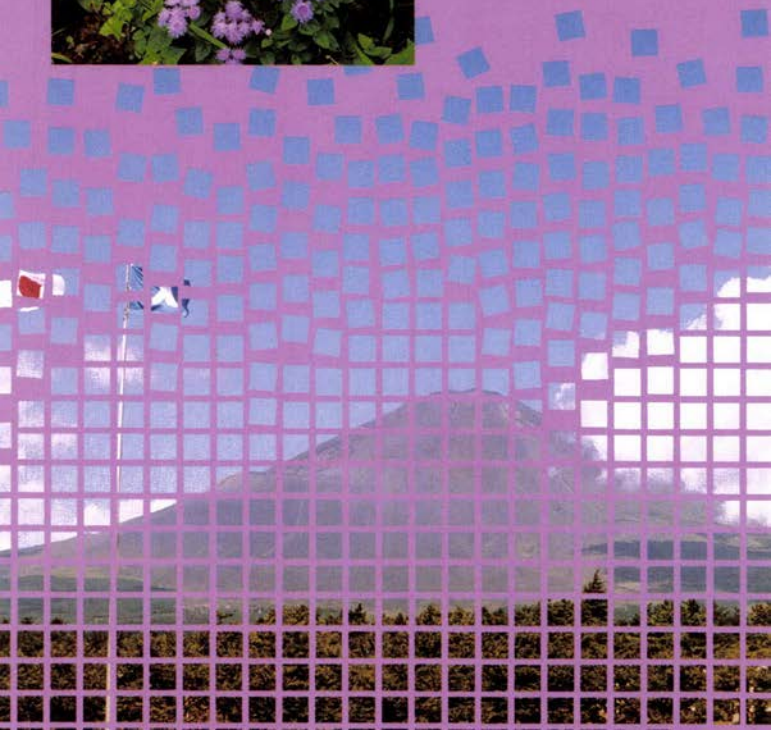


日本への回帰

第35集

平成11年 富士合宿レポート



大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

日本への回帰

(第三十五集)

——第四十四回全国学生青年合宿教室（御殿場）の記録より——

は し が き

政府は、七月の九州沖縄サミット（主要国首脳会議）に先立つて、四月に東京でサミット参加八ヶ国（G8）の教育担当相による「教育サミット」の開催を決定した（二月三日付各紙）。昨年ケルン・サミットの際の共同宣言に「生涯教育や職業訓練の充実、教育面での交流活発化」が謳はれたことを承けてのもので、「豊かな社会の教育」がその中心テーマになるといはれる。わが国からは「いぢめ」や「学級崩壊」といった教育現場が抱へる問題について現状と対応を報告し、「中長期的にも有効な解決策が見いだせることを期待している」とも報じられてゐた。

この報道に接して、どこか焦点が惚けてゐるやうに思はれてならなかつた。「学級崩壊」や「いぢめ」を国際会議でレポートすることに躊躇するものを感じないのだらうか、などといふ余計な心配をしてしまった。生涯教育や職業訓練についての情報交換ならばまだわからなくもないが、「いぢめ」や「学級崩壊」は次世代の国民育成といふ教育の本質にかかはる事柄である。本当に国際会議で「解決策」が見いだせるものなのか。

そもそも自国の少国民の育成に特別な妙手があるはずもない。為政者が、親たちの世代が、わが事として真剣に取り組む他に手立てがあるはずもない。他者の発言がわが胸に染み

込んだり、それに違和感や反撥を覚えたりするのは、課題の克服を真にわが事として痛感してゐる場合に限られる。この心組みが確立してゐるならば、何を見ても聞いてもそれらは全て自己発見（自己啓発）につながるから、他者との意見交換も生きてくる。もしも何らの感情の揺らぎもなく他人事のやうに「学級崩壊」が語られるとしたら、その会議はもつともらしい「有効な解決策」を盛り込んだ記者発表用文書の作成で終つてしまふだらう。

「日本だけでなく、G8各国が、次世代の教育問題に悩まされていること」も政府が教育サミットを提唱した理由にあげられてゐた。しかしながら、わが国の場合と他国のそれとの間には凡そ同次元では語り得ない隔たりがあることを見落とすことはできない。とても「豊かな社会の教育」などといふ一般的な名辞では括り得ない大きな落差が横たはつてゐる。この点についての認識が必ずしも行きわたつてゐないことが、実は一番深刻なことなのである。各国とも国民の教育に多大なエネルギーを注ぐのは、いふまでもなく国家の存在が世代を越えたものだからである。自国の歴史と価値観（文化）を次世代に正しく繋ぐとしてエネルギーを注ぐ。国民教育の成否はそのまゝ国の将来に直結するからである。即ち「国防」が今日の安全を先づ念頭におくとすれば「教育」は明日の自存のためのものである。どちらも国家の存立に不可欠だから車の両輪に譬へられてきた。この常識が今の日本にあるだらうか。G8の中で、他の七ヶ国とわが国を分かち最大のもは「国防の意思」の有無であらう。

端的に言はう、「軍隊」を持たないのは唯一わが国だけである。とはいつてもわが政府に国防策がないわけではない。しかし、それは他国に脅威を与へない範囲で云々……を前提とする「専守防衛」策である。しかし、もし他国が「脅威に感じる」としたらどうなるのか。「専守防衛」の主客転倒的論理矛盾は何人にも明らかだ。サミット参加国の中で、否、世界の百九十余ヶ国の中で、国防の建前に他国の判断を据えてゐる国は他にはない。他の全ての国々は自らのために自らの全力を尽くす、即ち「自らが自らであり続ける」ことに些かの迷ひもためらひもない。従つて、そこでの教育は一点の陰りもなく「よき国民たれ」と説き続けてゐる。

他国の脅威にならない云々が、憲法前文の「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」といふ「自己不信宣言」と通底してゐることは多言を要しまい。被占領下（主権喪失期）の武装解除状態を合理化するためにGHQが一週間で練り上げた「日本国憲法」にとつては、わが国の自立自存などは慮外のことだつた。それを「平和憲法」などと言葉を飾つて麗々しく掲げ続けてゐては愈々もつて、国民精神は混迷するばかりである。

「平和憲法」下の教育理念とは、「よき国民たれ」と説くことよりも、祖父母の幼少時代とどれだけ違つた内容を孫世代に教へるかに腐心するものだつた。価値観の断絶を当然視する

ものだった。そして今や、日本人よりも「地球市民」が強調され、相補的な男女のあり方も「人権」の前に軽侮の対象となり、さらにまた国際化を理由に「英語教育」が小学校に導入されようとしてゐる（平成十四年度からの「総合的な学習の時間」）。ここでは国語の読み書きの力が外国語学習の基礎力であることさへ忘れられてゐる。母国語で考へ表現できる内容以上は外国語で表現し得ないことさへ忘失してゐる。まさに自己喪失の途をひたすら邁進してゐるかのやうである。「いぢめ」も「学級崩壊」も「自らが自らであり続ける」べく努めるといふ自づからなる生命の躍動を抑圧したところに咲き出た徒花といふ他はない。

やはり「軍隊」を保持しないといふことは（正確には奪はれたのだが）、異常なことだったのである。それは自存自立に価値を置かないといふことに他ならないから国民教育が病むのは理の必然といふべきである。やうやく衆参両院に全会派からなる憲法調査会が設置（二月二十日）され、「広範かつ総合的に調査」することになった。真に constitution（国の歴史的特性＝憲法）の名に相応しい「憲法論議」を期待するもの切なるものがある。

それにつけても、小田村寅二郎先生が、一昨年（平成十年）の第四十三回阿蘇合宿教室の開会式で、ご自分の文章を引きつつお述べになつたお言葉が思ひ起こされてならない。それは亡くなられる前年のことだった。

「私はひそかに憶ふ。日本の国を本来の国家にするためには、単に既往に戻す努力では

何の効果もない。東京裁判史観の克服だけでなく、記紀万葉時代からの史観を素に、悠久の国家理念の追憶からスタートするしかない、それが今後の国民に課せられた責務と思ふものである。」

小田村先生のご遺言ともいふべき「悠久の国家理念の追憶」といふ祖国再建の筋道を過つことなく歩むをわれらの責務と意を新たにする私共は、例年と変はることなく昨夏も四泊五日の宿泊研修を営んだ。その富士山麓での研修内容を盛り込んだものがこの冊子である。私共の願ふところを行間からお汲み取りいただければ幸甚である。

最後に、御登壇いただいたばかりか、御講義要旨の掲載にも多大なるご理解とご協力をいただいた諸先生諸講師に衷心から御礼を申し上げます。

平成十二年二月十一日

大学教官有志協議会
国民文化研究会

目次

はしがき

講義

第一日目（八月一日）

合宿教室の目指すもの……………(社)国民文化研究会事務局長 山口秀範…1

第二日目（八月二日）

アメリカニズムとどう戦ふか——市場原理と共同体原理の大激突——

……………拓殖大学日本文化研究所所長 井尻千男…25

『古事記』——倭建命——……………昭和音楽大学講師 國武忠彦…61

第三日目（八月三日）

「国体」の思想……………埼玉大学教授 長谷川三千子…85

第四日目（八月四日）

君臣の情——日本の歴史を貫く「まごころ」の世界——

……………元九州造形短期大学教授 小柳陽太郎…121

講話

ビルマ（現ミャンマー）での死線を越えて——若き友らに伝へたいこと——

「古事記」のいのち……………市ヶ谷漢方クリニック院長 桑木崇秀…155
……………亜細亜大学名誉教授 夜久正雄…175

青年体験発表

大人が変はれば子供は変はる——吉田松陰「草奔崛起」に学ぼう——

……………(株)志門塾生涯学習部講師 三林浩行…199

会社生活三年間を振り返りつつ思ふこと

……………アサヒ飲料(株)メーカーテイニング部 澤部和道…211

短歌入門

短歌創作導入講義……………久留米大学附設高等学校教諭 名和長泰…221

創作短歌全体批評……………熊本市役所情報企画課 折田豊生…237

一年の歩み……………広島防衛施設局施設企画課長 山根清…255

合宿教室のあらまし……………帝京大学法学部四年 横畑雄基…267

合宿詠草……………297

講義

——合宿導入講義——

合宿教室の目指すもの

(社)国民文化研究会理事・事務局長

山口 秀 範



- 一、海外生活と短歌
- 二、皇后陛下の御講演
- 三、学生生活と改革
- 四、「神」と「ゴッド」
- 五、日本の心
- 六、国に誇りを

一、海外生活と短歌

私は大成建設に在職中、昭和五十五年から十四年間海外勤務をしてきました。まづ西アフリカのナイジェリアで三年半製鉄所建設に従事し、思ひがけない経験を随分しました。

当時同国内を出張する為の必需品を「三種の神器」と呼び習はしてをりました。第一は水筒。外の水は絶対飲めないのでキャンプ内の安全な水をいつぱい詰めて行くこと。二つ目は懐中電灯。大きな都市には電気は引かれてゐるが、いつ停電になるか分らないので必需品。もう一つは日本製の蚊取り線香。マラリアを始め蚊を媒体とする伝染病の多い土地ですが、中国製の線香や原地産の噴霧式では蚊が落ちない。やはり日本製品は素晴らしいと改めて認識しました。

赴任して一ヶ月を過ぎた頃、車を四時間走らせて出張から帰る途中で、真つ暗なナイジェリアの空に煌々と照る満月を見つけました。それを詠んだのが次の一首です。

アフリカの満月の影いや明し思へばはるかに来つるものかな

「満月の影」は、満月の光といふ意味です。遮るものが周りに何もありませんから本当に大きな月で、車窓から眺めてみると地球の反対側に居る両親・家族・友人達の顔が自然と浮かんで来ます。しみじみと「本当に遠くまで来たなあ」と感慨を持つたことを覚えてをります。後日ふと思ひ出したのが次の有名な歌です。作者は阿倍仲麻呂（あべのなかもろ）。奈良時代の学者・遣唐使で三十数年間唐の都長安に住み、遂に再び日本の国土を踏むことなく亡くなつた方です。

あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

大空を振り仰いで見ると、自分が生まれ育つた奈良を象徴する三笠山から出てみた満月、それと全く同じ月が異国の都の空を照らしてゐる。故郷のことをしみじみと思ひ出す宵だ。といふ歌です。時代を超え場所を越えて、月によつて故郷を懐かしみ、親しい人達を思ひ出す切実さを、この歌を通じて一入感じたことです。

ナイジェリアの後二年間のロンドン・ビジネススクールでの勉強を経、卒業後はアメリカ



勤務となり約九年間、米国子会社の経営に携はつて来ました。一九八六年（昭和六十一年）秋にはシカゴでプロジェクトの話が持ち上がりました。地元の不動産ダイベロツパーTPG社と共同出資し、目抜き通りに三十階建ての事務所ビルを建設・運営する新しいビジネスです。

交渉を始めて半年強、様々な商慣習の違いや言葉の上の誤解を克服し契約締結まで漕ぎつけました。ところが相手方が「ちょっとサインする前に話したい」と十六項目を書面で示して来ました。そこにはこれまで一つ一つ詰めてきた条件を全部ひっくり返し、半年前に戻るやうなことを平然と主張してゐます。これを見た私は、プロジェクトをまとめようと腐心してきたのは全く無駄だったと怒り心頭に発し、目前の契約書案文をかざして「我々が半年かけて作り上げてきたこれ

は、一体何だつたんだ」と声を荒らげました。するとTPG会長パーマー氏は平然と「サインするまではただの紙切れだよ」と嘯いた。ふざけるな、こんな奴とは二度と付き合ふかと、席を蹴立てて交渉の場を後にしました。

ところが、我々側の弁護士から説得されてしぶしぶ席に戻ると、態度も一変してパーマー会長曰く、「今夜、我々と夕食を共にするお時間がありますか」それは、一緒にこのプロジェクトをやりませうといふ意思表示なんです。それで急転直下、その日の内にサインし、二年後にビルは完成しました。

それまでの日本の商談では、一つ一つ積み重ねて一旦合意した事項についてはそれを踏まへて次に行くといふのが普通でした。しかし彼らは、それまで詰めてきた内容を一回元に戻し、相手の反応によつて限界点を探る交渉を平気で仕掛けて来ます。「山口があんなに怒つたことからすれば、まあこれが精一杯取れる条件だらう」と納得するまで追求する。十六項目についても、こちらが根負けして二つか三つはおまけとなれば儲け物とゲーム感覚で楽しんでゐる趣きもあり、ともかく全く考へ方が違います。グローバルスタンダードと喧伝するが、私が常識と思つてゐる事と彼らの常識はこんなにも違ふと、非常に鮮烈に経験させられました。その頃に作つたのが、次の連作です。

シカゴ新規プロジェクト交渉の最中に

この国の事業家とともに新しきプロジェクト興さむと月日努めつ

次々と新たな壁にさへぎられ途方に暮るることも幾たび

極まればまたよみがへる道を念じその度ごとに切り進み来ぬ

商ひの経験劣れど生きざまの間はるる時は一歩も退かざり

この年（昭和六十二年）の夏開催中の合宿教室にこの歌を国際電報で送つてみたのですが、海外勤務を終へて平成六年に帰任した後で、大先輩の星野貢さんから「山口さん、『極まれば』っていい歌だよ」と言はれました。その時話題にされたのは次の歌です。

極まればまたよみがへる道ありて生命果てなし何かなげかむ

歌人で教育者でもあった川出麻須美かひでますみさんの「墓碑銘」の歌です。星野さんはお若い頃から事業を起されましたが、ある時期倒産の危機に瀕したさうです。その時にこの川出さんの歌に本当に励まされたとおつしやいました。私がシカゴから送つた先程の歌を読んで下さり、

山口も今試練に耐へてゐるのだらうと思んで頂いたことを、シカゴで「極まれば」と歌を詠んだ時から八年も経過して伺つたのはとても嬉しいことでした。

このやうに、私にとつて短歌とは、まさに私の生き方そのものだと思つてゐます。われわれは専門歌人ではないし、みんなが賞賛するやうな歌は中々できません。しかし自分の気持ちとありのままに、なるべく素直に表現することは、その気持ちさへあれば、そして少しの訓練をしていけば、段々できるやうになります。時間と空間を超えて、人と人との心がつながりはされるやうな歌を詠み続けたく思つてをります。

二、皇后陛下の御講演

さて平成十年九月に、皇后陛下のご講演の様子がテレビで放映されご覧になつた方も多いと思ひます（インドのニューデリーで開かれた国際児童図書評議会世界大会）。そのご講演でご自身の子供の頃の読書を通じて、いろいろな悲しみ、喜び、人生の複雑さを学んで来られたといふご体験を語られました。その中で古事記についてもお話されました。

一国の神話や伝説は、正確な史実ではないかもしれませんが、不思議とその民族を象徴します。これに民話の世界を加えると、それぞれの国や地域の人々が、どのような自然観や生死観を持っていたか、何を尊び、何を恐れたか、どのような想像力を持っていたか等が、うつつすらとですが感じられます。

この合宿でも明日から古事記を勉強しますが、私たちも皇后陛下のおつしやることがうつつらと感じられるかしつかり読んでみようではありませんか。実はこの国際会議に、皇后陛下は初め英語で講演を準備されました。その後日本語でも録音され、両方を聞くことができます。今、その英語版の一節を皆さんに聞いて頂かうと思ひます（本書には同箇所日本語版を「橋をかける」から掲載します）

あまのつひらのみこ
倭建御子と呼ばれるこの皇子は、父天皇の命を受け、遠隔の反乱の地に赴いては、これを平定して凱旋するのですが（略）天皇は新たな任務を命じ、皇子に平穩な休息を与えま
せん。悲しい心を抱き、皇子は結局はこれが最後となる遠征に出かけます。途中、海が荒
れ、皇子の船は航路を閉ざされます。この時、付き添っていた后、弟橋比売命は、自分
おとたらばなりのみこと

が海に入り海神のいかりを鎮めるので、皇子はその使命を遂行し覆奏してほしい、と云い入水し、皇子の船を目的地に向かわせます。この時、弟橘は、美しい別れの歌を歌います。

さねさし相武さがむの小野せのに燃ゆる火ひの火中はなかに立ちて問ひし君はも

友人のアメリカ人にこのビデオを見せたところ「美しい英語だ」とまづ感心しました。それから日本語で読まれた最後の歌の響きが素晴らしいと言ひます。美しい英語で講演され、そして一番の核心、弟橘比売のお歌を、解説も翻訳も無しに日本語でさつと読まれた。この響きは万人に通じるもののやうです。古事記を読むのが、いよいよ楽しみになつてきたかと思ひます。

三、学生生活と改革

合宿申込書の裏面に皆さんが記入した「アンケート」を全部読ませて頂きましたが、そこに重大な問題点を見た思ひです。まづ「大学生活（もしくは職場）に満足してゐますか」とい

ふ設問に對して、「まあこんなものだらう」「授業はつまらないが、クラブ・サークルが楽しいから良い」と表現は様々ですが、大多数の方々が「消極的に満足」と表明してをられますね。それでは次の「今の世の中についてどう思ふか」に對しては、ほとんどの方が「今の日本は駄目だ。段々悪くなつてゐる。次の時代はもつと困つたことになるだらう」といふ意味のことを書いてをられる。これを大きな矛盾だとは感じませんか。現代の学生諸君が置かれてゐる悲劇的狀況がここに如実に現れてをりませう。

難しい文章ですが田所廣泰といふ方が昭和十四年に書かれた「教育の意義は一変せり」の一部を読んでみませう。

諸君は学校生活に眞の歎びのないことを認められる。私は諸君がこの事實を認めらるゝとき覚えらるゝであらう慄然の感を想像せざるを得ない。学生は青年である。青年とは本質的に、未來に希望をもち現在に生の躍動を感じねばならぬものである。果して然らば、感激と歎喜とを「奪」ふことなしに、青年より歎びを失はしめる途はない。(略)人間の生命を奪ふことは深重の罪とせられてゐる。しかし、百数十万人の青年からして、眞に内面的生命を掠めるといふことは、罰せられようともせぬのである。

戦前、今から六十年前に書かれたものですが、そのまま現在に当てはまる分析ではありませんが。確かに皆さんは「まあまあ満足」と一応は書いてをられる。しかしそれが、積極的喜びに溢れた学生生活、青年としての潑刺さに満ちた毎日かといふと、どうもさうは言へないやうです。何故ならば、一方で今の世の中、大人の世界に対して、諸君は非常に失望し、不安を抱き、暗い気持ちで将来を見てをられるわけですから。

田所さんは、「内面的生命」を奪つた原因を青年たち自身の精神に求め、次のやうに指摘されます。

学生の殆ど凡ては、学校がつまらないと言つた。けれども、彼らは苦しいとは思はなかつた。この真の苦しみを感じなかつたことが、精神的主動力をもつてをらなかつた証拠であり、その故にその生命を奪はれたのである。

非常に厳しい言葉です。表面はとも角内心では「学校はつまらない」と感じてゐる学生は今もゐるでせうが、「苦しい」と痛感した青年は、いつの世にも見出し難いものです。しかし、「何処かをかしい、段々悪くなつて行く世の中」を正すには「苦しみを感じ」ることが

出発点で、教育改革の活力もここから生まれるに違ひない。田所さんの文章は続きます。

現代教育の改革といふことも、その弊を身を以て体験したものにしてはじめてなしよう。その弊を身を以て体験したといふことは、その弊害に対して堪へがたき苦痛を味ひえて、而もこれに反撥する勇氣をつひに失はなかつたといふことに外ならない。真に苦痛を味ふには誠実にして敏感の魂でなければならぬ。而も、之に反撥するのは、真の勇者でなければ出来ないのである。

「大学に対してをかしいと思ふことは自分にもあるが、一人では改革できない」とおつしやるかもしれない。けれども、今の大学生活に本当に満足できない、あるいは生き生きとした場を見出せないとすればそれを探し出し、奪はれ掠め取られたものを取り戻す努力を、皆さん一人一人の場から始めなければいけないのではないでせうか。

この「合宿教室」が始まつて四十三年間、常に先頭に立つて我々を指導して来られた前理事長・小田村寅二郎先生は六月初めにお亡くなりになりました。小田村先生こそ、この田所さんが書いてをられる「その弊害に対して堪へがたき苦痛を味ひ、而もこれに反撥する勇氣

をつひに失はな」い生き方を、戦前の学生時代から数へ年八十六歳で世を去るまで貫いた方だつたと、私は諸君にお伝へしたい。

四、「神」と「ゴッド」

小田村先生をご存じない方も多いかと思ひ、晩年のご講演をビデオでご覧頂きます。

日本では言はれてきた「神（かみ）」は西洋で言ふ「GOD（ゴッド）」とはかなり違つたものであることです。全知全能を意味する「ゴッド」と、在りし日に立派であつた人を死後「かみ」に祀つてきた日本の「神」を混同しては、日本の過去は理解できないのです。明治天皇の御製に（略）

湊川懐古（明治三十五年）

あだ波をふせぎし人はみなと川神となりてぞ世を守るらむ

敵を防いで、後醍醐天皇のために楠木正成は戦死するのですが、その楠木正成は我々の祖先で「人」なのですが、今は湊川神社の御祭神として、「神」となつて世を守つて下さつてゐる。これは端的に、日本の「神」が「ゴッド」と違ふといふことを明確にお示しいただいた御製であると思ひます。

平成六年の合宿でのご講義の一部です。私もかつて学生の時に参加した合宿で、「全知全能の唯一絶対神（ゴッド）を奉ずる西洋」と「自然現象や生きとし生けるものの中に神をみる日本」との違いについて、小田村先生のお話によつて大きく目を開かされました。「西洋からGODといふ概念が入つてきた時、カミと呼んでしまふといふ重大な誤訳をしたために現代に到るまで混乱し、日本人は自分で自分の大事にして来たものが分からなくなつた」といふご指摘は、その後キリスト教・ユダヤ教圏の人々とビジネスをする際にも幾度となく思ひ出すことになりました。

最近アメリカでベストセラーになり日本語版も出た『小説聖書旧約篇』といふ本があります。聖書を解りやすく小説仕立てにしたもので気軽に読めますが、ゴッドの本質を表す場面が随所に描かれてゐます。

アブラハムとイサクの話では、GODからアブラハムが「息子を^{いけにえ}生贄に差し出せ」といふ啓示を受けます。父のアブラハムは悩んだ末、やはり絶対神に背くことは出来ないといふ息子を祭壇の薪の上に乗せて、今しも剣で突き刺さうとした時に、GODが「もうそこまでいい、お前の忠誠心はよく分かった」と称へ、代りに子羊を生贄にします。とにかくGODの方も人間が自分に忠誠を誓ふ限りは、その人間とその部族を祝福し、繁栄させるといふ物語です。一方で、全知全能のGODに背いた場合は非常に厳しく決して許されない。末代まで皆殺しといった話も度々出て参ります。

このやうなゴッドと人間との関わり方は「契約」の基本を成してゐると考へられますし、聖書の時代だけでなく、欧米の近代思想もその上に築かれてゐることは間違ひないでせう。一例としてアメリカの独立宣言を取り上げてみます。

We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain unalienable Rights, that among these are Life, Liberty, and the pursuit of Happiness.

全ての人間は Creator (造物主・ゴッド) によつて平等に造られたとアメリカ独立宣言は冒頭に謳つてゐます。そしてゴッドが与へてくれたのが、生存・自由・幸福追求等の諸権利です。本国イギリスから独立を勝ち取つた彼らが称へるのはゴッドであり、言はば「契約」してゴッドから貰つたものとして基本的権利を位置付けてをります。

That to secure these rights, Governments are instituted among Men, deriving their just powers from the consent of the governed.

Government (政府) は、それらの権利を守るために、統治される人民側の同意を得た上で成立したといふのです。上記のやうにゴッドと人間の契約が一つあり、今度は政府と人民——人間同士の契約となります。

ゴッドとの契約は絶対ですが、人間同士の方は、政府が負託に応へられない場合は人民の方はいつでもそれをひつくり返し、新しい政府を作る権利を有してゐるのです。独立宣言の精神はアメリカの憲法のみならず、現代の政治・思想・ビジネスをも支配してゐる。旧約聖書は現代にも生きてゐると言へませう。

一神教を奉ずる西洋文化の中核イギリスとアメリカに十年以上住み、多くの友人も出来ましたが、やはりどこか相容れない気持ちには抜けませんでした。そこで私を生み育ててきた日本文化、日本の心とはどんなものかに、改めて関心が移ります。

五、日本の心

次に引用しましたのは葉室頼昭さんの文章です。元来は西洋医学の医師ですが、その後漢方も修められ、今は春日大社の宮司といふ方です。『神道』の「このころ」と題する近刊の中に、ゴッドと対照するやうに日本の神様のことが出て参ります。

外国の王朝は、武力で征服すると、その宗教から文化まで全部滅ぼして、自分達の信じる神様、自分達の文化を押しつけて併合していった。それが普通のあり方なのに対し、

（大和朝廷は）世界でまれなるやり方をやっただけです。というのは、奈良なら奈良に都を置いて国を治めるために、本当だったらほかの部族を滅ぼして、大和朝廷の天皇の宗教を押しつけるはずで、ところがそれをやらないで、それぞれの氏族の神さまを全部朝廷に

持ってきた。(略)自分が拝んでいるところの祖先の氏神さまを全部天皇が祀ってくださる。いま宮中に、賢所かしこころと皇霊殿と神殿と三つのお社がある。賢所あまてらすおみかみというのは天照大神の斎鏡、皇霊殿は代代の天皇の御霊、神殿は日本全国の八百万やおよろずの神さまを祀つてあるところです。

古代より日本の各地に拠つたそれぞれの氏族が大事にしてゐた神様を全部、現在でも宮中で、天皇陛下がお祀りしてをられる。かういふことは世界のどこにもないさうです。

八百万の神々については、海外で「君たちは唯一のGODしかないけれど、僕らは八百万の神様を持つてゐるんだ」と説明すると大いに驚きます。全知全能のゴッドと付き合ふために、全神経全生命を賭して歴史上を生きてきた民族にとつて、八百万ものゴッドがゐたら恐ろしくてとても生きてゐられないといふのが、一神教信者の実感です。そこだけ見てもやはり日本人が思ひ描く「神」と、彼らのゴッドは明らかに違ひます。違ひをまづしつかり認識するところから出発すべきかと思ひます。

昨年の合宿開会式で小田村先生は「悠久の古から続いてきた日本をもう一度見直し、そこから立ち直る道を見出さなければいけない。さういふ段階に立ち至つてゐる」とおつしやいました。それはとりも直さず、この合宿で皆さんが古事記を読みながら、遠い遠い祖先の

声に耳を傾けるところから始めることだと思ひます。

それから短歌を作ることもまた、そこに連なる道です。五七五七七といふ定型の中で、日本人は千年以上も前から、自分の気持ちを言葉に託するといふ作業を連綿と続けてきてをります。その伝統の流れに、皆さんも歌を作ることにより一歩足を踏み入れて下さい。

六、国に誇りを

現代日本の問題で今一つ、是非皆さんに考へて頂きたいのが、元伊勢神宮少宮司の幡掛正浩さんの一文です。「泰山重からず君命重し 一髮軽からず臣命軽し」といふ漢文の一節に對して、

今日の日本ではそれが全く逆さまになつた。「国権重からず人権重し」その人権人命も、
比喩とは言へ「地球よりも」といふことが公然罷り通つてゐる。(略)だが、思つてもみる
がいい。国が滅びてどこに人権を保障してくれる權威がこの地上にあるといふのか。人権
人命といふものは、国権国力といふものの懷ふところに抱かれ育まれてはじめて、やうやくよちよ

ちの独り立ち、独り歩きが出来るものであり、その反対ではない。

と指摘されます。だからこそ国に一旦緩急の時来たればその危難に国民が赴くのは当然の義務であつて、母国はそれに備へ愛児（国民一人一人）を、全身全霊をこめて教育すると続けられます。

つひこの間の大戦で、祖国の暗い運命を予見しつつ、最愛の父母妻子を置いて戦線に赴き、再び還ることなかつた三百万将兵のことを想起してほしいと同胞一人一人に切に願ふ。もし一人の人命が地球より重いといふのなら、地球の三百万倍の価値ある人命が、そこに赴き、そこに斃れたといふ厳肅なる事実、それが祖国といふものの重みであることを。

国があつて初めて人権があるといふことは、日本において意識さへされません。国が潰れることが皆さんの脳裏にないからです。しかし、国が実際に潰れた例は近年でも幾つもあります。

八九年の秋ベルリンの壁が崩壊して一年半後に当地を旅行する機会がありました。旧西ベ

ルリン側の目抜き通りは活気が溢れ、露店で立派な外套や軍帽が二束三文で売られておりました。それは、一年半前まで權威の象徴であったソ連赤軍の兵士たちが着用してゐたものでした。彼らは祖国ソ連の崩壊とともに、見捨てられた民になつた。まだ十代とおほしき元赤軍兵士はトラックの荷台でアルバイトをしてゐました。旧兵舎はガラス窓がほとんど破れ、急速に荒れ果ててゐました。大国ソ連を祖国として生まれ、そこを信じ誇り高く任務に就いてゐた青年たちは、ある日突然国を失ひ流浪の民としてそれからの人生を送るしかない、こんな悲惨なことがあるでせうか。

チベットといふ国も地上から姿を消してしまひました。亡命中のペマ・ギャルポさんのお話しを伺ひましたが、チベット人は本当にやさしい民族で虫を殺すのもためらふやうな生活をしてゐたので、中共軍が侵略してきた時にも武器を取つて立つといふ発想すら中々持てなかつたさうです。今やチベット人の子孫を残さないため強制不妊手術まで施されるなど人権蹂躪の事実がいろいろあるさうです。

残念ながら世界の現実の中では、まだまだこれが常識で、多くの人々がそれと戦つてゐることも頭に留めた上で、幡掛さんのおつしやつた「三百万将兵」のことをもう一度想つてみて下さい。「無駄死にだつた、犠牲になつた、騙された」と論評するのはたやすい。しかし

それは後世のわれわれ側の基準でその言葉を吐いてゐるに過ぎず、「地球の三百万倍の価値ある人命」を賭して国を守るために戦つた方々の気持ち、そちら側を想ふことから出発するの
 が、正しい学問的態度ではないでせうか。

十四年間の海外勤務を終へ、平成六年春に帰任しました。久し振りの東京暮らしで戸惑ふことも沢山ありましたが、中でも一番大きな衝撃は、日本の子供達の表情が、あるいは目の色が非常に暗くくすんでゐたことです。仕事や旅行でこれまでに三十数ヶ国を訪ねました。それぞれの国にいろいろな子供達が生きてゐます。ナイジェリアの村で、鼻水をたらしながら裸足で牛を追ふ少年のことも思ひ出します。ニューヨークのマンハッタンでは、ミンクのコートを着て運動場で遊ぶユダヤ人富豪の娘たちも見かけました。校門前に並んで始業を待つ間も、熱心に読書するベトナムの小学生達。自然環境や貧富の差にかかはりなく、世界中で子供たちの目は輝いてゐますよ。特別に抑圧されるとか飢餓状況にない限り、顔も生き生きと明るいですよ。

それに比べて、祖国日本の子供たちは顔色が冴えません。飽食の中の栄養不良、成熟下の目標喪失等々評論家は子供達の心身の課題をあれこれ説明するでせう。しかし最大の原因は「自分の国に誇りを持てる教育」が全くなされてゐない所にあると思はれてなりません。だ

とすれば、現状を招いたのは子供達といふよりむしろ大人のせゐでせう。必要なことを教へて来なかつたのだから。

でも諸君は「教へられなかつたから、僕らのせゐではない」といふ年齢ではないよ。今の日本がをかしいとしたら、諸君の力で勉強し、本来の姿に正して行くこと。それが日本の青年の生き方だと思ひます。

小田村先生は、この「合宿教室」を四十三年間、「次代を担ふ真正なる日本人を育てる」といふ想ひだけで続けて来られました。我々は力不足ながらも、何とか受け継ぎたいと今四十四回目に立ち向かつてをります。小田村先生が亡くなられて直後の合宿に縁あつて参加した皆さん、先生のお気持ちに應へてまづ一步を踏み出して下さい。言葉一つ一つを大事にする学問をご一緒に始めませう。

講義

アメリカニズムとどう戦ふか
——市場原理と共同体原理の大激突——

拓殖大学日本文化研究所所長

井尻 千男



首都機能移転論の裏にある日米関係 —— 哲学なき遷都論 ——

真善美を無視したバブル期の消費文化

市場原理といふ名の狂暴なアメリカニズム

—— 「アメリカの苦悩」と「僥倖の日本」 ——

消費者本位論の矛盾と落とし穴

ユダヤ的「共同体原理」の中味

—— ダブルスタンダードを貫いて来たユダヤ資本 ——

国家共同体の永遠の二元論

—— アジアの通貨危機・ユダヤ人ゲッター・チャイナタウン ——

共同体原理こそが経済活力の基盤

首都機能移転論の裏にある日米関係

——哲学なき遷都論——

おはやうございます。

さて、今日は「アメリカニズムとどう戦ふか——市場原理と共同体原理の大激突——」といふテーマを掲げました。このテーマは近年私が物を考へる時の、まあ、私なりの枠組みとして非常に大事にしてゐる課題でございます。その理由を何とか皆さんにお伝へできたらといふ風に思ひます。

例へば首都機能移転論に、なぜ私が反対するのか、といふやうなことをちよつと申し上げてみますと、本日のテーマが浮き彫りにできるかと思ひます。首都をどうするか、これは戦後の日本にとつて重要な問題でありました。ただし、今日云はれてゐるところの、首都機能移転、これは日米関係が大変深く影を落してゐるんですね。ご存じのやうに一九九〇年、その頃金丸信さんといふ、自民党の実力者が中心になりました。首都移転させようといふ国会決議をしたんです。しかし、実はこの裏には、日米関係がもの凄く色濃くあるんです。とい

ひますのは、ご存じのやうに、日米の貿易収支が大逆転をしたのが一九八五年。大逆転といふのは当然日本側が大幅な黒字です。だいたい年間の貿易収支が一二〇〇億ドル位の黒字になる訳ですが、そのうちの五〇〇億ドル位がアメリカとの黒字なんです。ですからアメリカはご存じのやうに、日本の内需拡大を迫つて来た。内需を拡大すれば貿易収支は均衡するだらうと、まあかういふことがいはれました。とにかく日本に最大限の内需拡大する方策はないものかといふ議論が起つてゐる頃、ならば首都を移したらこれは凄い内需拡大になるだらうと、さういふことで金丸さんはいはばゼネコンその他土木事業をやる建設族議員のドンです。その金丸さんが与野党を問はず国会議員を集めて、首都機能を移転しようぢやないかと国会決議をしたのです。ですから、日本の歴史、あるいは、政治哲学、さういふものは一切議論してゐない。それがそのまま今日に続いてゐるんです。スケジュール通りにいけば、この秋には候補地が決まります。そこで私は何年も前から「遷都その時にあらず」と申し上げてゐるんです。なぜ「遷都その時にあらず」といへば、一国の首都を論ずべき歴史観もなければ、政治哲学もない。かういふ単なる機能主義で、首都を移してたまるものかといふことを述べてゐる訳です。私がさういふ言論をしてをりますので、小渕総理も少々気になるやうでございまして、私のところにお電話がありました。その時私が申し上げましたことは、



首都移転には反対の論陣を張つてをる。もし、総理がこの首都機能移転といふことに関して、先送りしたいとか、スケジュールを変へたいとかいふことが、ありましたら私はいつでもこのプログラムをつぶすための悪役を引き受けます、といふふうに申し上げました。首都機能移転といふやうなことの裏にも、凄惨な日米関係の問題があると、さういふことをご想像頂きたいのです。

私が日本の東京といふ首都を守るに値する都市だと思つたのは、実は、オーストリアの首都ウィーンを歩いてゐる時なんです。私は現在、大学では「都市論」と「昭和精神史」といふ二つの講義を担当してゐますが、私の都市論といふのは、いはば、総合社会学的都市論と自分では言つてゐますが、建築学や都市工学とは別の人間論、あるいは社会科学を総合的に動員して、都市とは何か、人間はなぜ都市を作つて来たのかといふやうな内容です。

当然今日お話する共同体といふものは、都市論にとつて最も重要なテーマなんです。私は今から五、六年前にヨーロッパの主要都市を取材して廻りました。もちろん日本経済新聞にをりましたので、そのことは後で新聞に書きました。

ウィーンにはリングロードといふ円廻する道路があります。これは元は城壁があつたところ。一周四キロを歩いてゐた時、あつ、皇居の周辺が一周四キロだといふことに思ひあつたんです。ウィーンはその四キロの内側に聖ステファン教会や新宮殿やいろいろの旧市街、まあいはば、それは集積回路のやうな非常に稠密な都市を四キロの中で作りあげた。これはこれなりに立派な事ですが、思ひ描く自分の祖国日本の首都東京の皇居の周辺が四キロで、かつて江戸時代は、いはば政庁、まつりごとを行ふ政治の場所だつたわけですが、今や、照葉樹林に覆はれた森とそこにプリイストキング、祭祀王がをられる。天皇をエンペラーと呼ぶよりも、プリイストキングと呼ぶ方が実態に即してゐます。このことに関しては村松剛先生が或る時おっしゃつた。やはり、プリイストキングと言はなければいかんだらう、エンペラーといふ風な訳語で言ふと誤解される。日本の天皇といふ存在はさういふものではないはずだ。一周四キロの内側は鬱蒼たる照葉樹林が茂つてゐる。その中でプリイストキング、祭祀王たる天皇が、この国、この民の安寧と豊さを祈念してをられる。なんとウィーンと対

照的だらうかと思ひました。

そのことに今さらながら気が付いて、実はウィーンで感動してをりました。東京のことを思ひましてね。しかも、あの黒松の多いあの皇居前広場のスケールと美しさはこの都にもない。皆さんは、たぶん日本人は何かスケールが小さい、空間意識が狭い島国だ、山国だ、いろいろなネガティブな先入観を持つてゐると思ひます。韓国のある文化人は、小さく小さなのが日本人だとして、『縮み思考の日本人』といふ本を書いてゐる。違ふんです。日本人の空間意識のスケールと美しさは、世界に冠たるものだといふことを私はヨーロッパの旧帝国を巡りながら気が付いたんです。あれほど立派な空間の広さと美しさを持つてゐるのは日本だけだなあ、我々の先達は凄かつたんだなあと気が付いたんですね。有名な道路とか、美しい広場はヨーロッパには沢山あります。ただ、今申し上げたやうなスケールといふことからいふと、皇居前広場は、これに匹敵するところがないと言つてもいい位の広さと美しさを両方兼ね持つてゐる。私はウィーンで遷都論をつぶさうと思ひました。つまりこの東京の歴史遺産、守るに値するぞと、これを守れなかつたら、私自身が情け無いといふ位の思ひにいたつたのです。

よく日本人はスケールが小さい、トランジスタラジオとか半導体を作らせとけばいいんだ

などと、ある種の軽蔑をこめたネガティブな否定的な言動をする外国人がをります。しかもそれに歩調を合せるやうに、日本人の中にも日本人はスケールが小さいんだよ、あの茶室を見れば判る、二畳台目とか、一畳台目などといふちつちやな茶室を作つて喜んでゐるのは日本人だけだよと言ふ人がある。しかし、それはいかにも日本文化の本質を知らないんぢやないかと思ひます。東大寺の大仏殿、あれは間違ひ無く木造建築の最大限のスケールと美しさを持つてゐる。東大寺に行くたびに私はこれを作つた、あのスケールの美しさを作ることのできる人間が、一畳台目、二畳台目の茶室を作つてゐるといふことを忘れてはいけないと思ひます。極大と極小といふ二つの極を探求した日本人。かういふ風に考へませんと、茶室、茶の湯といふものが日本人の中で持つてゐる意味が判らない。何でもかんでも狭いところに入つて、小さく構へるわけではないんです。

皇居前広場といふものが世界に類のない広さのものだ、あるいは、東大寺大仏殿は世界に類のない位に大きな木造の可能性の極限を極めたものであつて、それを作り上げた国民が片方で茶室といふものを作つて、そこに自分をいはば、閉ぢ込めるやうにして、瞑想し、美的感受性を研ぎ澄まし、人とのコミュニケーションを大事にして来たんだと。かういふ風に考へないといけません。

真善美を無視したバブル期の消費文化

さて、一九八五年といふ年は、年表を開くとプラザ合意と書いてあります。竹下登さんが大蔵大臣の時です。そこで円高基調を是認するといふ形で、つまりドル安で合意した。ドルとの関係でドル安円高に誘導し、かつ、先ほど言つた内需を拡大すれば貿易収支は均衡するだらうと、かういふ訳です。皆さん覚えてゐるかどうかでせうか、中曽根内閣の頃に前川レポートといふのが出たんです。この前川レポートといふのは、日本の内需を拡大するとしてゐる。前川春雄さんは日銀総裁です。前川レポートがバブル経済がいいことなんだといふ論拠になつてゐたんですね。それから一直線にバブルがどんどん広まつて、それがはじけるといふ形で今日の不況があるわけですが、その前川レポートも当然ながら日米関係の所産なんです。私の敬愛してゐる飯田経夫さんといふエコノミストは前川レポートが出た時から、「いや、内需拡大したとて日米関係の貿易収支が修正されるはずはないぢやないか、修正されるとしてそれはほんの微々たるものだ」といふ批判をしてゐました。

飯田さんはバブル経済の初期から批判してゐた数少ないエコノミストです。私は日本経済

新聞にをりまして、飯田さんに大変に親しくお付合ひ頂いてをりましたので、よくその頃の気分が判るんです。私自身の事を申し上げますと、『消費文化の幻想』といふ本がありますが、これを書き始めたのは、実はそのブラザ合意の年の一九八五年なんです。何かがかしいと思ひました。例へば一九八五年といふと、昭和六十年ですが、今のお若い世代が、いくつ位だつたんでせうか。とにかく、面白ければ全てよし。善悪美醜は問はない。何がいいか、何が悪いかなどといふことは問はない。何が美しいか、何が醜いかも問はない。ただ面白ければ全てよし。この台詞を如何に多くのエコノミストが口にしたことか。勿論複雑なレトリックは使ひましたが、基本はさういふことだつた。その頃からテレビといふものが徹底的に低俗化して、ただゲラゲラ笑へばいいといふ感じになつた。昔は芸で笑はせるんですが、テレビは本人だけがゲラゲラ笑つてゐる。たいしたギャグを言つてゐる訳ぢやないのによく笑ふ。笑つてみせる、お互ひに。いいギャグなんてさう出るもんぢやないから、月並みなギャグでも一応笑つてやらうよと、自分があいつに笑つてやれば、俺のギャグにも笑つてくれるだらうといふ、まあさういふことになる。

多くのエコノミストたちが、善悪はそれぞれの個人の価値観だからといつて個人の価値観の中に閉ぢ込めてしまふ。美しいか醜いか、それも個人的な価値観だからといつて、皆個人

に閉ぢ込めてしまつた。それがバブル経済の時代の文化状況だつたんです。私はそれがこの国をだめにすると思つた。当時はまだバブルといふ言葉すら流布されてをりませんでした。これは奇妙だな、をかしい、異常だといふことで、「消費文化の幻想」といふ文章を短期に連載して、それを一冊の本に纏めたのでした。正しくバブルの最盛期。当然、私は今言つたやうな面白ければ全てよしとは一体何事であるかと。こんな事を数年やつてたら、ほとんど文化が破壊されるといひ、教育そのものが荒廃するよといふ危機感を覚えたんです。

教育といふものは、少なくとも真善美について語り、それなりの信ずること、何が美しいかといふことは個人にまかせられないといふところから発してゐます。つまり個人といふものは、そんなに強くないんです。歴史の遺産を受けて初めてすばらしい文化といふものを感じ受できるんですね。例へば皆さんのファッションでもさうですよ。あるいは美術でもさうです。ポップアート、音楽でもさうですね。皆、個性、個性的だといふ言葉を、安易に使ひ過ぎます。私の様な古い人間といひますか、いや、私は古い新しいんぢやなくて、申し上げたいのは、例へば美術全集、全二〇巻、この中には沢山の美の系譜が収められてゐる。だから、今非常に革命的で新しいファッションであるといつても、少々歴史を辿つていくと、美の系譜に必ず突き当たるんだといふことです。ある時かういふことがありました。山本寛斎

といふ非常にサイケデリックな前衛的なデザイナーがゐますね。ある結婚式で隣合はせになつた。その時私はひとこと、「山本寛齋さん、あなたは土佐の絵金（絵師金蔵）」といふ画家に関心があつたんでせう」と言つたら、膝を叩いて喜んだ。「実は自分は少年時代に、絵金の絵を見てデザイナーになることを決意したんです」と。今日まで私の顔を見て絵金といふ言葉を出してくれたのは井尻さんが初めてだと大変うれしさうでした。つまり一見ルーツがないやうにみえる山本寛齋のデザインも実は異端の画家絵金といふものを少年時代に見たその経験が根底にあるといふことを言ひたいのです。あきらかなルーツがある。例へば、森英恵さんといふデザイナーに向かつて、「森さんは琳派ですよ」と聞いてみました。桃山時代の依屋宗達や尾形光琳らのああいふ日本の装飾的な美しさを芸術にまで高めた琳派の系譜になつてゐると思つたのです。森さんは「うれしい、良く言つてくれました」といふやうな具合です。

一見新しく見えるものが、この系譜といふ流れの中に収つてゐるといふことなんです。唯、それが時代の表層に浮き上がったたり、時代の底に沈んだりする。ここにゐる皆さんだつてあなたの感受性、あなたの好みはあなただけのものだとお考へになるのはをかしい。何処かの美術全集でいへば、何頁かの項目につながるやうな、流れの中にあるといふことに気づいて

欲しいんです。それは非常な喜びなんですよ。

人間を考へてみますとですね、まあ、最近のやうに遺伝子工学など遺伝子についての学問が進みますと、長い間の遺伝子の旅の途中なのかもしれないかもしれません。今、我々があるのは、さういふ途中にあると考へますと、我々がなぜ自分たちの文化といふものを大事にしなくちゃいけないかといふ理由もわかってくる。あるいは、自分を発見するといふことがどういふことなのかといふことも判つてくる。密かに流れてゐるこの系譜と出会ふ。あるいは、流れてゐるものを自分が感ずることが出来るといふのは喜びなんです。さういふのが本當の文化であるにもかかはらずそのバブルの時代といふのは、好感度人間とか新人類とか、さういふ言葉を使つて、新しければ全てよし、面白ければ全てよし、この二つだけだつたんです。長く続くはずがありません。

市場原理といふ名の狂暴なアメリカニズム

——「アメリカの苦惱」と「僥倖の日本」——

この新しければ全てよし、面白ければ全てよしといふのは謂はばマーケットの覇権なんで

すね。バブル当時、エコノミストといはれる知識人たちのほとんどが、広告代理店の電通や博報堂の代弁者みたいなものの言ひ方をしてゐていいのかといふのが私の憤りだつたんです。さういふ時代に、円高ドル安で日本の輸出を抑へておいて、規制緩和で内需拡大をせよと強硬に迫るアメリカといふ非常に厄介な相手といはば経済の戦争が峻烈になつたんです。

今、グローバル・スタンダードとかポーターレス・エコノミーといふ言葉を皆さんよく耳にすると思ひます。ポーターレス、つまり経済には国境がないんだといふことですが、幻想です。それは、アメリカン・スタンダードの言ひ換へで、アメリカニズムのことだと、これはもう多くの方が直感的に判つてゐることです。しかしアメリカニズムだと言つてしまつたら、追隨する論拠がなくなるから、グローバル・スタンダードとか、あるいはユニバーサルイズム、普遍性が高いんだといふことでそれを正当化する。もし私がアメリカの多国籍企業のリリーダーだとしたら、やはりその業界で世界的な覇権を握らうとするでせう。例へば、IBMのやうな会社がコンピュータに関して、覇権を握る。あるいは、アメリカの自動車産業、かつて栄光のアメリカの自動車産業の指導者たちは、こと自動車に関しては、世界の覇権を握るために熾烈な戦ひをしてゐる訳です。しかも、アメリカのやうに、七つの艦隊を七つの海に浮かべてグローバルに、まさしくこの地球儀を抱き抱へてゐる姿をイメージして下

さい。これがアメリカの世界観です。かういふ国が、ボーダーレス・エコノミーとか、グローバルニズムと言つても資格はあるなど実は思つてゐる。アメリカだけがこの二つの言葉を言ふ資格があると。ところがそれと全く正反対の国である日本は領空領海から一步も出ないで、専守防衛だと言つてゐる。外国に行つた日本人がどう誘拐されようが何の手出しも出来ない。かういふ国が、こと経済に関してはグローバルニズムだとか、ボーダーレスだとかよく言へたもんだと思ひます。資格のない人間が言つてゐるんですよ。これが、私の基本的な認識です。

アメリカといふ国が言ふことを、日本人が言ふことをかしさです。アメリカの主張するこの自由主義経済といふものはもちろん、優勝劣敗、優れた者が一人勝ちする世界です。沢山の人間が争つて一人が勝つ。ビル・ゲイツのやうな一人の英雄のためにあるマーケットです。これはアメリカ自身にとつても実は悲劇なんです。一九六〇年代のアメリカは、公民権運動によつてあらゆるマイノリティーが自己主張し、権利を主張するやうになつた。この時代を振り返つてみないといけないんです。私のアメリカ論は、グローバル・スタンダードとユニバーサルニズム、普遍主義といふのはアメリカのいはば悲劇を伴つてゐるといふことなんです。かつてWASP、つまり白人、アングロサクソン、プロテスタントが堂々たる覇

権を握り続けてゐたアメリカで、公民権法以降あらゆるマイノリティーが叛乱を起こしました。さて、その時、何が起つたかといふことが大事なことです。WASPたちは考へたんです。マイノリティーを含めて徹底的に市場メカニズムを通じて覇権争ひをやらうぢやないかと。さういふふうにかつたのがアメリカの新保守主義なんです。なぜあれほどに市場原理を強調することを保守主義と呼ぶのかといふ理由が見えてくるんですよ。実を言ひますと、今までのWASPが統治したアメリカにはある秩序があつた。ピラミッド状の秩序があつた。しかし、あらゆる民族、マイノリティーが叛乱を起こして、自己主張を始めた。ならば徹底的に、自由主義で覇権争ひをやらうよと。その結果、アメリカは旧WASPとユダヤ人が覇権を握ることになるんです。ですから、アメリカがポーターレスだと言つてゐる裏側に、さういふマーケット・メカニズムで決着を付けようと、国内で抗争をしてきたアメリカ人たちの考へが反映してゐると思ひます。

日本人が一番注意しなきゃいけないのはアメリカなんです。アメリカはいま申し上げましたやうに、民族のつぼ、人種のつぼ、これを私はポスト・バベル国家と言つてゐるんです。バベルといふのは、旧約聖書の創世記に出てくるバベルの塔の逸話です。もともと人類は一つの民族で、一つの言葉を話してゐた。一致協力して高い天に届くやうな高い塔を作つた。

その事を神は人間の傲慢として罰し、この塔を破壊します。その時から沢山の民族と、沢山の言葉が世界に散らばつたといふのが、バベルの物語なんです。つまり、沢山の民族と、沢山の言葉で地球に散らばつた民族がアメリカといふ、啓蒙主義的な実験国家に再び集まつてきたといふ訳です。アメリカといふ国はさういふ意味では人類の苦悩を引き受けてゐる国です。ある意味では、啓蒙主義といふものの樂觀的な実験をしてゐる国です。

日本は逆ですね。私は日本をブレ・バベル国家、バベルの塔以前の国家だと思ひます。一つの民族が、一億二千万のスケールで周囲を海に囲まれた国土に住んでゐることは、旧約聖書のバベル以前です。これはもうなんと言つても奇跡に近い歴史的僥倖なんです。さて、さういふ国柄が日本と対照的なアメリカはポスト・バベル国家の苦悩を一身に引き受けて、多くの民族、沢山の言葉を持つた人たちが覇権争ひをしてゐる。そこで作り上げられたマーケットと、日本の様に非常に恵まれ過ぎた条件の中で作られたマーケットとは同じ言葉であつても意味が全く違ふんですね。日本の場合、ある意味では、幸福すぎる程、古風な共同体の原理があるんです。

ですからアメリカは苦悩の結果の選択として、すべてをマーケットに委ねて決着をつけようと決意したんです。そのことを世界に及ぼすことが、今度はアメリカの覇権主義につなが

る訳ですね。覇権主義といふものと無縁な普遍主義とかグローバル・スタンダードといふものはないのです。ニュートラルで、全く中立的に、覇権主義と無縁な普遍主義といふのは、多分ないのです。自然科学はどうかといふ議論があらうかと思ひますので、その辺は譲るとしましても、覇権主義と無縁な普遍主義といふのは考へられないと思ひます。大英帝国、アングロサクソン、アメリカ合衆国が普遍的なシステムをつくつた。そしてその国力といふものが普遍性を保障してきてゐる。日本は、世界に対して覇権を唱へるといふことに、非常に臆病になつてをります。実は、経済の世界においても覇権といふことになる、ちよつと躊躇します。日本は当然なんです。グローバル・スタンダードとか普遍主義といふものは、さういふ謂はばアメリカ合衆国が持つてゐる軍事力と、もう一つは多民族国家の苦悩の両方を含んだシステムなんです。それを日本のやうに例外的な僥倖な国が大歓迎してゐること自体がをかしいのです。

消費者本位論の矛盾と落し穴

私は例へばこんなふうなことをよく申し上げます。国民といふのは国家共同体の成員です

ね。それと普通の常識的な意味での市民は地域社会の構成員として、義務と権利を持つてゐる。ですから古代ギリシヤにおいて市民権を取るといふことは、大変条件も厳しいし、当然、兵役や納税の義務もあるし、その他教育や宗教その他いろいろな義務があると同時に、共同体が守つてくれるといふ、さういふ義務と権利の表裏一体のものとして、市民権があつた。ところが最近消費者といふ言葉がはやり出した。消費者といふのはコンシューマーですが、これが非常に問題なんです。国民でもなく、市民でもなく、消費者なんです。いいですか、日米関係の交渉事を見てゐますと、しばしばコンシューマーといふ表現が出てきます。例へば規制を撤廃して、地球上のあらゆるところで、生産された安い物を自由に輸入出来れば、日本のコンシューマーが得をしますと必ず言ひます。日本の国民が得をしますといふ言ひ方はしない。新聞報道でも必ず日本の消費者が得しますといふアメリカの政府高官の話が載つてゐる。日本が規制緩和すると日本の消費者が得をしますと言ふんです。消費者といふ概念は共同体への帰属意識がなくて、マーケットのメカニズム、価格メカニズムに敏感に反応する。自分の損得だけで行動しようとするのがコンシューマーの概念ですね。もちろん、製造物責任を問ふ消費者運動といふものがありますよ。これはちよつと別におきませう。経済学並びに、日米関係の交渉事での消費者といふ言葉の使はれ方は、日本人がとか、国民がと言

つちやいけないんです。日本はいらないんです。

貿易の自由化で、例へば農業を例に考へてみませう。農民にだつて日当一萬何千円かを保障してやりたいと思ふでせう。しかし、通貨価値が日本の十分の一、二十分の一、五十分の一の国の農産物の方が安いに決つてゐます。つまり食糧に関する自由化論の背後にあるのは、安い農産物を輸入すれば、消費者が得しますよとかいふ理屈でせう。ここにも凄い落とし穴があるのです。共同体の原理を引き受け、それを甘受するのが国民であり、市民だとすれば、消費者といふのは、マーケット原理で利を漁る、得をしようとする。ですから私はこの消費者本位といふ言葉がやはり出した時から、これを批判して来ました。特に、政治家が、日本新党、かつて細川護熙さんが作つたあの最初の綱領らしきものには、消費者といふ言葉が何回も出てくるんです。一国の国政を論ずる時に易々と消費者などといふ言葉を使つて新しいが姿勢が全然だめだと思つてゐました。

消費者本位の政治をやるといふ事自体が、もの凄い矛盾なんです。一国の政治は、国民の為にどういふ政治がいいかといふ事をやればいいんです。消費者本位だつたら政治をやらなくていいんです。国境もなくいいんです。関税もなくして、もう全てどんどん安い物を入れてしまへと。極論して単純化するとさういふ事になります。ですから、共同体の原理と

いふものと、市場原理といふものは、非常に乖離してきたんですね、アダム・スミスとか、ハイエクのやうな自由主義の先達が考へてゐたマーケットといふもの、市場といふものもはもう少し今とは違ふ。ハイエクなんかは自づと生まれる自生的な社会秩序といふものがあるといふことを前提にしてゐるんです。ある程度の共通の価値観を持つてゐるマーケットに於いて、自由主義は非常に有効に機能するといふ事です。これが自由主義の古典的な形なんです。自生的な社会秩序が全く違ひ言葉も通じなければ、共通の価値観もない、通貨価値も違ふ、さういふ国同士が自由主義経済をやつてうまくいくとは言つてゐないんですね。ですから共同体の原理である自生的社会秩序とマーケットが重なつてゐれば、自由競争といふものが非常にいい調和をもたらす。共同体原理と市場原理がうまく重なつてゐる、まあ完全に重なることはないんですが、重なつてゐる時は、自由主義経済といふものが有効に働く。ところがこの市場原理がグローバル・スタンダードとか言ひ出して、社会的な共同体原理と乖離したのが現代だと思ひます。これが本日のタイトルの意味なんです。

私はこれからも市場原理を批判します。「おまへは社会主義者か？」と思はれるかも知れませんが、違ふんです。自由主義が今、どういふ局面にあるかといふ事を、この二つの言葉で申し上げたいのです。さて、さうなりますと、コンシューマリズム、消費者本位といふの

を進めて行きますと、それはある意味では、もの凄い自己肯定、欲望肯定につながります。その欲望の肯定といふのは、必ず共同体と衝突します。まづ、例へば共同体のコアには家族といふものがある。家族は何が原理かと言ふと、愛と贈与です。愛情といふものと、あの贈与税の贈与ですね、与へることです。無償で与へる。ここではマーケットの原理はないんです。しかしさういふ愛と贈与の経済の中で幸福を噛み締める事が出来なくなつた少年、少女たちが盛り場に出て、援助交際をやつたり、恐喝をしたりする訳です。私は、援助交際の性的なものと、少年のナイフといふものは同じ兇器だと思ひます。ある意味では、女性性は性的な兇器を持つてゐる。男はそれがないからナイフを持つといふのが、私の仮説でございますが、それは、今までの家族なり、学校なり、地域社会なりの原理といふものが衰弱して、もうそれぞれが勝手にミーイズムで、生きようと、さういふ風に言はれた時から起つた大きな現象だと私は見てゐるんです。ですから、ミーイズムとマーケット至上主義あるいは、市場原理主義とは非常に近いんです。事実、アメリカでミーイズムといふ現象が起り、日本に紹介されたのは、八〇年代に入つた頃でした。ミーイズムといふものが何かすばらしい事のやうに言ふ。それぞれが自己主張しなさい。誰に義理立てすることもありませんと。そこで起つた事は何かと言ふと、家族、地域社会、国家などの共同体が皆外される。ミーイズムの

私と人類しかないんですよ。皆勝手にやればいいとなる。面白ければ全てよし。何をやっても「カラスの勝手」といふことになる。

ユダヤ的「共同体原理」の中味

——ダブルスタンダードを貫いて来たユダヤ資本——

さて、人類といふ概念と私しかなくなつてどうなつたか。テレビのニュースキャスターが人類のためになんて言ふと、もつともらしく聞こえたりする。私といふ小さなミーイズムの極と人類といふ実体のない観念の二つだけになつて、中間の共同体がすべてなくなつたといふことが、実はグローバリズム、あるいはポードアレス・エコノミーといふものと平仄が合つて来るんです。我々が共同体を失つて本当に生きていけるのかといふ設問をそれぞれの国民に問ひたいのです。例へばユダヤ人は歴史的運命に翻弄されて、国を持たない民として、悲劇の二〇〇〇年を生きてきた。そのユダヤ人の「共同体の原理」について少し考へてみませう。

あのマックス・ウェーバーに『古代ユダヤ教』といふ本があります。もう一つ有名な『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』といふ本も、岩波文庫に入つてゐる。人種的偏見は一切なくて言ふのですが、マックス・ウェーバーがユダヤ資本といふものをどう考へたかといふことに非常に関心があります。マックス・ウェーバーが『古代ユダヤ教』を書いたのは、第一次大戦直後です。つまり、あの戦乱の時代にユダヤの資本がどういふ風に動いたか。敵、味方の差をなくし、国境を無視して、資本が動いたことを、マックス・ウェーバーは気にしたやうです。

ここから先は私の解釈がずいぶん入つてますから、そのつもりでお聞き下さい。『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』といふ本に出てくる資本は、共同体に帰属してゐる資本なんです。長期的に共同体に属して、その産業発展を推進した資本と、利を求めて短期的に移動してゐる資本は、違つてゐることにマックス・ウェーバーは気付いた。もつと文学的に表現すると、マックス・ウェーバーは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を書いた時から、実はここで論じられてゐない資本があるといふ事に気が付いてゐた。それがユダヤ資本。マックス・ウェーバーは、ユダヤ資本の事を「パリア資本」と呼ぶ。パリアといふのは、インドのカーストで共同体に帰属しないで、つまり移動し続ける流民、

不可触賤民とも言ひますが、流民のことをパーリヤと言ひます。悪い意味で言つてゐるんじゃないんです。つまり共同体に帰属する資本と、共同体に長期間滞在しない、あるいは帰属意識のない資本があるといふ事です。共同体に帰属しない資本といふとアジアでは華僑資本になりますね。華僑資本の最大のグループは客家ハッカです。パーリヤはサンスクリット語で客人だからこれを客人資本と言つてゐる。マックス・ウェーバーは客人資本、パーリヤ資本、これがユダヤ資本の本質的な形だと見てゐる。

どの宗教でもさうですけれども、自分が汗を流して稼いだものぢやない不労所得、利子とか金利とかいふものをどう考へるかといふことに悩むんです。この悩み方がユダヤ教徒のすばらしいところなんです。日本人だつて、宗教的な戒律がなくても、利息を取ることによつと心が痛むよといふことはあるでせう。ですから、金利を取ると言ふことに関して、心を痛めるのは、倫理学の根底にある訳ですよ。

ユダヤ人は、どういふ風に悩んだかといふと旧約聖書の申命記に書いてある。それは、同じ神を信ずる同胞からは、金利を取るなど、利子取得を禁止してゐるんです。いいですか、ユダヤ教徒は同じ神を信ずる者から、金利を取つてはいけないとしてゐる。ただし、異民族、異教徒はその限りでないと書いてあるんです。このたつた一行の為にユダヤ人の金銭感覚、

金融感覚といふのは発生するんです。だつてさうでせう、利息をとらないと金融システムは発生しようがないんですよ。ユダヤ人たちは、自分たちと同じ神を信じてゐる同族の中では、金利は取らない。しかし、異民族、異教徒からは金利を取りますから、そこで当然、資本主義の原理的な発想が出て来る訳です。この事は非常に注目すべきことです。

私は一切の人種的偏見なしに申し上げたい。旧約聖書の申命記のたつた一行のために、ユダヤ人は考へ続けた。例へば、シェークスピアのベニスの商人、ユダヤ人ですね。非常に冷酷な取り立てをしたといふことで、シェークスピアのドラマは始まる訳ですが、マックス・ウェーバーは、そのパトリヤ資本といふものの本質は、二重基準、ダブルスタンダードにあると見るんです。つまり、同族に関する基準と異教徒に対する基準は違ふ。当然ダブルスタンダードですね。同族は、謂はば共同体の原理としては金利を禁止する。外からは金利を取つていい。このダブルスタンダードといふ言葉を聞いて、皆さんは多分非常に否定的なネガティブにお考へになると思ひますが、私は違ふんです。ダブルスタンダードを持ってないやうな民族は必ず滅ぶと申し上げたいんです。賢い民族は全部ダブルスタンダードをやつてゐる。さういふ意味では長い間、国家を持たなかつたユダヤ人が生き延びた理由の多くは、ここにあります。

ジョージ・ソロスといふ今、有名なこのヘッジファンドの投資家を、マレーシアのマハティール首相は、悪魔呼ばはりするくらゐ、批判して論争になりました。ジョージ・ソロスといふのは、ユダヤ系です。彼の最近の本を読みますと非常に面白い。彼はあの自由主義のレッセフェール（自由放任）といふ信仰、自由放任にしておいても見えざる神の手が働いて、必ずいい調和、あるいは最適配分が果たされるといふのは、とんでもない神話であると言つてゐる。これは、共産党宣言よりもつとひどいよと。これが、ジョージ・ソロスの最近の本の主題なんです。私は、彼もきつと、自分がユダヤ系であるといふ事から、ある原理を主張しようとしてゐるなど、思ふんです。ジョージ・ソロスは、ご存じのやうに、世界のこのカジノキャピタリズムで儲けた金を、例へば、ロシアの復興の基金に使つたり、中南米の貧困救済に使つたりする。さういふ謂はば共同体の原理に近い使ひ方をしてゐるといふ所に面白さがあるんです。特にロシアや東欧に対してソロスは巨額を注ぎ込んでゐるんです。彼は、僕とあまり変はらない世代で六三歳なんです。少年時代に第二次世界大戦を経験して、ハンガリーからイギリスに逃れ、イギリスからアメリカに渡つて、今日がある。その人間が、カジノキャピタリズム、さういふヘッジファンドで巨万の富を得て、ロシアや東欧や途上国の支援に注ぎ込んでゐる。これは、市場原理と共同体原理といふ、二つの基準を、一人の男が

徹底的に追求した例として紹介したいのです。かう言ふと私がジョージ・ソロスを何か凄く擁護してゐるといふ風に聞こえるかも知れませんが、ジョージ・ソロスといふ投資家の魂のある部分の構造が非常に面白いと思ふから言ふのです。いいですか、アダム・スミス以降のレッセフェール、自由放任主義といふのには、絶対に予定調和はない。一人勝ちといふ形で、破綻するといふのが、彼のマーケット論なんです。

国家共同体の永遠の二元論

—— アジア通貨危機・ユダヤ人ゲッター・チャイナタウン ——

さて、同じ事を、インド人で熱心なヒンズー教徒だったラビ・ハトラが言つてゐる。彼はアメリカに渡つて、エコノミストになつた。この世はもの凄く精妙なバランス、精妙な均衡で成り立つてゐると言ふ。この均衡が破壊されたら、ある限度で必ずカタストロフィーを迎へるといふのが、彼の経済学の基本なんです。私はエコノミストの言つてゐることよりも、そのエコノミストの精神の形が非常に気になる人間です。ラビ・ハトラは一九九五年に大恐慌が起ると予言してゐました。しかし、僕はその予言よりも彼の世界観、つまり、均衡がを

かしくなつたら、必ず破綻しますよといふ、単純だけれど、豊かな感受性と観察力に注目した。彼の予言した一九九五年には破綻しなかつたけれど、一九九七年に、タイのバーツが大暴落してアジアの通貨危機が起りました。二年の差ですね。このアジアの通貨危機といふものを、どういふ風に見るかといふことが問題なのです。ここに共同体の原理と市場原理の激突を見ることができます。アメリカの支配下にある国際通貨基金、このIMFはアメリカニズムと言つていい訳ですが、マレーシアとインドネシアの二つの国の対応の仕方が際立つて対照的だつた。

インドネシアのスハルト大統領は、IMFの条件を飲んだ。大統領の同族支配はけしからんといふ訳で、色々批判を受けた。それでスハルトは退陣して、大混乱を招いてゐて現在も混乱の中にある訳です。IMFの条件を飲んだ結果です。一方のマレーシアのマハティール首相は、IMFの条件を断固として拒否した。拒否して何をやつたかといふと、IMF派、つまりアメリカ派ですね。アンワルといふ彼の腹心でもあつた大蔵大臣を更迭した。そして短期の投機的資本の出入りをチェックしますよと言つてIMFのいふ条件の自由化論を蹴つた訳です。やはり、通貨を守るといふのは、国家主権の名に於いて、実行しなきゃいけないんだといふのが、マハティールの判断です。さう決断するのに彼が、どの位悩んだか、とい

ふ事を後日、告白してゐる訳ですが、さうやつてマハティールはアンワルを更迭して、IMF条件を蹴つて、断固として国家主権の名の下に自国通貨を守り安定させるのだと宣言した。

ところが日本は当時の橋本首相自からが飛んで行つてスハルト大統領を説得しました。日本は当然アメリカの代弁者として振る舞つた。ところがですね、ほんの一年たつた時に、この通貨危機は、去年（九八年）の八月下旬から、九月上旬にドルの大暴落ではなかつたが、暴落したといふ形で、アジア発の通貨危機が、ロシア、中南米を経由してニューヨークに至つた。これが一年前の出来事だつた訳です。この時に議論された中心的命題は、市場原理と共同体原理をどういふ風に組合せることが賢いか、といふ議論だつたんです。グローバリズムを信奉する人たちは、マーケットは一つだと言つて、あらゆる規制をなくせばいいんだと主張した。しかし、それは違ふのではないかと気付かされたのが、アジアに発する通貨危機の教訓ですね。ですから、去年のサミットから、投機的短期資本の移動に関しては、それぞれの国家がある程度規制するといふことで合意されてゐる。このモンスターになつた、もの凄い化物のやうになつた投機資金を、攪乱要因と捉へ、その攪乱要因を少しでも防ぐには、規制しかないといふのが、今のサミットの合意ですから、なんのことはない、ある意味では古典的な共同体原理を引き受けようとしたんです。マハティールは、二年それを先んじてや

つたんです。当時日本のエコノミストのほとんどは、スハルトは正しいが、マハティールはけしからんと言つてゐた。

私があゝのマックス・ウェーバーの『古代ユダヤ教』を読み始めたのが二年前のタイのバールツ危機が始まる直前の五月の連休です。七月にはタイの通貨危機ですから、実にいいタイミングで読んだもんだと思ひます。皆さんはあのユダヤ人のゲッターといふと、ユダヤ人が人種差別でそこに押し込められて弾圧された不幸な地域としてお考へになると思ひますが、さうした理解は、ユダヤ人に申し訳ないよと、そんなことを言つてはいけません。私は、たまたまブラハの典型的なユダヤ人ゲッター、ユダヤ人の居住区域を訪ねたことがあります。そこにシナゴグ、ユダヤ教の教会がありました。一種独特の雰囲気がある訳ですが、結局、申命記におけるダブルスタンダード、つまり、ユダヤ人の対内倫理とユダヤ人以外に対する対外倫理との二つの基準を実践するためには、濃密な共同体を作ることが必要だつたのです。相互の助け合ひの為には、同じ地域に住みませう。ここで共同体の原理を發動して、出来るだけ助け合ひませう。しかし、外に対しては、ちゃんと正当な金利を取りませう。旧約聖書の申命記に発する利子取得に関する二重基準を貫徹しようとしたら、どうしても、ゲッターが必要なんです。強烈な共同体が必要なんです。

似た事を、この客家、華僑にも見るんですね。私はサンフランシスコのチャイナタウンを少々時間をかけて観察した事があります。ご存じのやうに、華僑は客家が最大のグループですから、まあ、国境を超えて、つまりあらゆるところで、客人の様に振る舞ふと言つてもいい訳ですね。東南アジアで華僑の経済が大きくなる。それに対して必ず反発が起る訳ですが、客家がポーターレスで海を越えてアメリカのサンフランシスコの地に縁あつて着いた。サンフランシスコのチャイナタウンを見ると、彼らがここに一つの共同体を作つてゐることがわかります。かつて、共同体から離脱してポーターレスの旅の果てに、ある意味ではポーターレスな境界を大事にする共同体を作つてゐる。何が目新しいかと言ひますと、例へばサンフランシスコには黒人の多いところ、あるいは、韓国人の多いところ、その他色々の民族的な臭ひがありますね。まだアメリカの景気がこれ程良くなる前でしたが、日本人がネクタイを締めて、サンフランシスコを歩いたら、昼間でも、信号を待つてゐる時に、手が胸元まで来ますよ。そのくらゐに失業が社会問題化してゐた時にですよ。ところがチャイナタウンに行きますと、とにかく、浮浪者らしいのがゐないんです。このサンフランシスコのチャイナタウンに住んでゐる人たちは、同郷とか血縁とか色々な意味があるのでせうが、新たに來た人間に対して、何も技術がなければ、その辺の煙草の吸い殻でも拾つて清潔にしなさい。

おそらく賃金格差は、月とすつばんぐらゐの差はあつても、とにかく何とか仕事を与へて、共に生きようとしてゐる。さういふことはレストランに入つて見れば、ある程度見当は付きませぬ。例へば、便所の掃除を一所懸命やつてゐる人は、たぶん新しく来て何の技術も知識もない人でせう。あるいは、フロアーの汚れをいつもきれいにしてゐるご婦人がゐたりして、おそらく日当にしたらもの凄く低くても、さうやつてとにかく共生のシステムを作つてゐるんです。僕は非常に感心しました。

ポーターレスの果てに、これ程のポーターを作つた。華僑は自分たちの美的センスを非常に貫徹してますね。彼らは本当にこれがチャイニーズの美学だといふものを棄てようとはしない。さういふ意味で我々日本人は、異国に同化することは出来ても、このダブルスタンダードを保守していくといふことが非常に大事だといふことに気が付いてゐない。敬愛する村松剛先生に「ユダヤ人」といふ中公新書があります。この本はユダヤ人の歴史を書いてゐて非常に示唆に富むと言ひますか、すばらしい直感力によつて書かれてゐます。例へばコロンブスはユダヤ人だつたかもしれないといふ説に触れた一節があります。これはたぶん村松先生が色々な資料を見ながら、ユダヤ人説といふのを書いてをられたんだと思ひます。航海術、天文学、それから医学、言語学、これらは航海にかかせませんが、新大陸に行つてどんな異

民族に遭遇しても困らない色んな知識を身につけたスタッフの多くが、ユダヤ人だったといふことは事実の様です。

共同体の原理こそが経済活力の基盤

さういふ意味では、ユダヤ人に関する文化的な本をいくつか読み漁りながら、面白かったのは、マックス・ウェーバーが、このダブルスタンダードといふものをユダヤ人が非常に大事にしてゐるといふ指摘でした。もし今、マックス・ウェーバーが存命で、『古代ユダヤ教』の続編として、「アメリカ資本主義」といふものを書くとしたら、どうなるだらうかと考へることがあります。たぶん、かうなると思ひます。アメリカ大陸に沢山のユダヤ人が植民してをりますが、村松剛先生の言葉を借りれば、エジプトから脱出したユダヤのやうに、旧大陸からアメリカにエクソダスしたんだと。

その先は村松先生は書いてをりませんが、いくつかのアメリカ論の中におもしろい言葉があります。ユダヤ人はアメリカ大陸と大変相性がいい、非常にいい環境に置かれたと。これはかういふ事です。ダブルスタンダードの片一方、自分の周りにほとんど異民族、異教徒が

ゐるのでから、利子取得禁止令を自覚しないで、大いに金貸しができる。それをヨーロッパでやると、ダブルスタンダードだと、非難される。周りが皆、異教徒だからといふ訳で、アメリカに於いて、このユダヤ的なパリーヤ資本が大輪の華を咲かせた。ユダヤ民族を超える抽象的なシステムとして確立された。ですから、日本だつて、生保とか損保とかは、バブルの頃はヘッジファンドに金を預けてゐた。その前の石油危機で世界の石油の値段が、四倍、五倍に上がった時に、オイルドルといふものがこのヘッジファンドのところへどんどん流れてパリーヤ資本化したんです。私は、日本経済新聞にゐたのでよく覚えてゐます。一九七〇年代の後半、不確実性がますます増したとよく言はれました。つまり、オイルドルが、全部投機的なカジノキャピタリズムの方へ行きましたから、それぞれの国で安定的に長い時間をかけて、産業を育てようとした産業資本が国際金融の方向へ引き込まれてしまつた。それが地球上をぐるぐる廻つて、大きな危機になつた。

自国通貨を守るといふ事は、一見、経済学のやうに見えますが、まさしく共同体原理を發動しないと守れない。ですから、タイや韓国でも、金の供出運動が展開された。私共の世代は戦時中を思ひ出します。金属やダイヤも鉄も銅も、最後には家屋敷の樹齡三〇〇年ぐらゐの良材まで、供出したんです。さうやつて国を守らうとしたんですが、こんどの通貨危機で

通貨を守るといふことは、国を守ることと等しいといふことが判つたんです。ですから、今の日本を、どういふ風に診断するか、つまり、自分たちが、共同体の原理を忘れて、あるいはそれを破壊してでも、市場原理に即していけば国が救へる、景気が良くなるとまだ説くエコノミストがゐます。そんな馬鹿な事はないんです。共同体原理を破壊してゐるから、日本人が自信喪失に陥つてゐるんですね。マーケットといふのは、活力ある人間が荷ふんですよ。いいですか、活力ある人間といふのは、自分の為に生きてゐるんじゃない。もちろん、自分の為でもあるが、どこかに公とか、あるいは家族でもいいです、何かの価値の為にがんばらうと思ふ人間がゐるから、そのマーケットは力強いんです。マーケット自体に活力の源泉はないんです。これは利を見て動くだけですから。

マーケット以外の共同体原理がどれだけしつかりしてゐるかといふことが、人間の活力の源なんです。どうぞ、さういふ風に考へながら、日本を観察し、これからどう生きるべきかといふ事を、お考へ頂きたいと思ひます。

講義

——古典輪読講義——

『古事記』

——倭建命——

昭和音楽大学講師

國武忠彦



『古事記』 成立の背景

倭建命の西征

倭建命の東征

望郷の歌

『古事記』成立の背景

『古事記』は和銅五年（七二二）に成立した日本で一番古い書物です。江戸時代の国学者本居宣長は、これを「フルコトブミ」とよみ、「古への事をしるせる記」といつてゐます。「もはら古語をむねとはして、古への実のありさまを失はじと勤めた」ものであるから、『古事記』を読むと古代の日本人が「古いもの言ひ」で語りかけてくるのがわかる、といつてゐます。

古事フルコトのふみをらよめばいにしへのてぶりこと、ひ聞見ることし

私たちの祖先が身振りや言葉を交はしてゐる様子が直に伝はつてくるやうだと、その喜びを歌に詠んでゐます。

それでは、『古事記』はどのやうにして成立したのか。『古事記』選録の企画については、おほのやすまろ太安万侶の書いた「序文」を読むとわかります。

ここに天皇詔したまひしく、「朕聞かくは、『諸家の賈たる帝紀と本辞と既に正実に違ひ、多く虚偽を加ふといへり』。今の時に当りて、その失を改めずは、いまだ幾年を経ずして、その旨滅びなむとす。これすなはち邦家の経緯、王化の鴻基なり。故ここに帝紀を撰録し、旧辞を討覈して、偽を削り実を定め、後葉に流へむと欲ふ」とのりたまひき。時に舍人あり、姓は稗田、名は阿禮。年は廿八。人となり聰明にして、目に度れば口に誦み、耳に払るれば心に勒す。すなはち阿礼に勅語して、帝皇の日継と先代の旧辞とを誦み習はしめたまひき。然れども運移り世異にして、いまだその事を行ひたまはざりき。

この「序文」によれば、企画は天武天皇（御在位六七三、六八六）によつてなされたことがわかります。すなはち、天武天皇が仰せられますには、「各氏族が持ち伝えてゐる帝紀（各天皇の即位から崩御に至る記録）と本辞（古い神話や伝承）とが正実と違つてをり、多くの偽りを加へてゐると聞いてゐる。いま、その間違ひを正さなかつたら、幾年も経たずしてその真実は滅びてしまふだらう。これは、国にとつては重要なものであり、天皇の徳化の基盤である。そこで帝紀を記し定め、旧辞を討覈（真実であるかどうかをしらべる）して、後世に伝へようと思ふ」と仰せられました。その時、天皇の身近に稗田阿禮といふ者が仕へてゐました。年は



二十八で、聡明で一度目に見れば暗誦することができ、耳に聞けば心に刻んで忘れません。この阿禮にご命令になり、帝紀と本辞とを一字一字声を立てて繰り返し読み習はしめられました。しかし、時勢が移り天皇の御世が変はつても、いまだこの事業は実現するまでにはいたりませんでした（本文・訳とも、武田祐吉「古事記」をもとにして、意識してをります）。

「誦^よみ習はしめたまひき」の「誦^よみ」とは、声にだして節をつけてよむ、厳肅に唱へるやうによむ、神々を呼び出し現前せしめるやうな独特のよみ方であつたと思はれます。私たちも『古事記』を読むときは、阿禮が誦んだやうに、言霊を呼び起こすやうに、意味の詮索よりも声に出して読む、感じながら読む、味はふやうにくりかへし読みたいものです。

本居宣長は『古事記伝』（二七九八）で次のやうにいつ

てゐます。

彼詔命ノオホミコトを敬ツツシて思ふに、そのかみ世のならひとして、萬ノ事を漢文に書傳ふとは、其ノ度クビごとに、漢文章カラコトバに牽ヒカれて、本の語は漸クに違カクひもてゆく故に、如此カクては後遂ノチツヒに、古語はひたぶるに滅ウセはてなむ物ぞと、かしこく所思オモホシメ看カサシし哀イニシみたまへるなり、

当時の風潮といへば、全て漢文で書き伝へようとする強い中国化のなかにあつたのです。漢風の言葉に都合のよいやうに無理に引張られて、わが国の言葉とは次第に違つていく。このやうなことでは、日本語の古い言葉はまつたくなつてしまふ。「古語はひたぶるに滅ウセはてなむ物ぞ」と天武天皇は哀イニシしまれたのだ、と宣長はいつてゐます。「哀イニシみたまへるなり」とは、古い日本語がなくなつてしまふぞ、といふ哀イニシしみなのです。そのことは同時に、「古イニシの實マコトのありさま」もなくなるといふ重要なことを含んでゐたのです。

大昔の日本には文字はなかつたかも知れませんが、話し言葉は当然ありました。それは大和言葉といつていい。文字は知らなかつたかもしれないが、語り言葉はしつかりとあつた。そして、語り継つがねばならぬ大事なことは、一語一語口から口へ、人から人へと語り継つがれ

てゐたのです。そこに中国から漢字が入つてきた。さうすると、語り言葉を漢字で記すやうになる。「古事記」が成立したころは、ちやうどそのやうな中国尊重、中国文化模倣の嵐の時代だつたのです。仏教・法律・歴史・知識人などの全てに、中国文化は圧倒的な影響を与へてゐました。だから「今の時に当りて」といふ天武天皇のお言葉には、今ならまだ間に合ふ、古い日本の言葉をそのままに残したい、といふ強い決意を感じるのです。宣長が『古事記』を、「これぞ大御国の学問の本」といつたのも、ここに古代日本の真実のありさまが、古い言葉のままに伝へられてゐると信じたからです。

「序文」のつづきにもどります。

ここに旧辞の誤り忤^{たが}へるを惜しみ、先紀の謬^{あやま}り錯^{あやま}れるを正さまくして、和銅四年九月十日を以ちて、臣安万侶に詔して、稗田阿禮が誦める勅語の旧辞を撰録して、献上せよとのりたまへば、謹みて詔の旨に随ひ、子細に採り撫^{ひり}ひぬ。然れども上古の時、言と意と並^{みなす}木^はにして、文を敷き句を構ふること、字にはすなはち難し。已^{すで}に訓に因りて述べれば、詞は心に逮^{いた}らず、全く音を以ちて連ぬれば、事の趣更に長し。ここを以ちて今或るは一句の中に、音と訓とを交へ用ゐ、或るは一事の内に、全く訓を以ちて録^ししぬ。すなはち辞理

の見え^{がた}回きは、注を以ちて明にし、意況の解き易きは更に注^とさず。

和銅四年（七一二）元明天皇は、わたくし安万侶に、稗田阿禮が誦^よむところの天武天皇の仰せの本辞を記し定めて献上せよと仰せられましたので、謹んで仰せの主旨に従つて、こまかに採録いたしました。しかしながら古代にありましては、言葉も内容も共に素朴でありまして、文章に作り、句を組織しようと思しても、文字に書き現はすことが困難であります。字訓で読むやうに書けば、伝へたい古意の本当の意味に届かず、さうかといつて一字一音で読むやうに音で書けば大変長くなります。そこで、一句の中に音訓を交へて用ゐ、時によつては一つの事を記すのに全く訓の文字ばかりで書きもしました。言葉やわけのわかりにくいのは注を加へてはつきりさせ、意味のわかりやすいのは別に注を加へません。

ここは、太安万侶の苦勞が伺へる箇所です。阿禮の「誦む」大和言葉をいかに漢字で表現するか。阿禮が大事に持ち伝へてきた「語り口」をどれだけ正確に漢字で表現できるのか。それは可能なことなのか。漢文に流され乱されながらも、とにかく漢字といふもので出来るだけ正確に、そして古い日本語の精神をそのまま出来るだけ伝へたいといふ安万侶の強い願ひが伝はつてきます。

「言と意と並朴ことばごとろ みなすなほにして」は、宣長のつぎの言葉が思ひだされます。「意と事と言とは、みな相稱アヒカナへる物」、びつたりとつり合ひ相即したものだから、「古事記」は「いさ、かもさかしらを加へずして（飾りなくただありのままに賢こぶることもなく）、古より云傳たるまゝに記されたれば、その意も事も言も相稱マコトて、皆上代の実なり」と言ひ切つてゐます。古代の言葉で語られてゐることは、すべて真実の出来事である。宣長の学問は「古事記」の内側に身をおく学問、「古の実」を信じた学問であつたことに注目しなければなりません。

いづれにしても、「古事記」の成立は私たちにとつては、掛け替へのない貴重なものとなりました。小林秀雄は、「阿禮が未だ若かつたとは、まことに幸運な事であつた」（『本居宣長』）と考へます。天武天皇が阿禮に勅語した時、阿禮は二十八歳の若さでした。そののち世が変はつて、もしこの天武天皇の志を継ぐものがあつたら、元明天皇や太安万侶の登場がなかつたならば、どうなつてゐたことか。「さばかり尊ウツき古語も、阿禮の命イノチともろともに亡ウセてなましを、歎ウレシきかも、おむかしきかも（喜ばしきかな）」と宣長は心から喜んでゐます。

それでは少し本文を読みませう、十二代景行天皇の皇子、倭建命やまとたけるのみことのところを。景行天皇は四世紀の天皇で、このころは国土統一をしながら同時に朝鮮出兵といふ大変な時代でし

た。のちの二十一代雄略天皇のお言葉が「宋書」倭国伝に、「昔より祖禰躬そでみみづから甲冑かつちゆうを擧つらぬぎ、山川さんせんを跋渉ばつせうして寧処ねいじよに違いとまあらず」(昔より天皇みづから甲冑に身を固め、山川を歩いて休む暇もなく国土統一を進めた)とあり、特に勇猛であられた景行天皇は、国家の基礎をかためるために日本の国土統一に総力をあげて取り組んでをられました。

倭建命の西征

この景行天皇が皇子の小碓命せうすのみこと(のちの倭建命)に「お前の兄が朝夕の食事に姿を見せないの
で、お前が行つて教へさとせ」と仰せられた。しかし、五日たつても兄が出てこないの
で尋ねると、「朝早く廁かはやに入るとき、待ち捕らへて、手足をもぎとつて投げすてました」と答へ
る。父は、この小碓命の荒々しい力を恐れ、西の方の熊曾の平定を命じます。

小碓命は、天照大神をお祭りしてゐる伊勢神宮に立ち寄り、叔母の倭比売やまとひめから衣装をいた
だきました。

ちやうど熊曾建兄弟くまそだけるは、新築祝ひ「御室楽みむろたけ」の酒宴をやつてみました。そこで叔母からも
らつた衣装で女装し、宴たけなはのとき、剣で兄の胸を刺し、逃げる弟を追ひかけ、その背

中の皮をつかみ、剣を尻から刺す。弟は、「西の方にわれら二人をおいては建く強きものは
ありません。しかし、大和の国にはわれらにまさりて建き男がりました。これからはあなたを
倭建命（大和の勇者）と呼ばせてください」といふ。すると倭建命は、「熟苴（はぢぢ）のごと振り
折さきて殺したまひき」、熟した瓜を切りさくやうに殺してしまつた。

このころ倭建命は、「御髪（みかみ）を額（ぬか）に結はせり」とありますので、十五、六歳の少年でせうか。
女に変装し、楽しい宴から一転して、勇猛果敢な部族の頭を追ひつめて殺害する緊迫した描
写には、何度読んでも圧倒させられます。神は力なり。猛（ま）き益（ます）荒（ら）男（を）の姿を彷彿させられる場
面です。

ついで出雲では、この地の勇者出雲建を殺しました。まづ親しい交はりを結び、河で一緒
に水浴びをして、先に上がつてきて「刀を交換しよう」といつて偽の刀を与へ、「試合をし
よう」と誘ふ。しかし、出雲建は刀を抜かうとするが木刀なので抜けぬ。そこで、倭建命は
出雲建を打ち殺し、歌を詠まれた。

やつめさす 出雲建が 佩（は）ける刀（たち） 黒葛多纏（つづらさわま）き さ身（み）無しにあはれ

「やつめさす」は出雲の枕詞。出雲建が腰に着けた刀は、鞘さやにはつづらをたくさん巻いて立派だが、中身がない。ああ、こりやをかしい。策略もまた豪勇とともに古代勇者の象徴でせうか。国土統一の戦ひが、如何に熾烈なものであつたかを想像させられます。

倭建命の東征

さて、かうして熊曾・出雲を平定して、帰つてきましたが、父は今度は、東国の荒ぶる神や服従せぬ者たちを「言こと向むけ和や平はせ」（説得しても駄目なときは平定せよ）と命令されました。そこで、倭建命は熊曾征伐の時と同じやうに伊勢の神宮に参拜し、叔母の倭比売に会はれます。「父は私を死ねと思つていらつしやるのでせうか。西の方の従はない人たちを征伐して帰つてきたばかりなのに、兵もわづかしか下さらないで、今度は東の方の悪い人たちを征伐に遣はす。これを思ふと、父は私を早く死ねと思つておいでになるのです」と嘆き泣かれました。あれほどの荒々しい剛勇を誇る英雄が泣き出したのです。叔母様は、草薙の剣と小さい袋を授け、「もし何か急に身に危険なことが生じたらこの袋の口を開けなさい」と仰せられ、励まされます。

「吾を既に死ねと思ほしめすなり」といふ箇所について、本居宣長は、「いとく悲哀しとも悲哀き御語にざりける、然れども、大御父天皇の^{オホミコト}大命に違ひ賜ふ事なく、誤り賜ふ事なく、いさ、かも勇氣の^{イサミ}撓み給ふこと無くして、成功^{コトナシ}竟給へるは、又いとく有難く^{アリガク}貴からずや、（此ノ後しも、いさ、かも勇氣は^{イサミ}撓み給はず、成功^{コトナシ}をへて、大御父天皇の^{オホミコト}大命を、違へ給はぬばかりの^{クケ}勇き正しき御心ながらも、如此^{カク}恨み奉るべき事をば、恨み、悲むべき事をば悲み泣賜ふ、是ぞ人の^{マゴコロ}真心にはありける）」と評してゐるのは、宣長が倭建命の中に自分を移し入れ、倭建命を現在に甦へさせる評釈として有名な箇所です。宣長は『古事記』を読みながら、古代日本人の心が「真心」であつたことを感得してゐます。うはべを飾ることなく、悲しいときは悲しい、嬉しいときは嬉しいとつつみ隠すことなく、素直に一途に思ひ、「ひたぶるに真ごゝろ」であることに人間の^{マコト}本質を読みとつてゐます。

「草薙の剣」は、かつて須佐の男の命が、八俣の大蛇を退治されたときに、その尾から出てきた大切な神剣です。

さて、これから倭建命の東国遠征がはじまります。まづ尾張の国に着き、尾張の国の国造の祖先である美夜受比売の家へおはひりになる。そして、姫と結婚しようと言われたが、遠征から帰つてからにしようと、約束だけを交はして、東国に進まれました。

相模の国にお着きになつたとき、その国造がいつはつて、「この野原の中に大沼がありません。その沼の中に住んでゐる神はひどく乱暴な神です」と申します。そこで、倭建命はその神を見ようと、野の中に入られた。するとその国造が野に火を放ちます。倭建命はあざむかれたことを知り、叔母様から戴いたあの袋の口を解き開けると、火打ち石が入つてゐました。そこでまづ、これも戴いた草薙剣で草を刈りはらい、その火打ち石で火を打ち出し、こちらからも火をつけて向かうを焼き退けました。そこで、今でもこの地を焼津といつてをります。こちらから火をつけて向かうへ焼く「向火」は、迎へ火をたいて難を避けるといふ農民の生活の中から生まれた知恵でせう。古代日本人の實際的経験や習俗が窺へます。

そこからさらに東に進み、走水はしりみづの海（今の浦賀水道）を渡りますときに、その渡わたりの神が暴風をおこし、波をたて船をぐるぐると回して進むことができせん。渡わたりの神は、渡し場の神。境界の神か。峠にも坂にも神が宿る。そこから一步先は、未知の世界。不安なものを感じさせます。その時、お妃の弟、橘比売命おとらばなが申されますには、「海の神が人を欲してゐるので」わたしが御子に代はつて海にはいりませう。御子は命じられた任務を無事果たされて、天皇さまに東征の成果をご報告申し上げてください」と申して、歌はれました。

さねさし 相模さがむの小野のに 燃ゆる火の
火中はに立ちて 問ひし君はも

「さねさし」は相模の枕詞。相模の国の野原で、燃える火の中に立つて、大丈夫か、心配するなど優しく問ひかけてくださったあなたよ。かう歌はれて入水します。荒波はをさまり、船はやつと進むことができました。それから七日後に、お妃のお櫛が海辺に流れつきましたので、そこに御墓を造つて収めました。

この弟橘比売命の歌について、皇后陛下がインドのニューデリーで開かれた国際児童図書評議会世界大会（平成十年）で、「子供時代の読書の思い出」と題して御講演（ビデオですが）をなされてをられます。

悲しい「いけにえ」の物語は、それまでも幾つかは知っていました。しかし、この物語の犠牲は、少し違っていました。弟橘の言動には、何と表現したらよいか、建と任務を分かち合うような、どこか意志的なものが感じられ、弟橘の歌は——私は今、それが子供向けに現代語に直されていたのか、原文のまま解説が付されていたのか思い出すことが出来

ないのですが——あまりにも美しいものに思われました。「いけにえ」という酷い運命を、進んで自らに受け入れながら、恐らくはこれまでの人生で、最も愛と感謝に満たされた瞬間の思い出を歌っていることに、感銘という以上に、強い衝撃を受けました。はっきりとした言葉にならないまでも、愛と犠牲という二つのものが、私の中で最も近いものとして、むしろ一つのものとして感じられた、不思議な経験であったと思います。

海神が美しい女性を望むといふ伝承があります。倭建命には、東方の「荒ぶる神、また伏はぬ人どもを、言向け和平せ」といふ天皇からの使命があります。これを必ずやり遂げてもらふためには、私が身代はりにならなければならぬ。愛するための決断だったのでせうか。弟橘比売の愛する倭建命への、この入水を前にしての夫を想ふ妻の惜別の歌は、いつまでも歌はれ続けられることとせう。

東海道線に乗ると神奈川県に「二宮」駅があります。相模湾の近くです。そこには美しい一三五メートルの吾妻山があり、頂上に吾妻神社があります。弟橘比売のお櫛が海上に漂着してゐたので、山上に埋め、御陵を造つたといはれてゐます。江戸時代にはよく知られた神社で、宣長の「古事記伝」にも載つてゐます。橘はみかんのことで、古代には「ときじくの

かくのこのみ」(非時の香葉)といはれましたが、この地方はみかんの産地でもあります。私は、この山の近く平塚江南高校(旧制の女学校)に勤務してゐましたが、校歌に「時じくの雪」(木俣修作詞)といふ言葉があります。橘の木は可憐な木です。奈良時代の人々に愛された木で、元明天皇の「枝は霜雪を凌ぎて繁茂し、葉は寒暑を経て凋しほまず、珠玉と共に光を競ひ、金銀と交へ愈々美なり」といふ言葉も味はひたいものです。

倭建命は、さらに進んで荒ぶる蝦夷どもを平定し、方向を変へ大和へと進軍されます。その途中、この合宿地の近くに足柄山(神奈川県足柄上郡)がありますが、その山の坂下で食事をしてゐると、坂の神が白い鹿になつて倭建命を殺しにきました。倭建命は、食べ残しの「蒜ひる」(強い臭いを持つニンニクに似たもの)で鹿の目を打ち、殺します。そして、足柄山の坂に登り立ち、弟橘比売を思ひ出されて、三たび深いため息をつき、「吾あづま嬌まはや」(ああ、わが妻よ)と嘆かれました。それから、この足柄山から東を「阿あづま豆麻ま」(東)といふやうになつたのです。

「吾あづま嬌まはや」といふ哀切の嘆きには、無限の感慨ががあります。この言葉には、弟橘比売命一人への想ひだけでなく、この国土統一のために戦死した多数の兵士への想ひも込められてゐると思ひます。

「蒜」で鹿の目を打つて殺したといふ話も面白いですね。これも生活の中から生まれた知恵でせうか。強い臭いが邪気を打ち払ふ力があるとみなされてゐたのでせうか。神話は、生活史であり、精神史でもあります。

そこから甲斐の国（山梨県）に出て、酒折の宮（甲府市酒折町）においてになつた時、歌を詠まれました。

新治 にひばり 筑波を過ぎて 幾夜か宿つる

常陸の国（茨城県）の新治や筑波を過ぎて、もうどのくらゐ寝たのだらう。すると、そこにある「御火烧の老人」（警護のかがり火をたいて命の身辺をお守りしてゐる老人）が続けて歌つた。

かがなべて 夜には九夜 日には十日を

日数を重ねて、日は十日でございます。この、直ちに歌つて答へた老人を誉めて、東国造

(東の地方長官) にしました。当時の日本人は、だれもがこのやうに歌が詠めたのではないでせうか。

望郷の歌

甲斐の国から信濃の国に越えてゆき、その神を平定し、尾張の国に還られました。そして、先に約束された美夜受比売のもとに入られました。美夜受比売は大喜びで、ごちそうを沢山作り、大きな盃一杯に酒を盛り、命にたてまつりました。ところが、美夜受比売の襲(おすひ) (礼装の打掛) の裾に月経の血がついてみました。その月経を見て、倭建命は歌を詠まれました。

ひさかたの 天の香山あめのかくやま

利鎌に さ渡る鶴とこかま

弱細 手弱腕をひはほそ たわやがひな

枕かむとは 吾はすれどまくら ま あれ

さ寝むとは 吾は思へど

汝が著せる 襲の襦

月立ちにけり

仰ぎ見る天の香具山を、鋭い鎌のやうに横ぎる白鳥よ、その白鳥のやうにかほそい腕のあなたを、抱こうと私はするが、寝ようと私は思ふが、あなたの着てゐる打掛の裾に、月が出てゐるよ。

そこで、美夜受比売がお歌でお答へになりました。

高光る 日の御子

やすみしし 吾が大君

あら玉の 年が来経れば

あら玉の 月は来経往く

うべなうべな 君待ちがたに

吾が著せる 襲の裾に

月立たなむよ

天に光り輝くやうな日の御子よ、天下をしろしめす我が大君よ、新しい年が来て過ぎて行けば、新しい月来て過ぎて行きます。さうよさうよ、どんなにあなたを待ったことか。私の着てをります打掛の裾に、待ちきれずに月が出たのも当然でせうね。

この唱和のおもしろいこと。何とおほらかなことか。月経を歌ひ合つてゐる。私はおかしくて笑ひたくなります。

二人はここで結婚して、倭建命は草薙の剣を美夜受比売のもとに置いて、伊服岐いぶさきの山（滋賀県と岐阜県との境にある山）の神を討ちに出かけられます。

山のほとりで白い猪にあひます。その大きさは牛ほどもありました。「これは神の使ひだらう。いま殺さなくても帰りに殺せばいい」といつて山に登つていきました。ところが、先の白い猪は神の使ひではなく、山の神自身だつたのです。それを命は言葉に出して大言し、神を見くびつたのですから、神は怒り大水雨を降らせ倭建命を打ちこらしました。足がぎくぎくして歩くことが出来なくなります。杖をついてやつと伊勢の国の尾津の埼（三重県桑名郡）に着き、さらに三重の村（四日市市）にたどり着きます。そこからさらに進み、能煩野のほの（三重

県鈴鹿郡) に到りて故郷を偲んで歌を詠まれました。

倭は やまと 国のまほろば

たたなづく あそかき 青垣

山隠れる こも 倭し うらは 美し

大和の国は、国々の中でもすぐれて美しいところだ。幾重にも重なつてゐる青い山々。その山に囲まれた大和は、美しいなあ。

また一つ歌はれました。

命の また 全けむ人は

畳薦 たたみこも 平群の山の

熊白櫛 くまかし が葉を

髻華 うず に挿せ その子

命の無事であつたものは、大和の国の平群の山の、りつばな櫛の木の葉を、髪に挿して飾りなさい。

またお歌ひになりました。

はしけやし 吾家わがへの方よ 雲居起ち来も

おお、なつかしきわが家のあたりから、雲が湧き起つてくるよ。と歌ひ終へて亡くなられました。倭建命の靈魂は、大きな白鳥となつて、空高く翔けりて浜に向かつて飛んでいきます。お妃たちや御子たちは、泣きながら白鳥のあとを追ひかけていきます。

○

まだまだお話をしたいことは沢山ありますが、要するに『古事記』を読んで下さい。『古事記』に親しんで下さい。千三百年前に成立した『古事記』の中の「ひとつの言葉」に心が動くならば、それはまことに素晴らしい体験となるでせう。そのことは古典と自分の心がつながつてゐることを意味します。そして、そのことを確かめることは大きなよろこびになると思ひます。

講義

「国体」の思想

埼玉大学教授

長谷川三千子



はじめに

「国体」についての後期水戸学と国学との微妙な関係

『弘道館記述義』に於ける「国体」の内容

後期水戸学に於ける政治思想の大目的

日本の伝統である「蒼生の安寧」

昭和天皇の愛民

誤れる戦後思想

〈質疑応答〉

はじめに

今日お話する内容は決して難しいものではありませんが、現代の日本では殆ど見失はれてしまつて正しく語る人が少ない事柄を取上げてみたいと思ひます。勢ひお見せしたい資料が次々に膨れ上がつて四枚の資料となつた次第ですが、この資料を逐一説明するのではなく、要所所で参考の資料にして頂きたいと思つてゐます。

先づタイトルに掲げた「国体」といふ言葉ですが、さすがに皆さんの中ではこれを国民体育大会と思ふ人は少ないと思ひます。しかし、それにしてもこの「国体」といふ言葉に関しては、あまりにも間違つた考へ方が戦後五十年間流布してゐて、それを掻き分けて、正しい「国体」の意味を知ることが大変難しくなつてゐます。いつたい、この言葉の中から、現代の我々が何を学ぶことが出来るのか——言ふならば我々が「国体」を考へる手がかりといったものをここでお話してみたいと思ふのです。

例へば、今国会で審議されてゐる国旗国歌法案の問題があります。国旗については、サッカーファンのみならず誰にでも「日の丸」が日本のシンボルマークであるといふことは直観

的に分かるもので、定着してゐて、そんなに難しい問題ではありません。難しいのは国歌「君が代」の方です。つまり国歌である以上言葉がそこに入つて来ざるを得ない。「君が代」自体は「君が代は千代に八千代に細れ石の巖となりて苔のむすまで」と素朴でかつ余韻のある歌詞ですが、これを国歌として歌ふといふことになる、その背後にある思想について、どう考へたらよいのか、議論が百出するといふことになります。

戦後の日本は、日本国憲法第一条に「天皇は国民統合の象徴である」といふ規定があるにもかかはらず、天皇が統合の象徴であることの意味について深く考へることをしないで、むしろ積極的に避けてきました。ところが「君が代」を国歌として確認し直すことになつて、これまで考へをサボつてきたツケが一気に吹き出てきた。今回政府が「君が代」の歌詞に関して憲法第一条に則つた解釈を出しました。それなりに筋は通つた説明になつてゐますが、その背景に本当にしつかりとした国家思想があるかとなると、大きな空白が広がつてゐると言はなければなりません。我々が日本として誇り得る、独自の国の在り方があるのかどうかといふ問題は国旗国歌が制定されるに際して是非とも考へておかなければならない問題であると思ひます。



「国体」についての後期水戸学と国学との
微妙な関係

さて、そもそも「国体」といふ言葉自体は、それほど古くからある言葉ではありません。いまからおよそ百数十年前、まさに日本が近代国際社会に巻き込まれてゆかうとする直前、日本人自身が、日本の国柄といふものを真剣に考へたとき、使ひ始めた言葉です。これを使ひ始めたのが、いはゆる後期水戸学と呼ばれる学派の人々なのですが、お手許の二枚の資料は、後期水戸学の人達が「国体」について考へた思想を知る上で重要な書物の一つで、後期水戸学の第一人者である藤田東湖が書いた『弘道館記述義』から、最もポイントになる箇所をピックアップしたものです。

いま、これに即してお話をしてゆくわけですが、その前に、「後期水戸学」と、江戸中期から出来あがつてきた本居宣長を完成者とする「国学」との微妙な関係についてお話しておく必要があるでせう。日本のやうに島国で外部から侵略されることがほとんどない、平和な歴史を保つて来た民族は、あらためて自分たちが日本人であることを意識し直す必要もなかつたわけで、長い間日本人が日本人であることを意識しなかったことは、ある意味でごく自然のことであつたと言へませう。むしろ、国学といふ学問が江戸中期になつてやつと出来上つて来て、日本人が日本人であることを意識出来るやうになつたのはどうしてかを考へてみる必要があります。

ご存知のやうに本居宣長は、日本の文化の特色をつかむ時に、日本文化と、日本の文化を形成する上で大きな影響を与へた中国文化とを、絶えず対照させて考へてみました。「漢意からしころを排すはす」といふ言葉を宣長はよく使ひましたが、かういふ言ひ方によつて彼が強調したことは、原理原則を最初に立てて演繹的に考へる中国流の考へ方にそまることなく、事物に即してこまやかな心の動き方といふものを大切に、ものごとを考へなければいけない。それが本来の日本思想であるといふ考へ方です。これに対して後期水戸学は、儒教の強い影響もあり、先づ第一に広い普遍的な原理を考へた上で、我が国は如何にその原理にかなつたもの

であるかといふことを検証していく、といふ方法をとりました。

この二つを比べてみると、哲学的な意味では、たしかに国学の方が深いと言へるのですが、事象に即して日本人の心の本来の動きをつねにしつかりと把握するといふことは、言つてみれば文学的な活動として初めて成り立つ事柄であつて、実践を求める政治のやうな領域にあつては非常に難しい。

その点で、原理原則を立ててそれに即して日本の在り方を考へる後期水戸学の考へ方は、実践活動において、分りやすいといふ特色があります。国学者と後期水戸学の学者とは、江戸末期にかなり激しく論争を行つたのですが、これは、どちらがすぐれてゐるのか、と比較するより、両者それぞれに日本の「国柄」を考へる時に必要な二つの側面を有してゐるのだ、と理解すべきものでせう。つまり事柄に沈潜して哲学的に考へるといふ側面（国学）と、現実に近代国際社会に乗り出して行くに当り日本のアイデンティティーを実践的に捉へてゆくといふ側面（後期水戸学）といふわけです。

『弘道館記述義』に於ける「国体」の内容

実践的政治哲学、政治思想としての日本の伝統をさぐるにあたつての後期水戸学の考へ方の姿勢は『弘道館記述義』の冒頭の文章にはつきり出てゐます。

「弘道とは何ぞ。人能く道を弘むるなり。道とは何ぞ。天地の大經にして生民の須臾も離る可からざるものなり。」

つまり、「弘道」とは「人が道を広める」ことで、その「道」とは何かといふと「天地の大きい道、生きとし生けるものの一瞬も離れることの出来ないものである」といふことです。当時日本の各地に設けられた学問所のひとつであつた「弘道館」は、一八四一年に開館されたのですが、開館にあたり水戸藩の学問係の第一人者であつた藤田東湖が徳川斉昭の名前で、一八三八年に出版したのが『弘道館記』です。八年後に藤田東湖がこの本を詳しく解説したのが『弘道館記述義』です。形のうへでは、この「弘道館」の名を説明するといふ文脈で、かうした文章が語られてゐる、といふわけなのです。

一見すると、この文章は、まさに大上段に普遍的な原理を示すところから始まつてゐて、

本居宣長が「道、道とみちみちしくいふのは儒学者の弊である」と言つて戒めたことと真向うから対決するやうにみえます。しかし、実際に東湖が述べてゐる「道」は、原理原則を打ち立ててこれを守らなければならぬといふ堅苦しい「道」ではないのです。

「蓋し道は猶ほ大路のごとし。人々大路に遵つて行き、率由そつゆ践履せんり、斯の路にあらざるなし。則ち誰か復た路の路たるを知らんや。其の路維れ一にして、他の岐ぎあるなし。則ち亦安んぞ命なずるに名を以てするを之れ為さん。」

「道」は生きとし生ける全てのものが通る広い大通りみたいな一本の道であつて、別れ道のない道ゆゑにあらためて名前をつけることもしなかつたし、「道」と呼ぶこともしなかつた。従つて昔の書物をひっくり返して見ても、古代の日本人は「道」について何も言つてゐない。だからと言つて「道」がなかつたのかといふと、さうではなく「道」と名前をつけて呼ばなくとも良いほど普遍的で当り前のこととして、「道」はあつたのだ、といふことです。

これにつけ加へて東湖は、

「後の古を談ずる者、其の實に徴するを知らずして徒に其の名に求む。名見るべからざれば、則ち曰く上世末だ嘗て道あらずと。」

とも言つてゐます。つまり、国学者達が、「道、道と言つてはいけない」といふのは、実は

上代に「道」はあつたが、さう呼ばれなかつただけなのに、国学者たちは道はないものだと
思ひこんでゐる、とここでは東湖はちよつぱり国学者を論難してゐます。

いづれにせよここに表されてゐるのは、人間が生きてゐる限りに於いて添ひ従つてゐる普
遍的な真理をもう一度把握して捉へ直すことこそが出发点といふ考へ方です。それほど広い
ものなら、「道」と呼んでも呼ばなくても同じではないかと言ふ感じもしますが、「道」と呼
ぶことによつて、日本の国体を考へるための足場のやうなものが得られることになります。
それなしに考へるのでは、分り易さの点で大きな差が出て来ると言へるでせう。

ついでながら、『弘道館記述義』の冒頭にある「道」についての東湖の解釈は、西欧の政
治思想の歴史の中で大きな存在であつた自然法を連想させます。これは、中世のヨーロッパ
においては、法と言へば先づ自然法と考へられる程重要な概念だつたのです。キリスト教で
は神様が全宇宙を作つたといふことになつてゐるわけですが、勿論、宇宙は滅茶苦茶に作ら
れてゐるのではなく、ある筋道に従つて作られてゐるわけです。その筋道といふものを、人
間は理性によつてある程度知ることが出来る。人間が捉へた限りでの神の法が、すなはち自
然法なのです。従つて人間が作つたどのやうな法律も自然法に従つてゐなければならぬ。
これがヨーロッパの中世の法律の一番の基本的な概念でした。

つまり、ここで考へて頂きたいのは「広い道」を考へるといふことが、古今東西を問はぬ普遍的な政治原則の考へ方の一つのパターンであるといふことです。『弘道館記述義』には「広い道」に関して幾つかの記述が続きますが、「道」に係はる日本といふ国柄の四つの特色が次に挙げられてゐます。

「寶祚之を以て無窮」、「國體之を以て尊嚴」、「蒼生之を以て安寧」、「蠻夷戎狄之を以て率服す」の四つといふことになるわけですが、これを順々に見てまゐりませう。

まづ、「寶祚之を以て無窮」ですが、これは言葉通りに訳せば、日本の皇位、皇室は、この「弘道」に基づいて無窮である、といふことです。これは、いま我々の目でふり返つてみると、二つの側面から理解することができます。すなはち、一つは、我々のもつ皇室についての神話——遠く天照大神の御子孫が天皇の御先祖であるといふ古い伝へごと——それ自体が、或る普遍性を持つたものなのだといふことです。「神話」と聞くとただちに、それは単なるフィクションにすぎず、歴史事實ではない、などと考へる人がありますが、実は神話といふものは、すべての民族が必ずもつてゐる、自分たちの歴史認識の出発点とも言ふべきものなのです。多くの場合、それはいかにして神々の時代から、人間たちの時代へ移行するのかを物語つた神話です。さうした神々とのつながりの物語を持たぬ民族はないと言つてよい。

その意味で、われわれの持つ天孫降臨の物語は、まさに「弘道」にもとづいて存在してゐると言つてよいのです。

しかも、我が国の皇室の無窮は、ただ単に物理的に永遠のながさを誇つてゐる、といふだけの無窮ではありません。重要なことは、それが天孫降臨以来、一つの道德性といふものを連綿と引きつぎながら無窮である、といふことなのです。たとへば、わが国の皇室には、神からさづかつた三種の神器といふものが代々つたはつてゐますが、それは単に、皇室の正統性を証明する宝物であるといふだけではない。大切なことは、そこに思想的・道德的な訓戒がこめられてゐるといふことなのです。

東湖はここで、天照大神が皇祖に神鏡をおさづけになつたとき「この鏡を見るときは私を見るごとくにしなければならぬ」とおつしやつた話を引いて、これは、代々の天皇が天照大神の明徳を引継ぐべきことを語られたのだ、と解釈してゐます。このやうな東湖の解釈は、決して彼の勝手な読み込みではありません。『神皇正統記』の作者、北畠親房も、三種の神器のそれぞれに道德的な意義がこめられてゐると考へ、神鏡については、「鏡は一物もたくはへず」と言ひ、それを「正直の根源なり」と言つてゐます。つまり、皇室の無窮といふことも、その全体がかうした道德に従ひつつ永続してゐる——弘道にそひ従つて続いてゐる——

—といふわけなのです。

次の「國體之を以て尊嚴」に初めて「国体」と言ふ言葉が出て来ます。ここで東湖はこの「国体」といふものを、「日本といふ国は太陽に向つて明らかに明るく土地柄が開けてゐる」と解説してゐて、言ふならば、一種の風土論としての国体を語つてゐます。ただし、（和辻哲郎の「風土論」もさうですが）単に物理的な氣象のみではなくてその中の人間の心の在り方についてその風土が影響を及ぼして来るといふ風土論です。従つて「國體之を以て尊嚴」の歸着するところは「日本人とはおほらかでかつ道徳的であるといふ心の在り方を持つてゐるが、これは日本の風土から生れて来たものゆゑにこれを大切にしなければいけない」と結んでゐます。

かうして見てみると、「寶祚之を以て無窮」も「國體之を以て尊嚴」も一見すると、外側から日本の在り方を説明してゐるやうでゐて、その中に微妙に道徳的なものが込められてゐると言へませう。

後期水戸学に於ける政治思想の大目的

さて、その次が「蒼生之を以て安寧」ですが、これこそは、ここにあげられた四つの特色のなかでも、最も重要な中核をなす部分であり、これ自体が一つの政治道徳思想の表現であると言つてもよい一句です。この「蒼生」とは、「アラヒトケサ」とも読みまして「人民」「国民」といふ意味なのですが、「蒼生之を以て安寧」といふのは、言葉どほりには、「日本においては、国の政治が弘道にのつとつて行はれてゐるから、それ故に国民が安寧に暮せるのだ」といふ意味になります。ただし、この『弘道館記述義』の解説では、東湖はもう一段突つ込んだ言ひ方で、「日本では、弘道にそひ従つて道徳的な政治が行はれてをり、古来、代々の天皇が、まづ人民の安寧といふことを政治の第一目的として治めてこられた」といふ意味あひに解釈してゐます。彼のその解説ぶりを、少しこまかく追つてみませう。

「臣彪謹んで案ずるに、民の道たるや、憂は飢寒より切なるはなし。」

先づ人民にとつては、飢ゑ凍えることがもつとも切実な困苦である。従つて日本では昔から飢ゑ死と凍え死ぬことから民を救ふことが最も重要であつた、といふことです。この困苦

をとりぞくために、

「天祖始めて種穀養蚕の道を開きたまふ。」

天照大神が穀物を植ゑ、養蚕をする道を開いて、民を飢死と凍死からお救ひになつた、とまづは天照大神ご自身が、この蒼生安寧の道を開かれた第一人者であつたことが説かれます。

「患は疾病災害より甚だしきはなし。おはなむちのみこと大己貴命・少彦名命、始めて療病厭災の方を定む。すくなひこなのみこと」

民是に於てか全活す。」

病ひ、災害から民を救ふことも大事なことである、といふのですが、実際、現代の政治でも病ひと災害から国民を守るといふことは最重要なことで、どの党もこれを公約にかかげて叫んでゐますね。

「居は宮室より安きはなく、哀は死喪より惨なるはなし。すさのをのみこと素戔嗚尊、いたけるのみこと五十猛命、山林を殖し、材木を足らはす。」

この「宮室」御殿といふ意味での宮室ではなく、ちゃんと屋根、壁のある家といふ意味です。つまり、植林することで、ふつうの国民も木づくりの家に住むことができるやうになり、また、火葬あるいは服喪を可能とすることにより民の幸せ（安寧）に寄与する。さういふお仕事を素戔嗚尊や五十猛命はなさつたのだ、といふことです。

さらには、兵器を蔵することや屯倉みやけをおくこと等々の代々の天皇の営みの全てを、「蒼生の安寧」の一点にしほつて、東湖は解釈してゐます。現代の歴史家はこのやうな形で天皇は權威をのばし、権力を増大したといふ観点からのみ解釈してゐますが、東湖はさういふ営みの全てを一貫して「蒼生の安寧」の観点から眺めてゐる。そもそも政治の大目的が「蒼生の安寧」である以上、東湖の解釈の方が現代の歴史家達のひねくれた見方よりもはるかに理にかなつてゐると言へるでせう。さうした東湖の解釈のエッセンスとも言ふべき一文が次の文章です。

「上古は人民を指して、於保美多訶良と曰ふ。」

つまり、わが国では、昔から人民をおほみたから（大きな寶）と呼んでゐた。天皇にとつて人民は政治の手段でもなければ自分が幸福を得る為の手段でもなく、人民それ自体が政治の目的であつた。そのことを、これほどよく一語であらわしてゐる言葉はないと言へませう。

「按ずるに周易に云ふ、聖人の大寶を位と曰ふと。」

昔の中国の書物にあるおほみたから（大きな寶）といふのは、位とか抽象的な善であるとかさういふものばかり指してゐて、未だに民をして寶となすものがない。唯一孟子の言ふ諸侯の三つの寶、土地、人民、政治とはたまたま適合するが、これとても人を養ふ為の土地や人

を治める為の政治と人民とを並べてゐる。土地も政治も本来は人民の為のものであつて、人民こそが政治の目的である、といった捉へ方は中国の書物にはどこにも見当らない、と東湖は指摘します。つまり、本当に日本の国柄の特色として誇るに足りる特色が「蒼生之を以て安寧」だ、といふことなのです。

「蠻夷戎狄之を以て率服す」

文字通りには、「周辺の異民族もこの大經に依つて日本に従つてくる」といふ意味ですが、もちろん、現実の歴史を見てみれば、日本が朝鮮半島で戦つて敗北した事実もあつて必ずしもこの通りではありません。しかしこれは、現実の歴史の解釈といふよりは、日本が目指すべき国際政治のあり方を東湖が述べてゐると理解して良いでせう。つまり周辺の異民族を武力で征服するのではなく、道徳の力に依つて尊敬させること——それこそが日本の目指すべき国際政治のあり方なのだ、といふ考へ方が示されてゐるのです。

さて、大切なのは、この四つが全体としてどのやうなつながりをもつて、日本といふ国の国柄を作り上げてゐるのか、といふところなのですが、それを東湖はかう語ります。

「蓋し蒼生安寧、是を以て寶祚窮りなく、寶祚窮りなし是を以て國體尊嚴なり。國體尊嚴なり是を以て蠻夷・戎狄率服す。四者循環して一の如く各々相須つて美を濟す。」

天照大神以来日本の国政は第一に蒼生安寧を指して行はれて来た。その道德的伝統の故にこそ皇位、皇室は無窮であり、皇位皇室が無窮ゆゑに国体は尊嚴であり、国体が尊嚴であるゆゑをもつて周辺の異民族が日本に率服する。そのやうに四者が一つながりとなつてゐるところに、わが国の美はしい特色がある、といふことなのです。

先程「国體之を以つて尊嚴」といふ文章を見ましたが、そこでは狭義の意味での国体といふものが表現されてゐました。つまり風土としての国体といったものが語られてゐたのです。が、これに対して、蒼生安寧と言ふところから四者循環して一つの如く各々相俟つて一つの美を成すといふ、この全体が言はば後期水戸学に於ける広義の国体なのだとして理解してよいでせう。

ここにこのやうにして示された「国体思想」は、決して単なる自民族中心主義でもなければ、君主専制主義でもない。もつともオーソドックスな政治思想の根幹であるへ人民の安寧を第一目的とする政治といふ考へ方を中核に据ゑて、自国への誇りも、他民族との関係も、すべてそこにつながるものとして考へる——さういふ真摯な政治思想だと言へませう。

そして、このやうな「国体思想」は、名前こそこの時はじめて作られたにせよ、その思想内容そのものは、いま見てきたとほり、すべて実際に歴史書のうちに書きしるされたことに

基いてゐるのです。この時期になつて、西洋諸国と張り合ふために急遽ひねり出された、といふものではない。言ふならば、すでにあらかじめ日本の伝統の内に存在してゐたものを、東湖が再発見し、顕在化してみせたのだ、と言へるでせう。

日本の伝統である「蒼生の安寧」

なかでも、このやうな政治道德思想の存在をはつきりと証言してゐるのが、「日本書紀」のなかの「仁徳天皇」の巻です。いま、お手もとにその抜粋をお配りしてありますので、ちよつとそれをご覧になつて下さい。この話自体は、ごく有名な話です。仁徳天皇が即位なつて三年後、国政はどうであらうかと高い丘に立つて周囲を眺めまはすと一軒も煙が出てゐない。これは民が貧しくて食事も満足でない証拠だと、三年間課役を廃された。すると再び家々から炊事の煙がのぼるやうになつた——かういふ話です。おそらく皆さんもすでによくご存知のことです。しかし、重要なのは更にその先のところなのです。仁徳天皇は煙の多かつたのをご覧になつて、宮殿に帰つて「朕われ、既に富めり。更に愁うれ無し」と皇后におつしやる。それを聞いて皇后が、「宮垣はくづれ、御殿は雨もりがいたしますのに、何で富めりな

どとおつしやるのですか」と尋ねられます。それに答へて、仁徳天皇は「其れ天の君を立つるは、是百姓の爲になり。然れば君は百姓を以て本とす。是を以て、古の聖王は、一人も飢を寒ゆるときは、顧みて身を責む。今百姓貧しきは、朕が貧しきなり。百姓富めるは、朕が富めるなり。未だ有らじ、百姓富みて君貧しといふことは」とご返事になる。

これはつまり、そもそも天皇とは、さういふ御存在なのである、といふ本質論なのです。決して、ただたまたま仁徳天皇が徳の高い天皇であつたといふエピソードなのではない。少くとも『日本書紀』の作者は、まさに「蒼生安寧」といふことがわが国の政の第一の柱なのだといふ意識をはつきりと持つてゐた。それがかういふ表現となつてあらはれ出てゐるのだと思ひます。

これを見ても、藤田東湖のあの『弘道館記述義』の記述が、ただ彼ひとりの中勝手なこしらへ上げられたやうなものではなくて、日本の古典をしつかりと見つめる中から取り出されてきたものである、といふことがよくわかりただけならうと思ひます。

それでは、現代においては、かうした国体思想は、どのやうに引き継がれ、どのやうに表現されてゐるのでせうか。たとへば、それがくつきりと表はされてゐるのが「終戦の詔書」の次の一文です。

「抑々帝國臣民ノ康寧ヲ圖リ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々措カサル所……他國ノ主權ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕力志ニアラス」

一見すると、ただの形式的な枕詞の一種として見逃されてしまひさうな文章ですが、いま見てきたやうな国体思想を念頭に置いてこれを眺めると、この一文は思想的には非常に大切なことを言つてゐる、といふことがわかります。まづ「帝國臣民ノ康寧ヲ圖リ」とはまさに「蒼生安寧」そのものですし、「萬邦共榮ノ樂ヲ偕スル」といふのも、先ほど見た、日本のとるべき外交の基本姿勢をそのまま表現した言葉と言へる。そして、それが古來代々の天皇の、御子孫に遺された教へであり、昭和天皇も常々大切にしていられした大原則である、とおつしやつてゐるわけです。ですから、侵略戦争を志したなど、とんでもないことである、ときつぱり否定していらつしやるのです。

これは、もちろん、敗戦といふことになつたからあわてて詔書にこのやうな言葉をつけ加へた、などといふことではありません。実は「開戦の詔書」には、この同じ趣旨の言葉が、もつとはつきりとした言ひ方で語られてゐたのです。

「抑々東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ丕顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕力拳々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニス

ルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義ト為ス所ナリヤ今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト鬪端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ」

この「豈朕カ志ナラムヤ」の一言は、昭和天皇御自身の指示によつてつけ加へられたといふことなのですが、そもそも日本の本来の国体思想からすれば、このやうな自存自衛の戦争すら、たいへん残念なことなのだ、といふ昭和天皇の御認識が、はつきりとうかがへる一言です。ここに言はれる「皇祖考」とは明治天皇、「皇考」とは大正天皇のことなのですが、この「豈朕カ志ナラムヤ」の一言は、明治天皇が発せられた日露戦争の開戦の詔書のうちに見られる一言なのです。このこと一つを見ても、昭和天皇の平和を愛する御氣持が、単なる個人的感情のごときものでなく、日本の国体思想及び皇室の伝統にのつとつたものであることがよくわかりただけなこととせう。

もちろん、東湖の『弘道館記述義』にも明言されてゐるとはり、日本の国柄の特色とは、「敬神、愛民、尚武」の三つであつて、戦ひに臨んでは勇ましく戦はなければならぬといふことが、日本の伝統であり道徳でもありました。但しやみくもに戦ふのではなく、やむを得ない時に矛を取り刀を取つて戦ふといふことでないといけない。喜び勇んで敵の血を流すのではなくて、沈痛の趣を持つてやむを得ない場合にのみ刀を取るといふのが日本の本来の

戦ひのあり方であることが、ここにはつきりと示されてゐます。「開戦の詔書」は、たしかに、キツパリとした戦ひの宣言です。しかし同時に、それがいかに沈痛な戦ひの宣言であるかといふことを見逃さないでいただきたいと思ふのです。

さらに言へば、かうした代々の天皇に引き継がれてきた政治道德のうちには、東湖も語らなかつた、もう一つの際立つた特色があるのです。いま、もう一度あの『日本書紀』の仁徳天皇の巻をふり返つてみませう。人民の貧困を救ふために、天皇は三年間課役を廃された——といふことは、当然（皇后の訴へられたとほり）天皇ご自身の宮殿はボロボロになつて大変な不便をかうむるといふことです。しかし、それで少しも構はない。むしろそれが喜びなのだ、といふのが仁徳天皇のお言葉です。すなはち、ここには、ごく穏やかな形ながら、民をおほみたからとして尊ぶことが、天皇ご自身の犠牲においてなされる、といふ思想があらはれ出てゐるのです。

これは、のちの世の代々の天皇に引き継がれ、たとへば元寇に際しては、龜山院が石清水八幡宮におこもりになつて、「我が身をもつて国難にかへむ」といふ祈願をなさつた。これは、雨もりを耐へしのぶどころではない。本當に御自身の命を投げ出してでも国と人民を救はうといふお志の祈願です。このやうな、我が身を犠牲にしても民を救はうといふ究極の

「愛民」のかたちといふものは、古代中国にも、また他の地にも見あたらぬものであつて、本当の意味での我が国独自の思想と言ふことができませう。

昭和天皇の愛民

このやうな日本の伝統に根ざした、また日本独自の「愛民」のかたちは、実はそのまま現代にまで引き継がれてゐるのです。それをもつともよく推しはかることができるのは、昭和天皇が終戦に際してお詠みになつた四首の御製です。

海の外の陸くがに小島にのこる民のうへ安かれとただいのるなり

爆撃にたふれゆく民の上をおもひくさとめけり身はいかならむとも

身はいかになつともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

国がらをただ守らんといはら道すすみゆくともいくさとめけり

まづ注目すべきは、第二首と第三首のみうたです。ここには、「身はいかならむとも」「身

はいかになるとも」と、ほぼ同じ表現が重ねられてゐます。これは、つまり天皇御自身の安全は投げ捨てても、といふ御決意の表明なのですが、この昭和二十年八月の時点で、日本がポツダム宣言を受諾して降伏するといふことは、何を意味するかと言へば、まさにここに出たはれてゐるとほり、天皇陛下の身の安全を投げ捨てるといふことだったので、すでに第一次大戦の直後には、ヴェルサイユ会議で敗戦国ドイツの皇帝ヴェルヘルム二世に対する訴追を決定してゐます。これは、現実には皇帝がオランダに逃げてしまつたので実現しませんでした、第二次大戦の終結に際しては、もつと苛酷な訴追が行はれるであらうと予測されてゐました。事実、その当時の米国の世論調査によると日本に勝つて占領したならば天皇は死刑にすべしといふ意見が三〇%あつたといふ。裁判にかけるべし、投獄すべしの意見を合せると六割以上が天皇を何らかの形で処罰すべしといふ意見であつたといひます。ですから、この「身はいかならむとも」といふお言葉は、本当にリアルな「御自身の命を擲つ」といふ御決意のあらはれだつたのです。

よく知られてゐるとほり、この時のポツダム宣言受諾の決定については、閣議の意見が真二つに割れて、どちらとも決定がつかなかつた。そこで、時の首相鈴木貫太郎が昭和天皇の御聖断を仰ぐといふかたちで、はじめて受諾を決定することができたのです。このみうたに

「いくさとめけり」とうたはれてゐるのも、決して比喩的表現ではない。本当に昭和天皇御自身が戦争をお止めなすつたのです。そして、そんな風に御自身の命を危険にさらしてでも終戦を御決定になつたのは何故かと言へば、それはもう、「ただたふれゆく民をおもひて」といふことだつたのです。このままいくさを続けてゆけば、民は益々苦しみ、さらには全滅の危険すらある。ここでどうしても戦争を止めしなければならぬ——さういふ御心でポツダム宣言受諾を決意なさつたのです。

次に注目していただきたいのは第四首の「国がらをただ守らんと」といふ御言葉で、これは終戦前からしきりに問題となつてゐた「国体護持」といふことにかかはつた表現です。当時の国民たちは、この「国体護持」といふことを、まづは帝国憲法第一条の「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」を守り抜くこと、そして天皇陛下の御一身をお守りすること、と理解してゐました。ですから、降伏に際しても、はたして降伏して「国体護持」ができるかどうか、といふことが議論の焦点となつたのです。そのことを受けて、ここに「国がらをただ守らんと」とうたはれてゐる、と見ることができます。

しかし、ここで天皇御自身は、国民たちの議論とは少し違つた観点から事柄を御覧になつてゐる。つまり、国民から見れば、陛下の御一身をお守りすることが国体護持だつたわけで

すが、天皇御自身からは、わが身を擲つてでも国民の命を救ふことこそが国体護持であつた——さういふ「ずれ」があります。しかし、この「ずれ」は、まさに日本の国体思想の精髓を示してゐると言つてもよい。さういふ美しい、すれだと思ひます。つまり、国民は天皇のために命を投げ出し、天皇は国民のために命を投げ出される。さういふ国民と天皇の関係のうちこそ日本の国体の「美」が見出されるのだと思ひます。

最後につけ加へておきますと、この第一首の御製も、昭和天皇の民を思ふお気持ちがいかに行き届いたものであるかを知る、大事な手がかりになると思ひます。つまり、ポツダム宣言の受諾・降伏といふことは、本土の日本人にとつては、まさに命が救はれたといふ出来事なのですが、当時海外にゐた多くの軍人、民間人にとつては、必ずしもさうとばかりは言へない。逆に、日本が降伏して武装解除を受けることによつて、かへつて命の危険にさらされる場合もある（たとへば満州にゐた人々がさうです）わけです。そのことを昭和天皇はちゃんと見越して心配していらつしやる。天皇陛下の「愛民」が、単なるムードや感傷によるものではなく、本当に理性的な配慮によるものであることを何よりもよく示してゐる。ただと私は思ひます。

誤れる戦後思想

ところが、かうした日本の本来の国体思想といふものが、戦後の日本においては、まるで知られてゐない。ただ知られてゐないだけならまだしも、全く誤つたかたちで伝へられてゐる。それを何とか正してゆかなければならないのですが、その第一歩として、さうした戦後の誤解の元凶とも言ふべき、丸山真男さんの「超国家主義の論理と心理」といふ論文をご紹介しておきませう。

これは、昭和二十一年の春、雑誌の『世界』に発表されたものなのですが、のちに丸山さん自身が、思ひがけないほどの広い反響を得たと言つてゐます。事実、ここでの議論が戦後の日本における「国体思想観」のもとを作つたといふところがあつて、その意味でもよくその誤りを眺め正しておく必要がある論文だと言へます。

実はここには、或る意味では正しい部分も含まれてゐるのです。たとへば丸山氏は、日本のいはゆる超国家主義（正しく言ひかへれば「国体思想」）は、欧米近代のいはゆる「中性国家」——真理とか道徳とかの内容的価値に関して中立的立場をとり、さうした価値判断はも

つばら個人の良心にゆだねるといふ立場をとる国家観——と違つてゐる、指摘します。この指摘は正しい。いま見たとほり日本の国体思想は、日本が国家として道徳的にふるまふべきことを教へてゐる思想だからです。これに対して（ここではその歴史的事情について詳しくお話しする余裕がありませんが）近代ヨーロッパでは、中世のヨーロッパを支配してゐた神の法・自然法の考へ方が崩れて以来、国家が道徳的にふるまふといふこと自体を手放してしまふのです。そして、もつばら「力」の原理だけで動き、道徳を個人の良心の領域へと押し込めてしまつた——それが近代中性国家といふものなのです。

ですから、その意味では、日本が明治維新ののちも、近代国家の枠組をとりつつ、一方では国家が道徳的に振舞ふといふ課題を手放さなかつたのは、誇るべきことでこそあれ、批難すべきことでは全くないのです。

ところが丸山氏は、これを「国家活動はその内容的正当性の規準を自らのうちに（国体として）持つて」ゐる、といふ微妙にずらした言ひ方で言ひかへてしまひます。そして、「従つて国家の対内及び対外活動はなんら国家を超えた一つの道義的規準には服しないといふことになる」といふ結論にむすびつけてしまふのです。これが、まるで日本の国体思想の本当のあり方と違つてゐる、といふことは皆さんにはよくお解りですね。あの藤田東湖が言つてゐ

たのは、まさに「国家の対内及び対外活動は国家を超えた一つの道義的規準に服してゐるし、また服さなければいけない」といふ説でした。そして、その「国家を超えた一つの道義的規準に服すこと」が「弘道」にほかならなかつたわけなのです。

これはもう、まるで初歩的な誤りであつて、たうてい近世の日本政治思想史が専門の研究者の書いたものとも思はれないデタラメぶりなのですが、これはうっかり間違ひなどといふものではなくて、一種のヒステリー症状とでも言ふべきものでせう。つまり、敗戦でやけくそになつて、自分の持つてゐた大切なものを、自分でわざと壊しまくつてしまふ——さういふ現象の一つだつたのではないかと思ひます。たとへば、この論文のなかに見られる「それ自体『真善美の極致』たる日本帝国は、本質的に悪を為し能はざるが故に、いかなる暴虐なる振舞も、いかなる背信的行動も許容されるのである！」などといふ表現は、これを書いた人間の精神状態を如実にあらはしてゐると言つてよいでせう。

このやうなかたちで、まことに不幸な誤解と曲解が、戦後のわれわれと、日本本来の政治道徳思想とを、へだて、引き裂いてきました。けれども、むしろ近代的「中性国家」の概念が一つの行きづまりを見せはじめてゐる現在、われわれのなすべき第一のことは、われわれ自身の根元にある、この素晴らしい政治思想を見直すことではないでせうか。

〈質疑応答〉

(問) 明治維新の時の先達が、自己犠牲を基にした「愛民」のやうな日本の伝統あるいは国柄の特色を、如何にして国家建設に取入れるかについて苦心をしたかをお話されました。また今の時代によく云はれるグローバル化、主権国家、国民国家といふ言葉の中には必ずしも先達の思想が盛込まれてゐないとお話されました。ではこのやうな国体の思想をどうやつて現代に生かして行けば良いのかについて、先生のお考へをお聞かせ下さい。

(答) 大変切実な問題です。今問題になつているグローバル・スタンダードといふ言葉は主として経済活動の場面で使はれる言葉ですが、この近代経済といふものの本質は、まさに国境をこえてその力を及ぼしてゆくといふところにあります。たとへば、強い会社が弱い会社を叩き潰してゆくといふ露骨な力の支配——それを国境を越えて許すといふのがグローバル・スタンダードの中身なのです。それに対してはアジア諸国からも反対の声が上がつてゐますね。これは当然のことなので、グローバル経済を野放図にのさばらしておく、「蒼生之を以て安寧」どころではなくなつてしまふ。グローバル化にはある一定の規制の枠、即ち

經濟の健全な活動を抑へることなく、しかも經濟活動が「蒼生の安寧」といふ政治の大原則を壊さないといふバランスのとれたコントロールが必要となります。勿論日本一国で出来ることではなく、日本がイニシアティブを取つて世界が共同でやらなければならぬ。その時、我々にとつて理論的武器になり得るのが「蒼生之を以て安寧」といふ普遍的な思想だと言へるでせう。大変難しいことですが、各国の政府あるいは人々と国体思想の根本を一緒に考へて見るのが、我々が国体思想を現代に生かすことに繋がるといふ気がします。

(問) 国体思想の本質として、歴代の天皇方が「蒼生之を以て安寧」のお氣持で民を思はれてゐることを知り感銘を受けました。一方、先の大戦では多くの人達が天皇のお氣持に添ふべく戦はれた。我々はどのやうに生きれば良いのかをお聞かせ下さい。

(答) そうですね、国体思想を、単に「ありがたい思想」と受けとるだけでなく、それが自分たちにどのやうな課題をつきつけてゐるのか、といふ観点からも理解することが大切です。ね。「蒼生之を以て安寧」だけで政治の大目的が終るとすればスウェーデン型の福祉だけの国家あるいは一時期のイギリス病的国家と何ら変りないこととなり、国民は揺り籠から墓場まで国家に面倒を見て貰ふこととなつてしまひます。しかし、明治の人達は違ひました。明治維新のときに発せられた、有名な「五箇条ノ御誓文」があります、その第二条に「上下しやうか

心ヲ一ニシテ盛ニ経綸ヲ行フヘシ」とあります。つまり、ただ受け身の形で、お上が蒼生安寧をはかつてくれるのを待つのではなく、国民自身が一人一人志をもつて積極的に生き生きと働く。それによつて国民生活も向上し、国としても力がますます——さういふ考へ方にもとづいて出来上つた文章です。これは、私は、そのまま現代日本の国体になつた生き方であると受け止めて良いやうに思ひます。

(問) 天照大神が三種の神器の一つである鏡を、戒律としてではなく、常に鏡を自分を見るやうに見なさいと言つて渡されたといふお話や、本居宣長が、事象に則した心の細やかな動きに思ひを致し漢心を排すと言つたお話は心を育み正してゆく素晴らしい知恵であると思ひました。日本人が育んできた思想についてももう少しお話を聞かせて下さい。

(答) 道徳にも色々な型があつて、例へばユダヤ教では聖書トイラそのものがびつしりとこまかな戒律集となつてゐて、うろこのない魚は食べてはいけない、安息日には絶対に仕事をしてはいけない、男の子が生まれたら割礼をしなければならぬ、等々、ことこまかに規定されてゐます。かうしたトイラーの教へに従ふことがユダヤ人にとつて道徳的に振舞ふことになる。ところがご指摘の通り、日本の道徳は心それ自体を如何に真直ぐに正しく保つかといふことが大切なのです。国学も後期水戸学も心のあり方を基本にした道徳であるといふ点では一致

してゐます。人間の心は常に私的な欲望に曇らされがちなものですが、さうした私情をできるかぎり治めて心をしづめ、事柄それ自体を良く見ることが、人間の道徳の一番基本になることであると思ひます。つまり、心を平らかにして世界を明らか見る、そこに自づとどう振舞ふかといふ道筋が知的に見えて来る、それが日本人の道徳の基本になつてゐると思ひます。

(問) 国体の思想を考へる時にどうしても憲法の問題に触れざるを得ないと思ふ。特に第一条には日本がどういふ国であるかを簡潔に書いておく必要がある。その意味で第一条は最も重要な条文であると思ふが、現日本国憲法には日本の国体思想が正しく入つてゐると思へない。第一条の私案みたいなものがございましたならばご披露して頂きたい。

(答) おつしやる通りです。かつての大日本帝国憲法第一条「大日本帝国ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」は、まさに国体そのものの規定だつたと言へませう。第四条にあらためて天皇の統治権の規定があり、これと重複するのではないかと議論されたりもしたのですが、私は大日本帝国憲法の第一条は、まさに国体の規定であり近代国家的な意味での統治権とは區別されるべきだと思ひます。実は、帝国憲法起草の中心者の一人であつた井上毅が第一条を起草した時の文言は今残つてゐる文言とは少し違ひ「日本帝国は萬世一系の天皇の治すところなり」と言ふ文言でした。この「治す」といふ言葉は天皇が国を治める在り方を表す言葉で

あり、西洋語の「支配」^{ガヴァン}がもつばら力で支配するといふ意味合ひをもつのは全く対照的な言葉なのだ、と井上毅は語つてゐます。この「治す」といふ言葉のもつ、まさに国体思想の精髓とも言ふべき意味については、大原康男先生の「現御神考」^{わきづみかみ}のなかの「シラス考」といふ御論文が詳しく、ぜひ一読をおすすめしたいのですが、この「治す」といふ言葉が帝国憲法に採用されなかつたのはまことに残念です。今度われわれが憲法を改正するときは、ぜひこの井上毅の案を活かして「日本国は萬世一系の天皇の治すところなり」を第一条にしたいものだと思ひます。

講義

君臣の情

——日本の歴史を貫く

「まごころ」の世界——

(社)国民文化研究会副理事長

元 九州造形短期大学教授

小柳 陽太郎



日本における君臣の關係

孝明天皇——天が下人といふ人こころあはせ

三条実美——天皇への思慕

昭和天皇——終戦時における天皇と国民

今上天皇——「象徴」の意味するもの

皇后陛下のお言葉——複雑に耐へること

天皇皇后両陛下の御歌——「心を寄せる」といふこと

岡潔先生のことば——生命が生命を認識する

日本における君臣の関係

本日の演題は、お手許にお配りしたレジメに書いてをりますやうに「君臣の情」とさせていただきますました。この「君臣の情」といふのは、日本における君臣の関係は「いかにあるべきか」といふこととは少し違ふので、「どうあればよいのか」といふのではなく、「どうあつたのか」。天皇と国民との間には、実際のやうな情感が保たれてきたのか、その事実を自分の目でしつかり見つけていたかといふことを申し上げたいのです。ところが、学校で習ふ歴史の授業では、そのやうな「情感」といふものは殆んど問題にされない。天皇と国民の間といつても所詮は、支配者と被支配者の関係である以上、支配者は当然自らの権力をどのやうに行使するか、被支配者はその中であつてどれだけ権力の座にありつけるやうに運動を展開してゆくか、そのせめぎ合ひが一国の歴史である、さう割切つたところから出発するのです。しかしさういふ目で日本の歴史を見ていけば、どうしてもわからない、不思議な現象に次々にぶち当つてしまふ。それは、端的に言へば、ではなぜ、日本といふ国ではその支配者としての天皇の存在がこのやうに長くつづいてゐるのか、日本以外では決してこのや

うなことはない。権力の座は常に交替する。どんなに長く続いた王朝も最後は没落する。その治乱興亡が世界の歴史を織りなしてゐるのに、日本ではどうしてかうも天皇の存在がゆるがないのか、といふ疑問が湧いてくるのです。現にそれに対する答を求めて多くの学者たちが挑戦してゐます。しかしどうしてもその謎は解けさうにない。なぜか？ 答は簡単です。それは日本における天皇と国民の間が、単なる支配者と被支配者の関係ではない。さういふ権力支配を中心とした見方を前提にしては、到底理解出来ないものがあるからだ。その一語に尽きると思ふのです。

この合宿の当初から繰り返しお話が出てをります通り、今年六月、前の理事長がお亡くなりになりましたが、最近その小田村寅二郎先生の遺著『学問・人生・祖国』（国文研叢書・27）といふ書物を手にしてをりましたところ昭和四十五年、この合宿教室（第十五回）でお話しになつた「われわれ人間は自分ひとりで生きてゐるのではない」といふ一文があつて、強く心を惹かれました。その中で先生は次のやうに書いてをられます。

赤ちやんが目もよくあけないままに夢中になつて乳房を吸つてゐる情景を思ひ出してみませう。赤ちやんは時々ちよつと飲むと休む、そしてじつと母親の目を見つめてゐる。その時の赤ちやんの目は実にすばらしい、赤ちやんは全身の生命を一心に集中して、母親を見つめ



てゐる。ではその赤ちゃんをしてさうさせてゐるのは何か、それは母親に対する本能的な感謝の心かもしれない。母親への思慕の情によるものかもしれない——。先生はさう述べられたあと、実はそれにはもう一つ大切な誘因があるやうな気がすると仰つて、それは「母親の方に慈愛が先行してゐる」といふことではないか、と書いてをられます。そのやうな慈愛深い「母の眼」に赤ちゃんが感応する、それが母親を見つめる「ひたむきな目」になつていくのではないか——。

私はこの一文に接した時、これこそ、日本において天皇のご存在が、神武天皇以来百二十五代、ゆらぐことなく続いてきた秘密の根源だと思はれてなりませんでした。歴代の天皇に一貫して国民に注がれてきたそのまなざし、それが「先行」してゐればこそ、国民が天皇に対して反逆を企てるといふことは嘗つてなかつた。世の中がどん

なに乱れようともし、この一点だけは疑ひやうがなかつた。あどけない子供がお母さんの「慈愛」を信じるやうに、国民はすべてそれを信じてきた。そこに通ふ「君臣の情」それが何千年の間一貫してゆるがなかつた、それは世界の歴史上全く他に例を見ない、ただ日本の皇室と国民の間にのみ見られる稀有の世界だつた。それが日本において天皇の存在がゆるがなかつた決定的な理由だと思ふのです。

孝明天皇——天が下人したといふ人こころあはせ

この「君臣の情」の通ひあひ、その例は日本の歴史上無数に見られるところですが、ここでは幕末の孝明天皇についてお話してみたいと思ひます。一般には幕末といふ時代は幕府のもつ絶大な権力と、それをとりもどさうとする朝廷、あるいは朝廷をかつぎあげた薩摩、長州などの西南諸国の雄藩との激突といふ構図で理解されてゐるやうですが、果してそれでいいのか。もしそれが事実であれば、朝廷の中心にいらつしやる天皇と、幕府の頂点に位置する將軍とは、氷炭相容れない敵対關係に立つはずですね。ところが現実は全く違つてゐた。敵対關係どころか、時の孝明天皇は、十四代將軍徳川家茂いえもちに対して、文字通り子を思ふ親の

み心で接してをられたのです。これから御紹介するのは元治元年、西暦で言へば一八六四年に、天皇が將軍家茂に与へられた御宸翰（御手紙）です。

その年は米使ペリーとの間に和親条約が締結されてから十年目で、その時はペリーの船に乗りこまうとした吉田松陰も刑死してをりますし、松陰を死に追ひこんだ安政の大獄も終り、その弾圧の首謀者大老井伊直弼も、桜田門外の変で生涯を終つてをり、幕末の動乱も次の時代を迎へようとしてゐた時でした。その年の正月、天皇は朝廷に参上した將軍徳川家茂に對して次のやうな御宸翰をお授けになるのです。

「嗚呼、汝、方今之形勢如何ト顧ル。内ハ則チ、紀綱廢弛、上下解体、百姓塗炭ニ苦シム。殆ンド瓦解土崩ノ色ヲ顯ハシ、外ハ則チ驕慮五大洲ノ凌侮ヲ受ケ、正二併吞ノ禍ヒニ罹ラントス。其ノ危キコト実に累卵ノ如ク、又眉ヲ燒クガ如シ。朕之ヲ思フニ夜モ寢ヌル能ハズ、食モ喉ヲ下ル能ハズ。嗚呼、汝、夫レ是レヲ如何ト顧ル。」

口語に改めれば次のやうになるでせう。「ああ、現在の日本の切迫した情勢をお前はどうか思つてゐるか、内は、国を治める糸筋はすっかり乱れてしまひ、上下はばらばらになつて、

国民は塗炭の苦しみの中であへいでゐる。まさに国全体が『瓦解土崩』——総崩れになつてゐると言つても過言ではない。それに外からは傲慢な国々から侮辱の限りを受け、今や我が国は国土を侵されるか否かの瀬戸際に立つてゐる。『其ノ危キコト累卵ノ如ク、又眉ヲ焼クガ如シ』現在の平成日本の状況と全く同じですね。——「自分はそのことを思ふと夜も眠れないし、食物も喉を通らぬおもひである。『嗚呼、汝、是ヲ如何ト願ル』——ああ、お前はこの国のすがたをどう思つてゐるか。」

だが天皇はそれにつづけて、「それはお前の罪ではない。自分の力が足りなかつたからかうなつたのだ」と仰るのです。——「是則チ、汝ノ罪ニアラス、朕ガ不徳ノ致ス所、其ノ罪朕ガ躬ニ在リ」——すべての罪は自分が至らなかつたためにこのやうになつたのだ、と仰つて、さらに次のやうに続けられます。

「汝ハ朕が赤子、朕、汝ヲ愛スルコト子ノ如ク、汝、朕ヲ親シムコト父ノ如クセヨ。其ノ親睦ノ厚薄、天下挽回ノ成否ニ関係ス。豈重キニ非ズヤ。」

自分とお前との間は父と子のごときもの、私はお前を子どものやうに思つてゐるが、お前

もまた自分を父と思つてほしい。この二人の心が一つに結びついてゐるか否か。それが日本の運命を決定するのだ――。

一体、このお手紙のどこに権力を奪ひあふ朝幕の関係があるのか、このお手紙を一読するだけで、現代の人々の歴史の見方の誤りには歴然たるものがあるのがおわかりでせう。世の人は言ふかもしれない。たしかに御二人の個人的な感情はさうだつたかもしれない。しかしさういふ感情を越えて政治のメカニズムは動く――。たしかにさういふ面もあるでせう。しかしいかに政治のメカニズムが動かうとも、その根底にこの「君臣の情」があつたればこそ、日本は、あの空前の危機において、他国なら当然予想された分裂を免れ、見事に統一を全うして明治の時代を迎へることが出来たではないか。

御宸翰は次の一文を以て終ります。

「嗚呼、朕、汝ト誓ツテ衰運ヲ挽回シ、上ハ先皇ノ靈ニ報ジ、下ハ万民ノ急ヲ救ハント欲ス。若シ怠惰ニシテ成功ナクンバ、殊ニ是朕ト汝トノ罪ナリ。天地鬼神、夫レ是ヲ殛スベシ。汝、之ヲ勉メヨヤ、之ヲ勉メヨヤ。」

もしこの国家の危急を救ふことが出来なければ、それはすべて二人の罪である。天地の神々よ私達を罰してほしい——。世の常識を越えてここに流れてゐる「君臣の情」、それがわからなければ、日本の歴史の真実を掴むことは絶対に不可能だと思ふのです。

しかもそれは単に天皇と将軍の間だけではなかつた。親子の情で結ばれる天皇と臣下、それはすべての国民に及ぶものでした。孝明天皇が御詠みになつた御製は数多くございますが、ここでは四首の御歌をかかげて、天皇の御心をお偲びしたいと思います。

春人事（文久三年・一八六三）

此の春は花うぐひすも捨てにけりわがなす業わざぞ国民くにたみの事

述懐（元治元年・一八六四）

天がした人といふ人ころあはせよろづのことにおもふどちなれ

述懐（同年）

さまざまになきみわらひみかたりあふも国を思ひつ民おもふため

（御詠年・不詳）

澄ましえぬ水にわが身は沈むとにもごしはせじなよろづ国民くにたみ

一首目は実に力強いお歌ですね。花もうぐひすも、すべてそのやうな風雅の世界は断ちきつてしまふ、自分は、そのすべてを犠牲にして、国民の生活の安定と幸せ、そのために命をかける、「雛を守る親鳥の決死のおもひ」といふ言葉がございしますが、さういふおもひを偲ばせるお言葉です。二首目の「おもふどち」といふのは、おもひを分ちあふもの同士の意味で、天下の人はすべて、国の安危といふ一点に心を砕く同志であつてほしい。支配者、被支配者、さういふ區別は一切あり得ない。すべてをこえて国民が心一つに結びあふ以外に困難を打開する道はないと仰つてゐるのです。三首目にあるやうにすべての問題に心一つにして、或は泣き或は笑ふ、その赤裸々な心の通ひあひの中にこそ国を守る道がある。幕末とはさういふ時代だつたのです。国民すべての心がふれあつて火花を散らすのです。そして、そのやうな心の交流を可能にしたのは、その中心にいらつしやる孝明天皇御自身が、その赤裸々な世界のただ中に生きてをられたからでした。その間の消息は、この三首の御製の中に見事に表現されてゐると思はれてなりません。

その三首を背景にして第四首目を拜誦すれば、それがどれほどの痛切な御心から発せられたお歌であるかがわかります。自分の身は水底みづそこに沈んでも、国民だけは絶対にその濁つた水

の中で苦しませることは許されないといふ、文字通りの捨身の御心、身を捨てて国民を抱きとめられる、それは幼児をだきしめる母親の気持さながらの御心ではないでせうか。この御製をお詠みになつた時期ははつきり分らないのですが、それが何時のまにか、当時の人々から口へと伝へられていつたのでせう。天皇をお慕ひする国民に対する天皇の御心の表現として、当時の人々がこの一首をどんなに大切にしてきたか、幕末を包んだ君臣の心がこの一首に凝縮されてゐると思はれてなりません。

三条実美——天皇への思慕

次に三条実美の歌を五首掲げておきました。三条実美は御存知の方も多いと思ひますが、明治維新のあと、政治の中枢に立つて時代の動きをリードしていつた人。ところが幕末の一時期は、孝明天皇からきびしいお叱りをうけて、当時朝廷の政治を動かしてゐた長州の人々と一緒に、都から追放されて、遠い山口の地に、さらには福岡の太宰府に流され、三年ほどの間、政治の中枢から遠ざけられてゐたのです。従つて一般の歴史家の目で見れば、西国に身をひそめてゐた実美は、天皇から裏切られたやうな辛いおもひで日々を送つたと考へても

当然でせう。ところが実際はさうではなかつた。さうではなかつたどころか実美はかうして都から遠く離れてゐる間もただひたすらに天皇をお慕ひ申し上げ、その御安泰を祈りつづけてゐました。

大君はいかにいますと仰ぎみれば高天たかまの原はらぞかすみこめたる

いづる日のかたをあふぎてうちむせび涙ながらに世をいのるかな

実美は天皇はいまどうしていらつしやるだらうかと遠い東の都の空を仰ぎ、その東の空遠く、日出づる方を仰いで、涙ながらに世を祈るのです。その実美の姿には、自分のことを理解していただけなかつた天皇に対する恨みがましい氣持など全く想像も出来ません。それを裏づけるやうに王政復古成つて都に帰つた実美は都に着いたその翌日、孝明天皇はすでにその前年におかくれになつてゐたのですが、年もおし迫つた十二月二十八日、現在の京都駅の東南、泉涌寺せんいゅうじというお寺の裏山にある、「月の輪つぎの御陵みさだま」にお詣りになつて、帰京の報告をなさるのです。その時実美が詠んだ歌をご紹介しておきませう。最初は「京にかへりつきて」といふ二首です。

かなしきやかへりてみれば月のわのみかげははやく雲がくれたる
めぐみありてわれはみやこにかへれどもかへりきまさぬ君ぞかなしき

一首目の「月のわのみかげ」とは、「月の輪の御陵」に葬られていらつしやる孝明天皇のこと、その天皇はもうこの世にはおいでにならないといふなげきです。二首目は天皇さまの御恩恵をいただいて私はかうして都に帰ることは出来たけれども、永遠にうつし世にお帰りになれない天子さまのことを思ふとたまらない悲しみにひたるといふお歌です。

次は「御陵みみさきにまうでて」といふ三首です。一首目は

かなしくも雲がくれにし月の輪のみはかをがむは夢かうつつか

「雲がくれにし」はいふまでもなく、孝明天皇がおくれになつたこと、その天皇の御陵にお詣りする今のおもひ、それはどうしても現実とは思はれないといふことでせう。二首目は

わたれどもわたれどもなほうつつとはおもひもかけずゆめの浮橋

「わたれども」は、後の「夢の浮橋」の「橋」の縁語として用ひられた言葉。どう考へてもといふことでせう。どう考へてみても、かうしていま天皇の御陵みまごのみさにお詣りしてゐるといふことは現実とは思へないといふ悲しみです。「わたれどもわたれどもなほ——」といふ言葉のくりかへしの中に実美のかなしみがひしひしと感ぜられます。三首目は

大ふねのおもひたのみしかひもなく雲がくれにしつきのかなしさ

「大ふねのおもひたのみし」は大きな船に乗つてゐるやうに、安心しきつて、まさかと思つてをりましたのに、天皇はおなくなりになつてしまつた、といふかなしみのお歌です。

先ほど申し上げましたやうに、その四年前、実美は孝明天皇から、都からの追放といふきびしいお叱りをうけてゐたのです。なのにその実美の、この天皇に対するはげしい思慕。それはどんなことがあらうと親を親として慕ふ肉親ならではの世界といふべきでせう。それは決して実美だけではなかつた。遠い平安の昔、所も同じ太宰府に流された菅原道真が、醍醐

天皇からいただいた御衣に残る余香を来る日も来る日も拜してゐたといふ、あの有名な伝承にも偲ばれる心情と全く共通した、日本独自の、他に類を見ない「君臣の情」だつたのです。

昭和天皇——終戦時における天皇と国民

次に昭和二十年、戦ひに敗れた日の昭和天皇のことについて申し上げておきませう。

先に掲げました「澄ましえぬ水にわが身は沈むとも」といふ孝明天皇の御製を読めば、すぐ思ひ出されるのは、昨日長谷川三千子先生が御話の中でおふれになつた大東亜戦争終戦の時、昭和天皇がお詠みになつた三首の御製、特にそのうちの次の二首のお歌です。

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

我が国未曾有の敗戦を前にして、昭和天皇がどんなに苦しい御心でこの事態に臨まれたか、それはこの二首の御製にあますところなく表現されてをります。一首目にあふれたおもひ、

身はいかならむとも——この身はどうあつてもいいから——といふお言葉をさらに二首目の冒頭にくりかへしてお詠みになるうちに、激動する御心の動きが、さらに強い緊張をともなつて高まつてゆくのです。とりわけ二首目の「ただたふれゆく、たみを思ひて」といふ「た」の連続音の中にこめられたおもひは、私たちの胸に永久に忘れがたい印象をとどめます。「澄ましえぬ水にわが身」を沈めると仰つた孝明天皇の御心と「身はいかならむとも」「身はいかなるとも」と繰り返して表現なさつた御心——それを貫く御二方の天子さまの御心情、それが寸分違はぬお言葉によつて表現されてゐることは決してかりそめのことではありません。ここに示された御心を別にして、日本の国の国がらあり得ない。最初に申し上げた、この日本にどうして天皇といふ御存在が絶えることなくつづいてきたのか、その疑問はこれらの御製を読むことによつて氷解するのではないでせうか。

ではこのやうな昭和天皇の御心を当時の国民はどのやうに受けとめたか、ここでは、それが最も鮮やかに表現されてゐる二つの文章を御紹介しておきませう。その一つは、終戦の時、情報局総裁だつた下村宏（海南）といふ方の「終戦秘史」といふ書物の中に収められた一文ですが、終戦の前日に行はれた御前会議において陛下が戦争終結の御聖断を御下しになつたときの情景です。

「御^{ごじょう}詔を承っているうちに、」（御詔とは天皇のお言葉。戦争終結を御決断遊ばされた陛下の御言葉です。その御言葉をお聞きしてゐるうちに）「頭は次第に下つておもてを上げる者もない。忍び泣く声がかこかしこに聞えてくる。御ことばのふしぶしに胸を打たれる。『たとえ我が一身はいかにあろうとも、国は焦土と化し、国民を戦火に失い、何として祖宗の靈にこたえんや（どうして歴代の天皇のみ靈に申し訳が立つだらうか）』という御心を拜して、涕泣（すすり泣き）の聲は次第に高まつてくる、さらに『為すべきはいとわな、マイクの前に立つてもよい（マイクの前に立つて直接自分が国民に呼びかけてもいい）』と仰せらるるに至り、忍び声を止めもあえず声を上げた。ここにもそこにもせき上げしゃくりあげる声が次第に高くなる。陛下の白い手袋の指はしばしば眼鏡を拭われ、ほおをなでられたが、私たちはとても正視するに堪えない、涙に眼鏡もくもってしまった。御詔（お言葉）が終つて満室ただすすり泣く声ばかりである」

そこに列席してゐるのは内閣総理大臣はじめすべての閣僚たち、陸海軍の最高の指導者です。その人たちがみんな天皇のお言葉に涙を流すのです。そのあと陛下は席をお立ちになる。

一同は涙の中をお見送り申し上げ、首相の官邸に引きあげるのですが、その間の状況も全く同じでした。

「長い長い地下濠をすぐる間も、車中の人となっても、首相官邸へ引き上げても、たまりの間にも閣議の席にも、思い出してはしゃくりあげ、涙は止めどもなくながれる。記者団を前にしても私はせき上ぐる涙をとどめもあえず、問う者も答える者もついに声をのんで不覚の涙にくれたのであった」

下村さんは情報局総裁といふポストでしたから首相官邸に待つてゐた新聞記者に、御前会議の様子を報告されたのでせう。ところがその記者たちも、その状況について質問を発しながら涙にくれるのです。当時は新聞記者の人たちもさういふ国民感情の中に包まれ、全身をもつて敗戦のかなしみをうけとめてゐたのです。

「天がした人といふ人こころあはせよるづのことにおもふどちなれ」——あの孝明天皇がお詠みになつた、天皇を中心にした国民同胞の世界、そこに仰がれる「君臣の情」、それは、幕末の時代から敗戦の日に至るまで一貫して変らなかつた。だからこそ、幕末の日本も、敗

戦後の日本も分裂することなく、国家生命を維持することが出来たのですが、この文章は、その間の状況を見事に活写された、記念すべき一文であると言つていいでせう。

次に御紹介するのは、その翌日、八月十五日に天皇の御放送（玉音放送）を聞いたあとの二重橋前の情景を報じた「朝日新聞」の記事です。

「大きな感情の嵐が吹きまくつてゐる。歴史未曾有の悲しみに落ちた民族の感情の嵐である。八月十五日午後の宮城二重橋前、嵐は嗚咽と悲痛の声とのなかに猛然と吹きまくつてゐた。日本は敗れた。だがこの嵐の中に立つとき、敗れざる日本、敗れざる民族がすでに苦難の未来に向かつて敢然と立ち上がつてゐる姿が見られるのである。かつて歴史において多くの国がこんな悲痛を味はつた。だが敗れてなほこのやうな姿に残される国民があつたであらうか。……玉砂利を踏んで帰つてくる人々の手には固くハンカチが握りしめられてゐた。臉は赤く泣きはれてゐた。……

静かなやうでありながら、そこに嵐があつた。国民の激しい感情の嵐であつた。濠端の柵をつかまへ泣き叫んでゐる少女があつた。日本人である、みんな日本人である。この日

正午その耳に拜した玉音が深く深く魂に刻み込まれてゐるのである。……」

終戦の日の皇居二重橋前の姿、それは皆さんも時折り、当時のニュースのフィルムで御覧になる機会がおありかと思ひますが、まさにこの記事の通り、そこには何の誇張もありません。日本の国民はこの悲しみの中から立ち上つたのです。人々は戦後のめざましい復興を絶賛する。それは勿論すばらしいことでしたが、その戦後のスタートを切つたのが、この悲しみの中から生まれた決意であつたことを忘れてはいけないし、又その情感を無視してしまへば、どうしてあのようなすばらしい戦後の復興がなしとげられたのか、その歴史そのものがわからなくなつてしまふのです。

しかし皆さんが学校で教へられている今次大戦の終末は、例へば山川出版社の高校の日本の教科書では、ただ「政府と軍首脳部は、御前会議で昭和天皇の裁断によりポツダム宣言の受諾を決定し、政府は十四日これを連合国側に通告した。八月十五日、天皇のラジオ放送で戦闘は停止され……」と書かれてゐるだけです。日本歴史未曾有のこの悲痛な民族的体験、それを別にして一体どこに歴史があるのか、感情のひとかけらもない、その砂を噛むやうな一文で、「歴史」が語られることに私は本当に深い憤りをおぼえずにはをられません。

今上天皇——「象徴」の意味するもの

次に、今上天皇のことについてつります。これまで申し上げた終戦の年、その時今上天皇、当時の皇太子殿下はまだ小学校六年生に御在学中でした。

しかしその幼い身でありながら殿下はこの日本の歴史に未だ嘗つてなかつた敗戦といふ悲痛な運命を背負つて、自分は次の天皇の位につくのだといふ強い決意を胸に日々おすごしになるのです。殿下は僅か十二歳にも足りない御幼少の時から、このやうな運命のただ中で、天皇として生きるといふことがどういふことなのかを考へつづけながらご成長なさる。そのやうな御体験は、百二十五代の天皇を通じて全く前例のない御体験だつた。そのことを私たちは深くお慰びしなければいけないと思ふのです。

そしてその時から二年、昭和二十二年五月、日本国憲法が施行され、その第一条にはご存知の通り

「天皇は、日本国の象徴であり、日本国民統合の象徴であつて……」

といふ表現がなされてゐました。天皇の御存在を「象徴」といふ言葉で現はしていいのか。

人々はこの「象徴」といふ言葉についていろいろと議論を重ねてきました。しかし皇太子殿下としては、「象徴」といふ言葉は、それを議論の対象とする前に、御自分の生き方の根底を示すものとしてお受けとめになつたのではないか。その時殿下の心に浮んだのは、これまでの長い歴史を通じて天皇が歩んでこられた生き方だつたのでせう。象徴といふ言葉と歴代の天皇に伝えられてきた御心情と、それがどのように結びつくのか、それが皇太子殿下にとつて最大の課題だつた。かうして昭和五十八年、御誕生日をお迎へになつた時の記者会見の折に殿下は、

「憲法で天皇は象徴と決められたあり方は、日本の歴史に照らしても非常にふさわしい行き方と感じています。やはり昔の天皇も国民の悲しみとともに味わうように過ごされてきたわけです。象徴のあり方はそういうものではないかと感じています」とお述べになり、さらに昭和六十一年には同じく「天皇が国民の象徴であるというあり方が理想的だと思ふ」と仰つたあと、その典型的なお姿として、疫病の流行や飢饉に當つて民生の安定を祈られた嵯峨天皇（平安時代）以来の写経の御精神や、「朕、民の父母と為りて徳覆おほふこと能はず、甚だ自ら痛む」といふお言葉を写経の奥書にお書きになつた後奈良天皇（室町時代）をお偲びになつて、象徴のあり方を直接、歴代天皇の御足跡に求めていらつしやるのです。従つて平成二年、御

即位式の折りに、「日本国及び日本国民統合の象徴としてのつとめを果すことを誓う」と仰つたのも、単に「日本国憲法」の条文をそのまま引用されたのではなく、御即位をお迎へになるまでの、長い御思索の末に生まれた確信の御表現だつたと言つていいでせう。

「国民と悲しみをともにするのが象徴といふことの内容である」との御旨みこゝちのお言葉、それをこの憲法の原案を作つた占領軍に聞かせるなら全く思ひもよらない、驚くべき解釈だと思ふでせう。それはこれまで、国民の悲しみを悲しみとして生きてこられた歴代天皇の御足跡、その「君臣の情」にうけつがれてきた日本独自の精神伝統があつてはじめて生まれた解釈ではないでせうか。天皇は「象徴」といふ言葉に「いのち」を与へられた。そしてそのやうな意味での皇室本来の道を陛下はいまひたすらに、歩みつづけていらつしやるのです。そのやうな今上陛下の御心境を、とりわけ印象深くお述べになつたのは皇后陛下が平成七年の記者会見の席でお話しになつた時のお言葉でした。

「人の一生と同じく、国の歴史にも喜びの時、苦しみの時があり、そのいずれの時にも国民と共にあることが、陛下の御旨みこゝちであると思います。陛下が、こうした起伏のある国の過去と現在をお身に負われ、象徴としての日々を生きていらつしやること、その日々の中

で、絶えずご自身の在り方を顧みられつつ、国民の叡智がよき判断を下し、国民の意志がよきことを志向するよう祈りつづけていらっしやるのです」

この「起伏のある国の過去と現在をお身に負われ、象徴としての日々を生きていらっしやる」といふお言葉に天皇さまのみ心のすべては表現されてゐるのではないでせうか。

さらに今年（平成十一年）の一月一日に発表された両陛下のお歌の中で、皇后さまは次の一首を詠んでいらつしやいます。

ことなべて御身ひとつに負ひ給ひうらら日のなか何思おほすらむ

「ことなべて」とは、「あらゆることをすべて」といふ意味でせう。この日本の国のすべてのおもひを自分の一身に背負つて天皇さまは生きていらつしやるのだが、いまうららかな春の日射しの中に立つていらつしやるそのお姿を拜見してゐると、陛下の御胸中にどのやうなおもひが去来してゐるか、それが偲ばれてならないといふお気持ちでせう。「うらら日のなか」の陛下の御姿、それは「後ろ姿」とは書いていらつしやらないのですが、私にはさう思はれ

てならないのです。天皇さまの背中ににじみ出てゐるやうなおもひ、何かにじつと耐へてをられる、さういふ御姿——象徴としての日々を生きてをられるといふのはさういふことではないでせうか。

皇后陛下のお言葉——複雑に耐へること

皆さまは昨年（平成十年）の九月、皇后陛下が『子供時代の読書の思い出』といふ、すばらしいお話をなさつたのをテレビで御聞きになつたでせう。その中で皇后さまは読書によつて子供たちはさまざまに人生を知ると仰いました。一番最初に出てくる「でんでん虫の悲しみ」にも現はれてゐる人生の悲しみ、人生は決して単純ではない。そのことを皇后さまはそのお話の最後のところで次のやうに言はれました。

「読書は、人生の全てが単純でないことを教えてくれました。私たちは複雑に耐えて生きていかなければならないということ。人と人との関係においても。国と国との関係においても」

人生のすべては決して単純ではない。その複雑さを回避して、一つの立場でものを考へ、裁断してしまふことは許されない。それは人と人との関係においてもさうだし、国と国との関係においても同じなのだ。私たちはその複雑さに耐へて生きていかなければいけない。――だが思へば日本の皇室の伝統そのものが、その「複雑さに耐へる」といふことにあるのではないか。先に述べました孝明天皇と幕府との関係においても、終戦の御決断をお下しになつた昭和天皇においても、当時の与論は真二つにわかれて、国の土台骨をゆるがす嵐は、猛烈な勢ひで吹きまくつてゐた。その中にあつて天皇がおとりになつたお立場は、ただその嵐に耐へるといふことしかなかつた。それをただひたすら耐へつづけ、すべての国民のおもひを「ことなべて」背負つてこられたのが、歴代の天皇のお姿であつた。今の陛下も全く同じ御心境で混迷の時代をただ耐へていらつしやるのです。国民に接したまふ時のあのにこやかな御表情、しかしその背後にたたへられた御心境、それは常に側かたはらにいらつしやる皇后さまには手にとるやうにおわかりになるにちがひない。さういふ御二方のお姿が、この皇后さまの一首に見事に表現されてゐると思ふのです。

そのやうな両陛下の御姿をお偲びしてをりますと、私には聖徳太子がお書きになつた「三

経義疏」——三つのお経の註釈書ですが、その中の維摩経義疏の中の「大士はその身の苦を忘れて苦を同じうして化す」といふお言葉が偲ばれてならないのです。大士とは菩薩のことです。衆生のうち一人でも救はれない者がある限り、自ら救はれることを拒絶なさるといふのが大慈大悲の菩薩です。私には陛下のお姿がその菩薩の姿と重なつてくる。それは決して私一人の思ひこみではないと思ふのです。

天皇皇后両陛下のお歌——「心を寄せる」といふこと

お手許にお配りしたプリントに平成四年にお話になつた紀宮さまの御感想を載せてをります。この平成四年といふ年は、その前年の六月、雲仙普賢岳が噴火、大変な災害をもたらした、その翌年です。

「昨年の噴火による災害が起こつて以来、毎日、新聞やニュースなどで雲仙について心を配つておられる両陛下のお姿を拜見しておりまして、常に心を寄せつづけるという姿勢が皇室のありようの根本にあるのではないかと感じました」

この「常に心を寄せつづける」——それこそ菩薩の姿さながらではないか。
さういふ両陛下の御心をお偲びするよすがとして、その雲仙の噴火、およびそれから四年後の阪神淡路大震災（平成七年一月）の折の、両陛下のお歌を味はつてみたいと思ひます。

天皇陛下御製・雲仙岳噴火

人々の年月かけて作り来しなりはひの地に灰厚く積む

皇后陛下御歌・雲仙の人々を思ひて

火を噴ける山近き人ら鳥渡るこの秋の日日安からずるむ

天皇陛下御製・阪神淡路大震災

なる（地震）をのがれ戸外こがに過す人々に雨降るさまを見るは悲しき

皇后陛下御歌・雛のころに

この年の春燈かなし被災地に雛なき節句めぐり来たりて

それぞれの御歌の下の句、「なりはひの地（生活を托してきた土地）に灰厚く積む」「この秋の日々安からずむ（この淋しい秋の日をどんなにか不安なおもひですこしてゐることだらう）」「雨降るさまを見るは悲しき」「雛なき節句（飾るべきお雛さまも何一つない節句が）めぐり来たりて」——くりかへし読んでゐると犇々ひしひしと迫るものがありますね。「常に心を寄せつづける」といふのが「皇室の姿勢」であるといふ紀宮さまのお言葉はかういふことなのか、といふことがよくわかります。

このやうな両陛下の御心をお偲びしてゐると、先ほど申し上げました「その身の苦を忘れて苦を同じうして（衆生の苦しみをわが身の苦しみとして）化す（教化し導いてゆく）」といふ菩薩の姿が両陛下のお姿に重なつて見えてくるといふのも決して過大な表現ではないと思ふのです。

私は本日のお話の副題に「日本の歴史を貫く『まごころ』の世界」といふ言葉を添へておきました。「まごころ」といふのは、いはゆる善と悪とをわけた意味での「善」の世界とは

違ふ。一口にいへば嘘のない、ありのままの眞実の世界、幼なごころに帰るやうな世界なのです。日本における「君臣の情」の通ひあふ世界には、世界の専制君主が臣下と接する時の冷たい世界とはおよそ無縁の、心のふるさとに帰つてゆくやうな世界があつた。「さまざまに泣きみ笑ひみ語りあふ」さういふ世界があつた。それはなぜか。それは、今日のお話の冒頭に小田村先生のお言葉を引用して申し上げたやうに、「母親に」、すなはち「皇室に」、「慈愛が先行してゐる」からです。だからこそ、その皇室の「まなざし」に包まれた国民は、君臣の情のふれあふ瞬間に、「まごころ」を実感することが出来るのです。「日本の歴史を貫く『まごころ』の世界」とはさういふ意味なのです。

しかし、皆さんは学校で日本の歴史を学ばれた時に、とりわけ天皇の問題にふれたお話をお聞きになつた時に、さういふ「君臣の情」にふれたお話を耳にされるやうな経験は殆んどなかつたと思ふ。天皇は支配者であり、国民は被支配者であるといふ冷たい上下の関係としての認識しか教へられてゐないと思ふ。そしてたまたま慈悲深い天皇のご存在といふ話が出てきても、人々はそれは作られた美談にすぎないといふやうな冷たい目で見ることによつて自分のところを閉ざしてしまつてゐる。それが今の思想界、教育界を蔽ひつくしてゐるもののお見方です。それがどんなに偏見に満ちた、歴史を無視した見方にすぎないか、これまでのお

話で御理解いただけただけなのではないでせうか。

岡潔先生のことば——生命が生命を認識する

最後にもう一つつけ加へておきませう。皆さまは、世界的な数学者で、現代の日本の思想界、教育界の乱れに強い憂ひをいだいて、数多くの文章を残された岡潔きよよしといふ方をご存知でせうか。先生は昭和四十年、九州の別府の奥の城島高原といふところで行はれた私たちのこの合宿教室（第十回）にもおいでいただいて「日本の情緒について」といふすばらしいお話をしていただきましたが、その先生の御著書「春風夏雨」の中の「生命」といふ一文に次の一節があります。

「人の情緒は固有のメロディーで、その中に流れと彩りいろどがある。そのメロディーがいきいきしている、生命の緑の芽も青々としている。そんな人には、何を見ても深い彩りや輝きの中に見えるだろう」

人間がもつてゐる「いのち」、それは「ミミズが生きている」といふやうな意味での「いのち」ではない。それは、言ふならば「メロデー」、日本風に言へば「しらべ」といふべきものだらう。元來人々はそれを一人々々もつてゐるのだが、そのいのち、そのメロデーが生き生きしてゐると、その人の目にうつるすべてのものは「深い彩りや輝き」の中に見えるてくるはずだ。

「ところが、この芽が色あせてきたり、枯れてしまつたりしている人がある。そんな人には何を見ても枯野のようになしかみえないだらう。これが物質主義者とよばれる人たちである。生命の緑の芽の青々とした人なら、冬枯れの野に大根畑を見れば、あそこには生命があるとすぐわかる。生命が生命を認識するのである」

「生命が生命を認識する」といふ言葉はすばらしい。ここまで読めば、どういふ意味で私がこの一文を引用したかはおわかりいただけるでせう。すなはち今の人々が天皇のことを論じてゐるのを聞けば、それが「何を見ても枯野のようになしか見えない」物質主義者の目であることがよくわかります。この合宿教室の導入講義で、山口秀範事務局長が、「合宿の目指

すもの」といふ題に添へて「目に見えぬものを信じる力を」といふサブタイトルをつけてをられました。まさに「目に見えないもの」は何一つ信じようとしな人々、その人の目には何を見ても枯野のやうにしか見えない。その枯野のやうな教科書によつて、皆さんは日本の歴史を学んでゐる。これでは天皇の政治の本質など、わかるはずはないでせう。岡先生が言はれる「生命が生命を認識する」といふことの意味は重大です。生きた目をもたない物質主義者の手で書かれた歴史の教科書、さういふ歴史の見方から訣別しなければ、私たちには天皇の眞実のお姿など永久に見えてこない。「君臣の情」といふ情感の通ひあひ、そこに生まれるメロデー、皆さまはそれを大切にしながら、日本の歴史の根幹をなす、天皇を中心にした「日本の国がら」の本質に迫つていただきたいと思います。思ふのです。

講話

ビルマ（現ミャンマー）

での死線を越えて

——若き友らに伝へたいこと——

市ヶ谷漢方クリニック院長

医学博士

桑木崇秀



はじめに

大東亜戦争開戦前後のこと

軍医となつて戦地へ

インパール作戦に参加

白骨街道をさがつて入院

退院、部隊復帰そして終戦

戦陣での歌

復員から今日まで

これだけは知つてほしい大東亜戦争のこと

皆さんに読んで頂きたい本

はじめに

私は大正五年四月生れですから数への八十四才になります。戦争体験者、殊に戦場体験者が年々減つて行きますので、生きてゐるうちに一人でも多くの若い方に大東亜戦争（皆さんは太平洋戦争と習はれたかと思ひますが、大東亜戦争といふのが正式の名前です）の眞実を伝えて死にたいと願つて居りましたので、今日その機会を与へられましたことを本当に嬉しく思つて居ります。

皆さんは学校やマスコミなどで、戦争はすべて悪いもの、大東亜戦争は間違つた戦争であつたと習つて来られたかと思ひますが、それは眞実ではありません。これからお話ししますことが、大東亜戦争について皆様が少しでも正しい認識を持つて頂くよすがともなれば幸ひと存じます。

大東亜戦争開戦前後のこと

大東亜戦争が始まりましたのは御承知の通り昭和十六年十二月八日であります。それは私が慶応義塾大学医学部の最終学年の時、本来なら翌年三月に卒業する予定でありました。それが戦争が始まりましたために十二月二十五日に繰り上げ卒業となつた訳です。

当時私がどのやうな状態であつたかと申しますと、昭和十三年に、『出家とその弟子』で名高い倉田百三先生の「生きんとての会」といふのが発足して、丁度この国文研の合宿のやうに、色々な大学、専門学校の男女学生（一部社会人も）が参加してゐたのでありますが、私も最も積極的な会員の一人としてこれに参加して居りました。毎月例会がありました。「愛と憎しみ」とか「自由とは」とかいふテーマで討論が行なはれたのですが、私が「ヒューマニズムの立場からはイギリスも愛さなければならぬ」と言つたのに対して、先生は「單なるヒューマニズムでは駄目だ。我々はイギリス的なの、経済至上主義的なのを憎まなければならぬ」と言はれました。そして、強い価値と高い価値を峻別され、日本は決して第二のイギリスになつてはならないと戒められました。イギリスが植民地で搾取しながら繁栄



するといふ方式を賤しいことと見られたのです。

十六年の最後の夏休みはどうしたかと申しますと、当時学生義勇軍といふ民間組織がありました。北海道の千歳の近くで開拓訓練があるから参加しないかといふことで参加しました。東大を初め全国から学生二七五名が、強制でなく全くの自由意志で参加しましたが、慶応の医学部からも私を含めて六名参加しました。湿地帯に運河を掘って湿地帯を美田に化さうといふ目的と、もう一つは運河で石狩川の支流と勇払川いさほつ川の支流をつないで、日本海と太平洋の間を潜水艦が通れるやうにしようといふ目的でありました。毎日スコップで掘つたり、トロッコを押しつたりの生活で、掘立小屋の宿舎に帰つて夕食をすませますと、班毎に討論をしたり将来の夢を語つたり致しました。夢と言つても当時は既にABC Dラインによる圧迫がジリジリと迫つて居りました時期で、何れ近い内

に軍服を着て戦はねばなるまいといふ覚悟のやうなものが皆の心を占めて居りました。三週間の訓練を終へて別れる時も、もうこれが今生の別れになるかも知れない、お互ひ潔く死なうではないかといふ心境でありました。

後日談になりますが、我々が掘つた後は追加掘削もされたのですが、湿地帯は美田と化し、運河の上には「大学橋」といふ名の橋がかかり、隣接する公園には「学生義勇軍流汗の跡」といふ石碑が建つて、裏面には掘削に従事した学生の名が大学毎に記されて居ります。その約半数は戦死したのです。

十二月八日に何をしたか記憶がハッキリ致しませんが、「よくぞやつた」と大半の日本人が歓喜してこの日のニュースを聞いたことだけは確かです。十一月二十七日に所謂ハルノートが示されて、隠忍自重もこれが限度だといふことを、日本人の大部分が知つてゐたからです。

軍医となつて戦地へ

当時軍医の不足を補ふために短期現役軍医制度といふのがありまして、私も二カ月半程の

可成り厳しい訓練を受けて、昭和十七年四月には陸軍軍医中尉に任官しました。そして暫くの内地勤務の後、昭和十八年五月にビルマ派遣軍の歩兵聯隊付を命ぜられました。

初めて戦地に第一歩を踏んだシンガポールは、まだ日本の制空権が確立して居りまして、毎日のやうに日本の飛行機が低空で飛んで頼もしく思はれましたが、その頃日本は既に緒戦の勝利から一転して敗戦の兆しを見せ始めてゐた時期で、私が赴任した聯隊も、ガダルカナル島で全滅スレスレの打撃を受けて辛うじて撤退して来た部隊でありました。私がサイゴン（今のホーチミン市）でこの部隊を迎へて、最初に行つた仕事は、来る日も来る日もマラリア患者を病院に入院させる仕事でありました。

ここで部隊は暫く休養をとつて、タイを経てビルマに入り、あちこちから集められた部隊を再編成して新しい作戦に臨んだのであります。これが所謂インパール作戦であります。

インパール作戦に参加

インパール作戦とは北ビルマからアラカン山脈を越えて印度のインパールを占領しようといふ作戦です。何故インパールなのかと申しますと、支那の蒋介石政権を援助するために、

英国が武器・弾薬をインパールを通つて運んで居りました。だからここを押へれば支那は参ると見たのです。それともう一つは我々と一緒にチャンドラ・ボースの率ゐる印度国民軍が進攻したのですが、印度国民軍が印度に入れば、印度に居る英印軍を内部崩壊させて印度の独立を齎し、戦局を大きく変へることができると期待されたのです。

当時は太平洋戦域全域で押されてゐる状況でしたので、この作戦は一種の賭けのやうなものでありましたが、印度国民軍の強い要望もあつて決行することに決つたわけです。

昭和十九年二月、作戦基地を出発して、アラカン山脈といふ千メートルから三千メートル級の山を登つては降り、降りては登るといふことを繰り返して、四月半ばにはインパールの北、コヒマといふ所へ到着しました。何故コヒマなのかと言ひますと、コヒマを押へさへすれば、インパールは孤立して程なく陥ちるだらうと予測されたからです。

ところがその頃の日本は、飛行機もなく弾薬も不足勝ちで、剩へ食糧の補給も殆んど期待できず、それに反して英印軍の方は輸送機を使つて弾薬も食糧も幾らでも補給できる状態でありましたので、コヒマもインパールもいつまでも陥落するに至らず、五月末には遂に撤退命令が出て撤退することになりました。

白骨街道をさがつて入院

撤退と申しまして五月から数カ月間は所謂雨季で、昨日は路であつた所が今日は川になるといふ状況で、その中を食糧不足で痩せ衰へた兵士達が路を求めつつさがるといふことは大変なことでありました。おまけにマラリア・アメーバ赤痢といふ風土病に冒された兵士も多く、部隊から離れてトポトポとさがる途中、力盡きて路傍に蹲つたまま死に絶える者も数知れずといふ状況でありました。中にはまだ生きてゐるのに蠅が蛆を生みつけて、蛆が目や鼻や口のあたりを這ひずり廻つてゐるのに追ひ拂ふ力もなく、そのまま死に絶える者もありました。

私達はここを白骨街道と名づけたのですが、かく言ふ私自身もマラリアとアメーバ赤痢と栄養失調で部隊と行動を共にできなくなり、伝令兵二名に付き添つて貫つて白骨街道をさがり、十一月の初めにはランゲーン（現ヤンゴン）の陸軍病院に入院致しました。

ここで栄養の補給と適正な治療を受けまして、約二カ月で四十キロそこそこの体重が五十キロ近くまで回復して退院し、部隊に追及したわけですが、入院中偶々手に入れた元シンガ

ポール植物園長バーキル博士の『ビルマの薬用植物』といふ書物が大変役に立ち、爾後の戦場での軍医としての仕事（内地からの薬の補給は殆んど期待できませんでした）に大変プラスになったこと、及びこれがキツカケとなつて帰国後漢方薬の研究をライフワークとするやうになりましたことは、思へば不思議な縁といふべきであります。

退院、部隊復帰そして終戦

部隊に復帰して、昭和二十年一月から二月にかけて所謂イラワジ会戦を戦ひましたが、こゝでも戦車・飛行機対歩兵の戦で、夜間斬り込み隊などで日本軍は勇敢に戦ひましたが結局イラワジ河の線を突破され、やむを得ず泰緬国境に近いシャン高原を南下して、ビルマの東南隅に近いモールメン近くで八月十五日を迎へました。

最前線のこと、勿論玉音放送など聞けませんでしたが、八月十六日か十七日頃日本が負けたのだと聞いて、一時は放心状態になつたことを覚えてゐます。

戦陣での歌

次に私が戦陣で作った歌——拙い歌でありますが六首ほど御紹介しませう。

一、壕の中で

小さき虫雌雄めつちゆう並びてあはれなり生命いのち生み生みて死ぬると思へば

虫も草も小さき命受け継ぎて大き命を支ふるあはれ

子も孫も幾千代かけて大君の辺へにこそ死ねと唯祈るなり

二、武装解除

遠雷の音する夜なり手渡してそのあへなきに我泣きにけり

事しあらばこの一振りの刀もてまつろひまつらんと念じ居りしに

取らるるは取られてあらな慟哭の心はやがて国守るべし

「二、壕の中で」は昭和十九年五月頃の歌で、言はば私の辞世の歌です。当時私は既に結婚してゐて、祖国に子供を残して居りました。「後に続くを信ず」と言ひ残して、沢山の特攻隊員が死んで行つたことは、皆さんの中にも知つて居られる方が少なくないと思ひますが、当時戦場に居た者は皆同じやうな思ひで居たのです。そして死ねば靖国神社の英霊となつて、霊界から国を護らうと考へたのです。

「二、武装解除」の歌は、戦ひに敗れて軍刀を渡した時の無念さを歌つたものですが、恐らく当時の日本人の大部分は、この無念さをバネとして復興を誓つた——といふのが実際の姿で、平和が来て喜んだなどといふのは当時を知らない人が言ふことだと思ひます。

事実、抑留生活中も、与へられた労役を終へると、野球の試合などで体を鍛へる一方、読書や著述や、時には演芸大会、星座や易の講話など、夫々が持てる能力を生かして、帰国後の活動に備へたものです。

復員から今日まで

昭和二十二年五月一日に復員して、多少の紆余曲折の後、結局東洋医学の研究をライフワー

クとすることになり——私が漢方を始めた頃は、漢方なんか医学ではないと見られてゐた頃でありましたから、その中で初志を貫くことは大変なことであつたわけで——夢中でそのことに従事してきましたが、ふと気がついたら日本は大変なことになつてゐる、日本が日本でなくなつてゐる——といふことに気がつきました。現在ではむしろ漢方は二の次で、大東亜戦争についての正しい知識、日本の在るべき姿を若い人達に伝えることを私の老後最後の使命としたいと、今日もかうして皆さんの前に立つてゐる次第です。

これだけは知つてほしい大東亜戦争のこと

皆さんにお渡しした『孫たちとの会話』といふ冊子を読んで頂ければ、大東亜戦争について正しい認識を持つて頂けると思ひますが、大東亜戦争についてこれだけは知つてみてほしいと思ふことを以下箇条書きに致しましたので御覧下さい。

一、大東亜戦争は日本が好き好んで起した戦争（侵略戦争）ではないといふこと（A B C D ラインに包囲されて、やむを得ず自衛のために始めた戦争であること。昭和十六年十一月二十七日の

アメリカのハルノートは事実上アメリカの宣戦布告であること。

二、昭和天皇はとりわけ戦争をお避けになりたかつたといふこと（いよいよ開戦やむなしとの断を下された時、明治天皇の「四方の海皆はらからと思ふ世になど波風の立ちさわぐらん」の御製を二度奉唱されて後御裁可になつたと伝えられてゐる）。

三、真珠湾はだまし討ちといふのも誤り（日本の宣戦布告の通達は、翻訳の遅れによつて確かに真珠湾攻撃後となりはしたが、実際には無電傍受によつてアメリカは既に知つてゐた。それを真珠湾には伝へずに、日本に先に手を出させて、リメンバー・パールハーバーといふことでアメリカ国民の敵愾心をあほつたのである）。

四、日本軍は軍紀厳正で勇敢で強かつたこと（残念ながら物量の差で——緒戦は勝つたが——結局負けた。物量が同じなら文句なしに勝つてゐた）。

五、終戦処理が円滑に進み、日本が復興できたのは、何よりも昭和天皇のお蔭であること（「身はいかにもともいふくさどめけりただたふれゆく民をおもひて」といふ昭和天皇が終戦時に読まれた有名な御製があるが、昭和天皇はたとい御自身が死刑になつても国民を救はうとなさつた。その端的な現はれが昭和二十年九月二十七日のマツカーサーとの御対面で、マツカーサーは初め天皇は命乞ひに來たのだらう位に思つて迎へにも出なかつたのが、昭和天皇が自分の身はどう処分されても構はない

から国民を飢えから救つてほしいと申し出られたのにびつくりして、それからすつかり皇室に対する考へ方が變つたといふ。昭和天皇は昭和二十一年二月からは全国各地に御巡幸になり、遺族達を励まされた——これらのことがどの位日本の復興に有形無形の貢献をしたか、測り知れないものがある。

六、東京裁判は国際法的には裁判の名に値しない復讐劇であること（裁判とは初めに法律があつて、それによつて裁くのが裁判である。所が東京裁判といふのは、「平和に対する罪」など、国際法にはない事後法によつて裁いたもので、裁判に名を借りての一種の復讐である）。

七、アメリカは日本占領期間中徹底的に言論統制と検閲を行ひ、日本の伝統的精神を凡て否定し、アメリカ的正義を押しつけたといふこと（アメリカは言論の自由を言ひながら実は徹底的に言論統制と検閲を行つた。これが七年間も続いたのである。日本の軍国主義はアジアを侵略した、アメリカが来たことによつて平和が来た、民主主義の日本になつた——といふ主旨の言論や文章以外は凡て禁ぜられた。嘘も百遍言はれば本当と思ふものである）。

八、アメリカが占領期間中に作つて押しつけた日本国憲法は日本弱体化を目的として作られたもので、早急に破棄し新しい憲法をつくるべきものであること（占領期間中に憲法を改めていけないことは国際法で定められてゐるから、本来は国際法違反なのである。日本弱体化を目ざして違法に作られたアメリカ製憲法を、平和憲法だ、理想の憲法だと今迄変へないできた——といふのが実

は日本国憲法の正体なのである。日本人が一刻も早くこのことに気がついて憲法を改めることこそ、日本を本当の日本にするための基本である)。

九、日本は負けたけれども日本のお蔭でアジアの国々は独立したといふこと(日本が進撃した時、インドネシアもビルマもマレーシアも、皆日の丸の旗を振つて歓迎した。彼等は皆オランダやイギリスから独立したかつたが自力では出来なかつたのである。彼等は独立して日本に感謝こそすれ、恨んでなど居ない)。

十、学校教育やマスコミによつて、大東亜戦争といふものが非常にゆがめられて伝へられてゐる。それで日本人の中にも、日本は侵略戦争をしたのだからアジアの人々に謝らなければならぬなどと考へてゐる人が沢山ある。それでは死んで行つた英霊は浮ばれまい。また靖国神社には「A級戦犯」が祭られてゐるから外すべきだなどといふ言を為す者もあるが、「戦犯」とは東京裁判で不法に名づけられたに過ぎず、「刑死者」は日本のために命を捧げた人として当然一緒に祭るべきものである。

皆さんに読んで頂きたい本

以上の十項目を正しく深く理解するために読んで頂きたい図書として次のものをお薦めします。

①中村繁著『大東亜戦争への道』展転社 三八〇〇円。大東亜戦争が起るべくして起つたことを理解するための最適書。

②清水馨八郎著『侵略の世界史』祥伝社 一六〇〇円。これを読めば侵略したのは白人諸国で、大東亜戦争はその結果であることが分ります。

③名越二荒之助著『大東亜戦争を見直そう』原書房 七五〇円。

④ASEANセンター編『アジアに生きる大東亜戦争』展転社 一二〇〇円。

⑤昭和を語る会編『若き日の大東亜戦争』展転社 一五〇〇円。

③④⑤を読むと、大東亜戦争つてこんな素晴らしい戦争だったのかと感激するでせう。

⑥木下道雄著『新編宮中見聞録』日本教文社 一一四三円。特に「マツカーサー元帥との御会見の真相」を読んで頂きたい。

⑦鈴木正男著「昭和天皇の御巡幸」展転社 二八〇〇円。

⑧小堀桂一郎編「東京裁判・日本の弁明」講談社学術文庫 一二〇〇円。

⑨富士信夫著「こうして日本は侵略国にされた」展転社 一八〇〇円。

⑩小堀桂一郎著「さらば敗戦国史観」P H P 研究所 一四五〇円。

⑪終戦五十周年国民委員会編「世界がさばく東京裁判」ジュピター出版 一六〇〇円。

⑫東中野修道著「南京虐殺の徹底検証」展転社 一八〇〇円。

⑧⑨⑩⑪⑫は東京裁判とは何であつたのか、東京裁判によつて如何に歴史が歪曲されたかを知る上の好著。⑫は南京大虐殺なる虚構が完膚なきまでにあばき盡されてゐます。

⑬小堀桂一郎著「靖国神社と日本人」P H P 新書 六九〇円。

⑭小堀桂一郎著「昭和天皇」P H P 新書 八五七円。

⑬⑭は何れも小堀先生の近著ですが、⑬は靖国神社を知るための格好の書、⑭は昭和天皇の御一代記でもあり昭和史そのものでもあります。大東亜戦争を理解するためにはこの書一冊読んでも分ると言へる書です。

最後に⑮拙著「大東亜戦争はまだ終わらない」展転社 二〇〇〇円 を読んで頂ければ、

今日の話はさらによく理解できると思ひます。拙著の書中に抑留生活の中で書いた戯曲「日

本武尊」を載せてゐますが、その（二）弟橘姫御入水の段は是非読んで頂きたいと思ひます。英霊はすべて民族の永遠の生命のために死んだ訳ですが、一人の生命と永遠の生命を考へる上で、皆さんによいヒントを与へるのではないかと思ひます。

講話

『古事記』のいのち

亜細亜大学名誉教授

夜久正雄



はじめに

『古事記』の「かたち」

——『王書』（ペルシャの神話・伝説・歴史）と『古事記』の上・中・下三巻構成——

『ラーマヤーナ』——インドの英雄伝説・叙事詩——

中国の『史記』（紀伝体）と『古事記』

ギリシャの神話と伝説と歴史の誕生

「歴史の誕生」と「俳句の誕生」を比較して

『古事記』は神話時代の歴史

『古事記』（ふることぶみ）のいのち

はじめに

老人ですので坐つて話させていただきます。

かうして壇から首を出してゐますと、思ひ出したことがあります。

ある大文学者が、還暦の六十歳をすぎて話をするところがありました。還暦をすぎたから、棺桶に片足突つこんで話をしてゐるやうなものだ、と言はれました。それで、私は七十五歳で話をするとき、棺桶に両足突つこんで話をしてゐるやうなものだ、と言ひました。いまかうして、壇から首だけ出して話をする数へ八十五歳の私は、棺桶から首だけ出して、（会場大爆笑）——遺言を話すやうなことになります。

本日の私の演題は「古事記のいのち」となつてゐます。これは私の書いた本の題名の『古事記のいのち』（国文研叢書Ⅰ）をとつたのです。

この本は、私が若い時から『古事記』を読んできた感想を述べたものです。これを読んでいただければ、『古事記』の「いのち」に触れていただけるかと思ひます。「古事記のいのち」については、またあとでお話しますが、今日はまづ『古事記』の「かたち」から話してゆき

ます。

何故かと言ふと、今日、教科書でも、教科書を書いてゐる有名な大学教授の書物でも、『古事記』に書いてあることは、「歴史的事実」ではない、作り話——ウソだと言つてゐるのです。

これでは、『古事記』を読む人が無くなるのは当然のことですし、また私どもが『古事記』を読んでほしいと言つても、読んでもらへないのも当然のこととなつてしまひます。

そこで私はまづ『古事記』といふ書物がどういふ形をした書物であるかを説明して、『古事記』に書いてあることが、歴史的事実であるかどうか、ホントかウソか、といふ問ひに答へることから話をさせていただくかと思ひます。

『古事記』の「かたち」

——『王書』（ベルシャの神話・伝説・歴史）と『古事記』の上・中・下三巻構成——

最近といつても二ヶ月ほど前に、私は岩波文庫で『王書』（古代ベルシャの神話・伝説）といふ本が出版されたのを知つて、早速買つて来て読んでみました。ここに持参したこの本です。



この本のカバーに次のやうに書いてあるのです。

「神話・伝説・歴史時代の三部構成からなるペルシャ建国の物語」と。

これを読んで驚きました。

この中の「ペルシャ」を「日本」に代へると、この文はそのまゝ『古事記』の説明になるからです。

『古事記』は、上・中・下三卷に分かれてゐて、上卷は「神話」、中卷は「伝説」（英雄伝説叙事詩）、下卷は「歴史物語」といふ「三部構成」です。（註・付説（一））

それに「建国の物語」といふ言葉を聞いてとてもなつかしいと思ひました。

日本では「縄文時代」とか「弥生時代」とか「古墳時代」とかといつて、「建国」といふ言葉があまり使はれません。残念なことです。

この本のカバーにはまた次のやうに書いてあります。

「今も、誰でもその一節を暗誦することができる、と言われるほどイランの人々に愛されている『王書』と。

イランはペルシャのあとです。いまはイスラム教の国ですが、先祖はゾロアスター教ペルシャ大帝国です。その「建国の物語」を、「誰でもその一節を暗誦することができる、と言われるほど」、愛してゐるといふのです。

日本の国の「建国の物語」は『古事記』と『日本書紀』でせう。この中の「一節を暗誦することができる、と言われるほど」、この古典を「愛している」人が、戦後教育を受けた人々の中にどれくらゐるでせうか。「誰でも」と言へることのできないのは勿論のこととして、ごく少いのではないでせうか。

どうしてかういふことになつたか、といふと、前にもお話しましたやうに、「神話」とか「伝説」とかは、歴史的事実ではない——何年何月何日に誰がどういふことをしたかを書いたものが歴史だから、「神話」「伝説」は、歴史的事実ではない、ウソ・イツハリである、と教科書で教へてゐるのです。

さういふ現状ですから、『古事記』の「いのち」の話をする前に、「神話」「伝説」と「歴

史」との関係についてお話します。

しかし、イランでは、さきのやうに、「神話・伝説・歴史」を三部構成として、まとめて「建国の物語」としてゐるわけで、「神話」「伝説」を「歴史的事実」として教へてゐるのではないのです。「歴史」の書かれる前——文字を使ふ前の時代に——語り伝へられた建国につながる神々・英雄の伝説の書としての『王書』（王たちの書）を愛読してゐるのです。

これはイランだけか、といふと、そんなことはありません。どの国も自国の神話・伝説を大切にしてゐるのです。

『ラーマーヤナ』——インドの英雄伝説・叙事詩——

例へばインド。——インドは「歴史」の無い国と言はれます。中国の秦・漢帝国と対立する古代マガダ国などは建国の歴史を書かなかつた。しかし、神話を含む英雄叙事詩「マハーバラタ」（大バラタ族ヘインドヒンディー族の自称）戦記」とラーマーヤナ（ラーマ王子征旅記）といふ大雄篇叙事詩を持つてゐる。現代インドの歴史家は、この二大雄篇がインドの国民の心を一つにしてゐる、と説いてゐます。

「ラーマヤナ」のラーマ王子は、ガンジス河みそぎ神話を奉ずる北インド・アヨーディア王国の王子です。王子はヒンズー教の主神ヴィシュヌ神の生れかはりです。王子と生れて苦難の遍歴を経て後、大地から生れ出た隣国の王女シーターと結婚する。「シーター」は「田のあぜ」の意味ださうで、「奇稲田姫」を連想する。この王妃を大魔王がさらつてスリランカに幽閉する。ラーマ王子は猿王をしたがへて、この大魔王と戦ひ、遂にこれを倒して王妃を救ひ出す。そしてラーマ王子は、アヨーディア国の王位に就くが、シーター王妃は大地を割つて身を隠してしまふ。日本の神話・伝説で言へば、スサノヲノミコトの大蛇退治とヤマトタケルノミコトの遠征物語などを合はせたやうな物語と言へようか。大長篇叙事詩です。この物語をインド人は誰でも愛読してゐるといふ。

先ほど私を紹介してくださつた司会者が、私の歌——「旅遠く　ルンビニの野に　行き暮れて　橋の袂に　螢とぶ見き」(編註・昭和六十一年「歌会始」預選)を紹介してくださつた。ルンビニはシャカ(釈迦)・ムニ(牟尼)(シャカ族の聖者)、お釈迦さまの生れたところだ。ネパールの砂漠の中のオアシスといったところです。ネパールで劇を見せてくれるといふので行きましたら、ラーマヤナの劇でした。ネパールはヒンズー教の国ですから、ラーマヤナ劇が行はれてゐるのでせう。インド各地で行はれてゐることはいふまでもありません。

ラーマー寺院も各地にあり、盛大なお祭が行はれるさうです。

古代インドの英雄伝説叙事詩「ラーマヤナ」は現代インドに生きてゐるのです。

中国の「史記」(紀伝体)と「古事記」

さて、インドは「歴史」が無いと言はれてゐるので、「神話・伝説」がいまもインド国民の紐帯となつたと言へます。では「歴史」の早くから発達した中国はどうでせうか。

中国は文字を早く発明し、甲骨文字による記録を残してゐるほどですから、「歴史」を早く書いてゐます。

孔子の「春秋」は紀元前四八〇年頃の成立といはれ、春秋時代の山東省の魯の国の年代記です。「魯の隠公元年(前七二二)から哀公十四年(前四八一)に至る事蹟を記す」(『広辞苑』)とあります。これは、魯の王国の年代記で、統一中国の歴史とは言へません。統一中国の歴史は司馬遷(前一四五〜前八六頃)の「史記」です。

南北統一の大帝国の秦をついだのが漢帝国(前漢)です。司馬遷は漢帝国の太史令となり帝国の歴史を記録したのですが、さらにさかのぼつて、中華大帝国の建国の由来を書きまし

た。『史記』とは「史」（記録係）の「記」の意味でせう。

これが、南北統一、中国の「建国」の「歴史」であります。中国では「史記」をついで王朝交代興亡の歴史を書きつぎます。二十四史といはれます。『史記』はまた韓国の建国史『三國史記』の模範となりました（『日本書紀』は『漢書』に倣つたと言はれます）。

『史記』は「紀伝体」の史書です。「紀」は皇帝の年紀です。「伝」は「列伝」で、王妃はじめ臣僚の伝記です。この中に外国の歴史も入れてみます。それに「志」（天文・地理・経済・礼楽・政刑などの事項を記す）と「表」を加へた、雄大な歴史書です。

内容は「五帝本紀」（黄帝・顓頊・帝嚳・堯・舜）にはじまり、「夏・殷・周・春秋・戦国・秦・漢」とつづきます。王朝交代・易姓革命の国の王朝興亡交代の歴史を書いたのです。

司馬遷は、『史記』を「五帝本紀」から始めてみます。「五帝」は「古代中国の伝説上の五聖君」（『広辞苑』）と言はれますから、「伝説」とみてよいでせう。しかし、それはごく簡単なものです。そして「神話」は「抹殺」しました。

中国文学の権威・故吉川幸次郎博士は、次のやうに言はれました。「中国にも神話は存在したにちがいないが、そのおおむねは前一世紀の司馬遷により、歴史事実ではないとして抹殺された。日本は西洋と同じく神話をもち伝える。」（『文明の三極』）と。

いまの日本は、司馬遷にならつて、「神話」を抹殺しようとしてゐます。しかし、『史記』にならつて、日本の建国史を書いた。『古事記』『日本書紀』の著者たちは、「神話」を「抹殺」することなく「もり伝え」たのです。

『古事記』（七二二年）の上巻が神話であるのは、偉大な業績であります。そのあとすぐ出来た編年体歴史の『日本書紀』（七二〇年）が第一巻第二巻を神代巻としたのは、『古事記』にならつたのですが、これも偉大な見識と言はねばなりません。中国の史書に学びながら中国とは異なる独自の歴史意識を表現したのです。

ギリシャの神話と伝説と歴史の誕生

私がこの「神話」「伝説」「歴史」の「三部構成」といふことに気がついたのは、主として、村川堅太郎博士がギリシャの歴史文化を解説した「歴史叙述の誕生」といふ論文によつてでした。

これは、ギリシャの歴史叙述は、ヘロドトスの『ヒストリア』（『歴史』）にはじまり、ツキジデスの『戦記』（編年体の歴史）へと続くことを論じたものです。

ヘロドトスの「歴史」は西洋文明における「歴史」の始まり（誕生）と言はれますが、これはホーマーの『イリアッド』『オデッセイ』——英雄伝説——を継ぐもので、「伝説」などもとり入れた「歴史物語」であり、それを継いだと見られるツキジデスの『戦記』は編年体の歴史だと言はれるのです。

ホーマーの『イリアッド』『オデッセイ』は、皆さんもご存じのやうに、『イリアッド』は、トロイとギリシャ本土との戦ひの叙事詩です。例の、木馬戦術などで有名です。『オデッセイ』は、英語ではユリシーズと言ふギリシャ本土の武将の名ですが、トロイ攻略を経て郷土イタイケに帰るまでの遍歴を物語つた叙事詩です。

帰国の途中で、島の乙女の歌声にさそはれて島に立寄つたところ、そこは一種の魔女たちの島で、部下たちとともに幽閉される話とか、帰国して、己れがユリシーズであることを証明するために、剛弓をひく話とか、——ホーマーの英雄伝説は、日本の青少年にまで親しまれてゐると思ひます。

これは、神々と人との共存の世界を書いた英雄伝説叙事詩です。

トロイ戦争の発端は、次のやうに言はれてゐます。

ギリシャの大神ゼウスのお妃は、ヘラといふ女神です。その女神と、アテネ女神、トロイ

側の女神アポロデイトーティー（ローマになるとヴィーナス女神）の三人の女神が、その美を争ふのです。そしてそれをトロイの王子パリスに決めさせる。ヘラ女神は世界統治の権力を、アテネ女神はあらゆる戦の勝利を、アポロデイトーティーは世界一の美女を約束する。パリスは美女をえらぶ。そこでアポロデイトーティーが最も美しい女神であるといふことになる。そしてギリシヤ第一の美女と謳はれてゐた、スパルタ王メネラーオスの妃ヘレネーをトロイのパリス王子に与へてしまふ。それを奪ひ返すためギリシヤ本土をあげてトロイ攻撃に向ふことになる。

神と人との共存の世界です。

ホーマーの叙事詩は、紀元前十二世紀頃のトロイ戦争を、紀元前八世紀頃のホーマーが詠じたと言はれます。

つぎのヘロドトス（前四八四頃～前四二五）の『ヒストリア』は、ギリシヤとペルシヤとの戦争（前四九〇～前四八〇）の歴史です。この戦争の原因について、ヘロドトスはもう神々のはたらきは述べません。ギリシヤ人とペルシヤ人の交流といふか関係の歴史の事実を述べてゐる。以下、戦争の事実を述べる。これが、「歴史叙述の誕生」といはれる理由です。しかし中でいろいろと各地の伝説にふれてゐるので、村川博士は「歴史物語」として、次のツキ

ジデスの編年体の歴史叙述と区別しました。ツキジデス（前四六〇頃～前四〇〇頃）の『戦記』は、ペルシャ戦争のあとのアテネとスパルタとの戦争——ペロポネソス戦争（前四三二～前四〇四）の編年体の記述です。

そこでギリシャの「歴史叙述の誕生」は次のやうにまとめられます。

「神話・英雄伝説叙事詩・歴史物語・編年体史」と。

右のギリシャの文明の古典の開展を、日本の建国物語に対応させると次のやうになります。

『古事記』上巻「神話」、中巻「英雄伝説」、下巻「歴史物語」、そして、編年体の『日本書紀』がこれに続く。

「歴史の誕生」と「俳句の誕生」を比較して

「神話」と「伝説」と「歴史物語」と「編年体歴史」といふ歴史文化の展開を説明するのに、どういふ例をあげたらいいか、いろいろ考へました。「俳句」を例にあげてみます。

「俳句」は皆さんご存じのやうに、一口で言へば、芭蕉が確立した文学形式・詩型といふ

ことができませう。「古池に蛙とびこむ水の音」です。

しかし、芭蕉は何にも無いところからこれを作り出したものではありません。「俳諧」の「発句」を独立させたのです。「俳諧」はその前にあつた「連歌」を、いはば世俗化することで成立しました。

「連歌」のもとをたどると、『古事記』の中に出てくるヤマトタケルノミコトのみ火たきの翁との問答になる、と言はれます。これは合宿二日目の國武忠彦先生の『古事記』についての講義でもお聞きになつたはずです。

ヤマトタケルノミコト「新治 筑波をすぎて 幾夜かねつる」

み火たきの翁「日々なべて 夜には九夜 日には十日を」

この筑波問答が「連歌」「俳諧」のもとだといふのです。それで、「連歌集」を「筑波集」といひ、「俳諧集」を「犬筑波」と言つたりしました。

「俳句」を歴史事実を重視する「編年体史」とすると、「俳諧」は「歴史物語」、「連歌」は「伝説」、「筑波問答」は「神話」となります。

この時、「俳句」には季語があるのに、「筑波問答」には季語が無いからこれは「俳句」の源流とみとめられない、「俳句」から見るとこの問答には詩的価値が無い、などと言つたら

笑はれるでせう。

「神話」「伝説」が「歴史的（極端に言へば編年体的）事実」ではない、と言つて、これを無視するのは、筑波問答が「俳句」ではないと言つてこれを無視するやうなものでせう（あまりいい比喩ではなかつたかも知れません）。

『古事記』は神話時代の歴史

小林秀雄先生は「『古事記』は神話時代の歴史だつたのである」と言はれたさうです。うまいことを言はれたと思ひます。（註・附説（二））

「神話時代の歴史」といふのは次のやうなことを言ふのではないでせうか。

「歴史叙述の誕生」といふ言葉があります。「歴史」のはじまりは西洋では「ヒストリア」であり東洋では「史記」といはれます。

では、その「歴史」の出る前の人々は、自分たちの民族とか国家の成り立ちについて、何も考へなかつたのでせうか。そんなことはありません。司馬遷の『史記』は父の遺志を継いだと言はれますし、ヘロドトスはホーマーの叙事詩の愛読者であつたにちがひありません。

「歴史」の生れる前の人々も、何百何千年にわたつて自分たちの国の成り立ちについて考へつづけて来たのです。建国の神話がまづこの天地の成り立ちから説きはじめ、次に人間の誕生、万物の出生、言葉の発生などにつづけ、民族・国家の誕生を説かうとするのは、自分たちの生きてきた由来を思ふからです。これが「神話」です。文字を使ふ前の人々ですから語り伝へるほかないのです。そして、民族の祖先の国作りの努力——多くの戦いと王位の継承をめぐる争ひなどが語りつがれるのです。これが「伝説」です。「伝説」は「伝説時代の歴史」といふこともできませう。

これを上中下三巻に連続したのが『古事記』で、「神話」を抹殺したのが『史記』です。別々の書物にしたのがギリシヤの古典です。ユダヤの建国物語は、『旧約聖書』です。「神話」「伝説」「歴史」の区別をせずに連続して書いてゐます。ペルシヤ（イラン）の『王書』は『古事記』と同じやうな三部構成です。それぞれの国の「建国」の「歴史」の書き方があつて、今からそれを一つにすることはできません。

だから国々はみなそれぞれ自分の国の国史から出発してこれを継承するのです。

国史の『古事記』の「神話」「伝説」を「歴史的事実」ではないと言つてこれを無視する人たちは、何を歴史的事実といふのですか。——縄文の土器・土偶とか弥生式土器とか古墳

とか、勾玉とか銅鏡とか銅鐸とか、銅剣とか鉄剣とか、さういふ遺物とか遺跡とか、さういふ目に見える物だけが「歴史的事実」といふのですか。さういふ物を作り出し使つて生きた人々の心の物語り「神話」「伝説」のコトバ、これこそまちがひない「歴史的事実」ではありませんか。

西暦一九九九年の現代のわれわれよりも、千三百年もはるか前の、建国に最も近かつた西暦七〇〇年前後のわれわれの祖先の人々の、建国の由来について考へたこと、そのコトバが、何故、「歴史的事実」ではないのですか。七二二年成立の『古事記』の存在そのものこそすばらしい「歴史的事実」ではありませんか。

『古事記』（ふることぶみ）のいのち

さて本日このお話をするに当つて、どうして私が『古事記』（ふることぶみ）に夢中になつてゐるのか、そのわけを聞きたい、といふお話がありました。それにお答へしなければならぬのです。

一口で言へば、『古事記』のコトバに感動するから、と言へます。『古事記』を作つた人々

のコトバに感動するのです。

今日われわれの読んでゐる『古事記』は、元明天皇の仰せを受けて太安万侶といふ大臣級の人物が書いたものです。それは、天智天皇の弟君の天武天皇が、それまでの伝へを整理して、側近にお仕へした舎人の稗田阿礼に誦ませられたものを、太安万侶が書き直した（漢字漢文の国語訓み）、と序文に書かれてゐます。ですから、『古事記』は、天武天皇がお書きになつた書物とも云へませう。誦み方は稗田阿礼に伝へられてゐたのです。いまその声調を私には再現することはできません。しかし、同じ日本語ですから、ある程度、文の終止などはわかりますので、作つた人の語調とでもいふところを思ひながら、感じをこめて読むことはできます。感じを出して読んでみますから、お聞きください。この合宿の二日目でもお読みになつたヤマトタケルノミコト走水渡海・オトタチバナヒメ御入水の箇所です。

ちよつとおことわりしますが、私は、『古事記』の訓みは本居宣長の訓みにしたがふのがよいと考へてゐます（今日は國武忠彦さんの講義レジメによります）。

「そこより入り幸でまして、走水の海を渡ります時に、その渡の神、浪を興てて、み船を廻して、え進み渡りまさざりき。ここにその後、名は弟橘比売の命の白したまはく、『妾、御子

に易りて海の中に入らむ。御子は遣さえし政、遂げて、覆奏まをしたまはね」とまをして、海に入らむとする時に菅置八重、皮置八重、絶置八重を波の上に敷きて、その上に下りまじき。ここにその暴き浪おのづから伏ぎて、御船え進みき。ここにその後の歌よみしたまひしく、

さねさし 相模の小野に

燃ゆる火の 火中に立ちて

問ひし君はも

かれ七日の後に、その後の御櫛海辺に依りき。すなはちその櫛を取りて、御陵を作りて治め置きき。」

一文一句みなシンプルでしかも深い意味をもつ、すばらしい文章ではありませんか。なかでもオトタチバナヒメの最期のお言葉——「妾、御子に易りて海の中に入らむ。御子は遣さえし政、遂げて、覆奏まをしたまはね」といふお言葉のすばらしさ！愛する人のために海神の心をなごませようと身をささげる、そこに何の悔いも感じられないお言葉。それは皇子の御使命達成のためでもあるのです。天皇の御命令による東国平定の重大任務を達成して朝

廷への御返事（御復命）を申し上げなさいませ、といふ、国の運命のかかつたこの一瞬の危機に、何のためらひもなく身をささげなさつて、皇子のお命をお救ひになつたのです。何といふ崇高なおコトバでせう。「海に入らむとするときに、菅すが畳やへ八重、皮かは畳八重、絶きぬ畳八重を波の上に敷きて、その上に下りまじき」とあります。これを読んで、菅畳八重とか、皮畳八重とか、絶畳八重とか、遠征中にそんな敷物を持つて行つたはずはない、これは歴史的事実ではない！といふ人があつたとしたら、その人はこの文章の意味の全くわからない人です。この文章を書いた人、作つた人は、オトタチバナヒメのこの崇高な御行為を物語る上で、せめてかうでもして差上げたいと願つて、かう物語つたのにちがひありません。（註・附説（二三））

そしてお別れのコトバはミコトへの深い深い愛の思ひ出です。ミコトへの感謝のお歌を最期のお別れのうたとなさつたのです。

さねさし 相模の小野に

燃ゆる火の 火中に立ちて

問ひし君はも

何ともうつくしいお歌ではないでせうか。

この物語りを物語つた人は、天武天皇、稗田阿礼、太安万侶の人たちであることはまちが

ひありません。さうしますと、今から千三百年くらゐ前といふことになりませう。

人生の上で、千三百年などといふ年数は、とても思ひ及ぶ年数ではありません。

しかし、その大昔の人の物語つた言葉を、千三百年後の、私なり皆さんが読んで、例へばオトタチバナヒメのお歌を、そのままに読んで、そのお心を感じることがあつたとしたら、それは千三百年変らないお心を感じたことになるのでせう。

『古事記』の「いのち」はわれわれの心に生きるのです。

『古事記』のコトバの「いのち」は生きてゐるのです。

それが『古事記』の「いのち」です。私はさう信じてゐます。

皆さん、どうか、『古事記』を読んでください。——これで終ります。

(註・附説 (一))

『古事記』が、神話・伝説・歴史といふ三部構成の形になつてゐることは、もつと広く一般に知つてもらひたいと思ひます。これは、『古事記』を見れば、誰にでもわかることです。

『古事記』は三巻に分れてゐます。いまは冊子本の形ですが、出来た当時は、巻物であつたと思はれます。上巻が「神話」(神々の物語)、中巻が「伝説」(神と人と共存の世界の物語——英雄伝説叙事詩)、

下巻が「歴史物語」（人中心の世界）となつてゐます。

「神話」は、イザナギ・イザナミ両神の国生み神生み万物出生の物語、天照大神とスサノヲノミコトの物語（天照大神の天の岩戸隠れの物語とかスサノヲノミコトの八股大蛇退治の物語など）、出雲の大国主命の国作り物語（因幡の白兔の物語など）、天孫降臨、筑紫神話などです。中巻はカムヤマトイハレヒコ神武天皇の筑紫から大和への征旅・定着から崇神天皇の四道（將軍派遣）平定、ヤマトタケルノミコトの東西遠征、仲哀天皇の崩御・神功皇后の三韓遠征、応神天皇の御代までです。神武天皇、崇神天皇、応神天皇、神功皇后などみなのお名前ですが、「神」といふ字が用ひられてゐます。神人共存の世界の物語なのです。下巻は、仁徳天皇から武烈天皇まで、一旦、仁徳天皇の皇統が絶え、応神天皇の五世のご子孫の継体天皇を越の国からお迎へする——ここまで物語があつて、あとは天皇の御系譜を記して、推古天皇まで（聖徳太子の御事業は「古事記」には書かれてゐない。「日本書紀」の主要記事です）。「古事記」下巻は、仁徳天皇からはじまり、雄略天皇がた——いはゆる「倭の五王」として中国の史書にも記されてゐる——の皇位をめぐる争ひと恋愛の物語である。これは、ギリシャのヘロドトスのヒストリア「歴史」になぞらへて「歴史物語」とするのが適當でせう。これに対して「編年体」の歴史が「日本書紀」です。

右のやうに見て、「古事記」は上巻「神話」中巻「英雄伝説」下巻「歴史物語」と見られます。これは

誰が見てもすぐわかることです。

(註・附説 (二))

小林秀雄先生の言葉は次の通り。「神武天皇なんて嘘だというような考古学的歴史観もいけない。『古事記』は神話時代の歴史であったのである。それを嘘だというのは今の人の歴史に過ぎない。すなわち『古事記』の言っていることは、どこまで本当で、どこまで嘘だなどということの研究しても、それは一種の学問ではあるが、ここでいう「歴史」ではない。

歴史はみな信じられたものである。信じられた通りに信ずることができなければ、すなわち、昔の人が信じた通りに、自分はそれを経験する事ができなければ、歴史など読まない方がよいのである。」(出典不明)

(註・附説 (三))

この箇所の本居宣長訓「古訓古事記」は次の通り。

「妾御子あれみこに易りかはて海中うみに入りなむ。御子みこは 所遣まけの政まつりごと遂とげて覆奏かへりこたまをしたまふ応べしとまをして、海に入りまさとむとする時に、云々」

私はこの訓よみを採りたいと思ひます。

青年体験発表

大人が変はれば子供は変はる

——吉田松陰の「草奔崛起」に学ぼう——

(株)志門塾生涯学習部講師

三 林 浩 行



はじめに

現在、私は岐阜県大垣市を拠点とします志門塾といふ学習塾に勤務してをります。志門塾は小学生・中学生・高校生あはせて二八〇〇名ほどの塾生を擁する進学塾で、学習塾としましては岐阜県一の収益をあげるまでに至つてをります。社員は八〇数名でその八割までが授業を担当する講師職です。

私もその中で小・中学生には社会科（地理・歴史・公民）を、高校生には日本史を教へる講師としての仕事を中心に勤務してをります。

独自の「歴史講座」開講

さうかうしてゐる中で私としてはどうしても満足しきれない思ひが生じて来たのでした。小学生は別としまして中学生・高校生に対してはどうしても既製の教科書で教へざるを得ない。学習塾としての性格上学校の定期テストで点数をとらせるといふことはしなければな

らず、さうすると学校の教科書の記述はどうしても無視するわけにはいかない所があるので。ところが歴史の教科書の記述を読んでをりますと、元氣が出てくるところか元氣がそがれていつてしまふんですね。さういふ中でなんとか工夫しながらやつてきたわけですが、どうしてもそれだけでは満足しきれませんでした。そこで私としましてはそれとは別に自分がこれこそは人々の為になるはずだと信じてころの歴史教育の講座をつくることを考へました。そしてそのことを社長をはじめとして専務、役員会、さらには全体会議といふ全社員が集まる場所において訴へに訴へていききました。さうしてやつとのことで昨年（平成十年）の十一月に開講しましたのが社会人対象の「元氣と活力の青春歴史講座」、十二月に開講しましたのが高校生対象の「立志と飛躍の人物歴史講座」なのです。

高校生などを見てをりますと、地域でナンバーワンの進学塾の塾生たちですから、勉強はよくやつてゐるんです。しかしそれは何の為にやつてゐるかといへば、自分の為にだけといふ感じを受ける生徒が多いのです。ですからどこかひ弱さや力強さのなさを高校生たちに感じるので。たくましさを感じないので。さうした高校生の歴史の知識はと言ひますと一通りのことは知つてはゐても一人一人の人物のことをくはしく知つてゐる者が少ない。

しかしそれはかくいふ私も高校時代まではさうでした。私が目を開かされたのが、大学一



年生の時に参加したこの合宿において、山田輝彦先生がして下さった日露戦争のときの乃木希典大将の御講義でした。聴いてゐるうちに胸がジーンと熱くなつてきて、日本の国の為にどこまでも耐へていく乃木大将に対し親しみと敬ひの気持がわいてきたのですね。私は大変感動致しました。それから日本の国の為に生き、時には命を捧げた方たちのことを一人知り二人知り三人知つていく中で私の体の中に日本の国への愛情が生まれてきてゐたのです。それまでの私といふのは自分のこと以外に関心を払ふことは少なく勉強をするのも自分の為にだけ、日本の国のことなど自分には関係のないことだと思つてゐました。しかし日本の国への愛情が生まれてくると、自分も日本に尽した人の後に続かう、これらの人たちの様に自分も日本の為に何かがしたいといふ、内発的な義務の念が生まれてきました。昨今、権利だけは主張するが

義務をはたさうとしない日本人が多くなつてきてゐると言はれますが、理屈で考へて義務をはたさなければいけないと思ふのではなく、私は何かを自分の国である日本の為にしたいのだと内発的に思ふやうになつたのです。

現在子供をめぐる様々な問題がおこつてをります。学級崩壊、いじめ、ナイフによる傷害、中・高生の援助交際といふ名の売春、染髪、地べたに尻をつけてだらしく座りこむ若者等々。これらのことは私が大学時代だつた十年前と比較してもずいぶん変化したなあ、悪くなつてしまつたなあと思ふことです。実にみにくき有様です。しかしさうなつてしまつたのは子供たちのせゐばかりではないでせう。さういふ子供たちを育ててしまつたのは大人です。大人にも力強さやたくましさ欠缺するところがあり、自信のなさがあつたからこそかうなつてしまつたはずで。大人が変はれば子は変はると言はれます。大人が日本人としての自分の自信をとりもどし真に力強く、たくましくなつていくならば子供も良くなつていくはずだと私は思ひます。さう思つて社会人対象の「元氣と活力の青春歴史講座」をやつてをります。

お手元の資料は私も志門塾が毎月発行してをります「こころざし」といふ新聞からの抜粋です。その一つが一月に社会人対象に行ひました幕末の志士・吉田松陰の講座についての記事です。吉田松陰について少しお話ししたいと思ひます。

吉田松陰

江戸時代の末期、幕末ともいはれる時代に、長州藩の下級武士の子として生まれたのが吉田松陰です。吉田松陰は萩の松下村塾においてたくさんの青年を教へ導いていきます。蛤御門の変で死んだ久坂玄端や入江九一、奇兵隊を作った高杉晋作、明治まで生き残つて大臣になつた山県有朋、品川弥二郎、野村靖、藩校明倫館で教へた木戸孝允などは皆、松陰の教へ子になります。時勢が急迫し、江戸幕府の大老井伊直弼により安政の大獄が行はれ、幕府の政策に反対の意見を持つ者がどんどん捕へられていきます。松陰は井伊直弼の意を体して京都で志士の捕縛に辣腕をふるつてゐた老中間部詮勝を討たうと決心します。しかしそれはうまくいかず、さうかうしてゐるうちに幕府から長州藩に松陰を江戸に送れといふ命令が来ます。松陰は体全体を幕府にぶつけて死んでいくのです。

孤立する松陰

安政の大獄の嵐の中、松陰の言動は間部老中の暗殺を言ひ出すなど過激になつていきます。高杉晋作や久坂玄瑞など多くの教へ子たちがそれについていけなくなり、今は時期が悪いと言ひ出しまして、松陰は孤立していきます。松陰はさういふ弟子たちに思ひを伝へていきます。「諸君は今は時期が悪い、時期が来るのを待つべきだといふが、私は時期を待つて事を興すことを自分の役割とは考へてゐない。事を興して時期をつくり出すことが自分の役割だと思つてゐる。——諸君は功業をなすつもり、私は忠義をなすつもり——」。(注・松陰は考へてゐました。今の日本は乱も起らないのに亡国に至らうとしてゐる。大乱を起せば、そこに打つ手が出てくると)。

松陰は孤立感に苦しみながらも学問と思索をつづけていき、終に「草莽崛起」といふ考へにいき着いて力を盛り返していくのです。

草莽崛起

松陰は考へました。自分は一生のまちがひをしてゐた。それは藩をあてにしたことだ。組織をあてにして組織を動かすことによつて日本をよくしようとしてきた。しかしそれは大変なまちがひであつた。

「草莽崛起」の「草莽」とは草のかけにかくれてゐるやうな地位も金もない人間なのだが、日本の国をなんとかよくしていきたい、救つていきたいといふ志だけはある人間のことで、「崛起」とは本気で覚悟して立ち上がることです。「草莽崛起」とは、地位はないが強い志だけは確固として持つてゐる人間が、本気で立ち上がるといふことです。

松陰は心を決めました。これからは藩をあてにはしない、幕府もあてにはしない、組織を動かすのではなく、草莽崛起の人間がいろんな場所で立ち上つていくことによつて救国はなる。自分はたつた一人であつても草莽崛起をやるぞ。

奮起していく松陰の教へ子たち

塾生たちに教へたとほりに生き、教へたとほりに死んでいった松陰の姿を眼の前に見たことによつて自重してゐた塾生たちに火がついていきます。久坂玄瑞は各藩の有志に草莽崛起を訴へていきます。本心に志ある者が立ち上つていくしかない。それによつて藩がつぶれてしまつたとしてもだ。日本のために立ち上つてそれで藩がつぶれてしまつたとしてもそれは仕方のないことだ。さらには長州藩の世論を自分の持論である尊王攘夷にしていきます。

草莽崛起の精神で立ち上つた各藩出身の浪士・志士たちが長州藩に集まつてきて長州藩が元氣とエネルギーの結集する場所になつていきます。高杉晋作は奇兵隊を結成致します。身分は問はない、農民でも商人でも職人でも郷土を救ひたいといふ志がある者は集まれと呼びかけました。草莽崛起の理念は奇兵隊結成に生かされたと私は思ひます。この奇兵隊が藩の武士だけからなる正規兵と互格の実力を持ち、対幕府の戦争においても大変な働きをしました。

終りに

私はこのやうな話を講座でしてをります。さきほども少し話しましたが、現在日本ではあらゆる問題が噴出してをり、このままでは亡国の憂き目を見ることになることになるとさへ言はれてをります。私達も地位はないかもしれませんし、お金も組織もないかもしれませんが、それだからと言つて何もできないんだと言つてゐていいでせうか。私達も吉田松陰に学ばうとするのなら、たとへ一人であつても松陰にならつて草奔崛起しようではありませんか。そしてその経験を語り合つていきませう。書きつけても参りませう。やつていかうではありませんか。御静聴有難う御座いました。

青年体験発表

会社生活三年間を
振り返りつつ思ふこと

アサヒ飲料(株)マーケティング部

澤部 和道



三年間の営業体験を振り返つて思ふこと

私はアサヒ飲料といふ清涼飲料水を製造・販売してゐる会社に勤めてをりますが、今日は私が入社してから三年間営業をしてゐた時の体験と今振り返つて思ふことをお話させていただきます。

営業と一言で言つてもわかりにくいかと思ひますので、具体的にその内容を簡単に申し上げますと、毎日三トンのトラックに乗つて、お得意先を訪問しながら、自動販売機に商品の補充をしたり、担当してゐる回訪エリアの中で自動販売機を置いて売れさうな場所を見つけては飛び込んで自動販売機の設置をお願いしたりする仕事です。

私は入社一年目は今から考へてみると非常に勉強不足で自社商品の知識もなく、自分の会社のこともよくわかつてゐませんでした。その為、当時は新製品を紹介し売り込むときにお店の人に自信を持つて話をするのができませんでした。入社してしばらくはこのやうな状況が続き、二年目あたりから売り上げの方が芳しくなくなつてきました。

一体何が自分には足りないのだらうか、悪いところはどこなのだらうかと自分に問ひかけ

たところ、どうやら自分の営業が全体的に控へ目なやうだといふことに気付きました。それまでお店に入つて挨拶をする時は元気に挨拶はするものの商品を説明する段階になると自分の会社の商品に今一つ自信がもてず、元気良く話をする事ができませんでした。ここが自分の営業の弱い要因であることに改めて気づきました。

それ以来、自分の会社の良いところ、アサヒ飲料の社員として誇りを持つて自分の会社の商品をアピールするといふことを考へながら根気強く商品を売り込んでいくといふ事を続けて参りました。

清涼飲料会社といふことで自動販売機を置いてもらふことが仕事として大きなウエイトを占めてゐるのですが、清涼飲料水といふのはお酒等のアルコール類と違つて特別な販売免許が必要でないため、言つて見ればどんなお店でもまた、お店でなくても自動販売機を設置することは可能です。つまり飲料業界の市場といふのはまだまだ無限の可能性を秘めてゐる市場なのです。

ですから、私はクリーニング屋さんから一般家庭のお宅までところ構はず飛び込んでいつては自動販売機を置いてもらへないかといふ話を日がな一日続けてをりました。入社一年目の時はうまく行かず、「こんにちは！」と勢ひ良く飛び込んで見たもののお店に入つて一



言も話ができないまま帰つて来たこともありましたが。当然緊張も多分にあつたのですが、このことについてもやはり自分の会社の商品に自信を持つことができなかつたことが原因だつたのだと思ひます。

それからは、私は自分の会社の商品を良く知らなければと思ひ立ち、兎に角、毎日自分の会社の商品をたくさん飲み続けました。

かうしたことを続けていくと、おいしさを実感することで自分の会社の商品がよくわかり、自社製品のおいしいところやアピールポイントがわかつてきました。それからはお店の人に自信を持つて自社製品をアピールできるやうになりました。それから営業成績が良くなつたといふとさういふわけにもいかなかつたのですが、ある日お店の人から言はれたことがあります。それは「最近の営業の人は自信を持つて商品をアピールすることがない

ね。もつと強く勧めたり、自分のところの商品に自信を持つてゐないから後一押しが無い。君も前は同じ風だったが、最近は凶々しいくらゐに商品売り込んでくる。しかし、それくらゐの勢ひがあつていいんじゃないか」といふやうな内容のことでした。私はその言葉を聞いてとても嬉しく感じました。私がここで感じたことは私はアサヒ飲料の社員であるからにはアサヒ飲料といふ自分の会社に自信と誇りを持ってないといふことは情けないといふことでした。

学生寮（東京正大寮）で学んだこと

実は私は大学三年生の時にこの合宿教室に初めて参加しました。その時の講義の内容は初めて合宿に参加した私にとつてとても難しくほとんど良く覚えてゐませんが、「日本人として大事にしていかなければならないこととは何だらうか、自分がこれからどう生きていくかを考へなければならぬ」といふことを感想として書いたことを覚えてゐます。

合宿ではそれまで経験したことのない充実した班員との付き合ひがありました。合宿が終れば皆それぞれまたもとの大学生活にもどつていく訳ですが、合宿を終へた後もここで出

会つた人と付き合ひを深めていきたいと思ひました。

先程、三林浩行先輩のお話にもありましたやうに、東京の中野区には「正大寮^{せいだいりょう}」といふ学生寮があります。この正大寮といふのはこの合宿で出合つた仲間達と寢食を共にし、学間に励む学生寮なのですが、私は折角合宿で感じたことを失つてしまひたくないと思ひ合宿から戻つてすぐ正大寮に入りました。

寮に入つてしばらく何もしない内にあつと言ふ間に時間が過ぎてしまひましたが、寮で輪読を始めることにしました。輪読といふのは皆さんも昨日行つてゐるのもうおわかりかと思ひますが、数人が輪になつて一つの本をみんなで読み味はふといふものです。が時には一頁読むのに二時間も三時間もかけて読むこともあります。私も最初は輪読といふものがよくわからず、先輩に教へられながら読んでをりましたが、ある日先輩が「今度輪読で何か読みたい本はないか」と聞かれました。私は「輪読で読みたいといふ本はありませんが最近、吉田松陰といふ人物の歴史小説をよみ吉田松陰といふ人物に興味をもつてゐる」と答へました。その時にその先輩に教はつたのが『講孟余話』といふ本です。歴史上の人物を本當に知りたいたのであればその人物が書いた「原文」を直接に読むのが一番だといふことで、それから吉田松陰の著述である『講孟余話』の輪読を始めました。

この『講孟余話』といふのは江戸時代末期に吉田松陰が牢獄で記した本です。当時、鎖国政策がとられてゐた中、日本が欧米列強の脅威にさらされてゐることを知り日本の国を憂へてゐたところ、ペリーの来航の一報が入り、「まづ敵（欧米列強がどのやうな国であるのか）を知らなければならぬ」と考へ、国への切実な思ひから海外渡航を試みます。ところがこの計画がうまくいかず、吉田松陰は牢獄へ入れられてしまひます。

当時この牢獄には犯罪を犯した者だけではなく、家族の中で手に負へないやうな厄介者も入つてゐました。いはば人生に対し生きる氣力を失ひかけた人々が收容されてゐるこの牢獄の中で、吉田松陰がその囚人達に対して行つた『孟子』の講義内容を記したのが『講孟余話』です。この『講孟余話』を読みますと、吉田松陰が囚人達に「日本が今とても危機的な状況にあり、日本人一人一人が日本を守つていくんだといふ氣概をもつことが大切なんだ」といふことを切々と訴へ続ける姿が浮かび上つてくるやうな言葉が多くありますが、中でも私は

「至誠にして動かざる者未だ之れ有らざるなり」

といふ言葉がとても好きなのですが、この言葉の意味は誠を尽くす、つまり真心をもつて相手に接すればその真心といふものは必ず相手に伝はるんだといふ吉田松陰の真摯な真剣な姿

勢が感じられる言葉なのです。

普段の生活の中で思ひ悩んだり、壁にぶつかつたりすることが多々有りますが、そんな時にはこの言葉を思ひ出し「吉田松陰の真摯な生き方に少しでも近づきたい、今やれる限りのことを精一杯やつていかう」と元気づけられます。

先人の生き方に学ぶこと

私はかうした人生の指針となるやうな歴史上の人物に『講孟余話』といふ本を通して出会ふことができましたが、私がここで考へるのは小学校・中学校・高校と今まで社会科や日本史といった教科書の中で日本の歴史を勉強してきたものの、何か歴史上の人物に活き活きとした姿が感じられなかつた、日本の歴史上の人物の名前は知つてゐるものの本当にその人物の生き方に迫ることができずにゐたが、果してこれで良いのだらうかといふことです。日本の歴史は吉田松陰をはじめとして素晴らしい生き方をされてきた先人の方々によつて築かれてきたにも関はず、さうした先人の生き方を学ぶことをしないとといふのは日本人として恥づかしく思ふと同時に勿体ないことだと思ひます。

この合宿で先生方から「国柄」といふことについてお話をしていただきました。「国柄」といふものについて私自身なかなかつかみにくいものではありませんが、先人の姿・生き方に学び思ひをよせていくことが実は「国柄」を知るといふことに繋がるのではないかと思ひます。

日本といふ国、自分の生まれた国の素晴らしさを知り、日本人として誇りをもつて生きていくことはとても大切なことだと思ひます。私がアサヒ飲料の社員として、当り前のやうに自分の会社や自分の会社の商品に自信と誇りをもつてアピールするのと同じやうに、日本人として当り前のやうに日本の国柄に誇りをもつて生きていきたい。これからも引き続き日本の歴史・伝統に学んでいきたいと思ひます。

短歌入門

短歌創作導入講義

——和歌創作を通じて広がる

共感の世界——

久留米大学附設高等学校教諭

名和長泰



短歌との出会ひ

クラス担任としての工夫

『短歌のすすめ』に学ぶ

歌会始のエピソード

「短歌との出会い」

私は昭和五十六年に初めてこの合宿教室に社会人として参加しました。はじめての経験でしたが、「短歌相互批評」の中で他の人の和歌を読み合ひながらお互ひに人の心が通じ合ふ世界があることを体験的に学ばせて頂きました。

その折、私の班の班長であつた松吉基順先生から後日、頂戴したお手紙に和歌が添へられてありました。

都つくしさかりてあれどもろともに正道まことみち学びすぐく生きなむ

先生は東京にお住ひで、「つくし」は九州、「さかりてあれど」は離れて住んでゐるけれどもといふことで、一緒に「正道」正しい道を学び真つ直ぐに生きませう、といふお歌を頂いて非常に励ましを受けました。

私はその後、佐賀の焼き物で有名な有田といふ町の工業高校に赴任いたしました。赴任の挨拶状に対して、沢山のお返事を頂きました。加藤善之先生からいただいたご返事には、次のお歌が添へられてありました。

くぐもれる御国の姿うるはしくつたへたまへよ教への庭に

日本の本当の姿といふのは中々見えてこないのだけでも、その日本の姿をうるはしく若い人たちに伝えて欲しいといふ意味ですが、このやうに沢山の歌を頂く機会がありました。また国文研の会員で商社にお勤めの澤部壽孫さん（在インドネシア）が発行されてゐる短歌通信である「澤部通信」を拝見しますと、一首一首の短歌にこもつてゐる人の思ひが読む者に本当によく伝はつて参ります。さういふ歌を励みに少しづつ歌を作つてをります。

クラス担任としての工夫

ある年の暮れのことですが、たまたま職員室にゐた男子生徒に一冊のノートを同級生に届



けて欲しいと頼みました。すると彼は同級生の顔と名前が一致せず、届けきれないと答へました。二年近く同じ学年なのに、生徒同士のつながりがかくも稀薄なものと愕然としたことがあります。

修学旅行では六人位の班に分れて行動します。班が違へばほとんど分かりません。それをクラス全体で共有しようという工夫をしました。つまり、一日の行程が終わった時に全員が一首づつ短歌を作り、夜のうちに集め、一枚の紙に清書、五十枚コピーし、翌朝生徒たちに配るわけです。次に揚げたのはその時、生徒が詠んだ歌です。(引用は原文のまま。実名)。

修学旅行 創作和歌集 第一日目(抄)

流れゆく景色に心まかせては気付くと故郷は彼方の地

中村 信

新幹線あつという間に大阪へガイド美人で旅館につく

林 修平

歌歌いのどをからすが気分上々車に酔わず旅館につく

深川 泰輔

緑濃く信貴しぎの山々映えわたる赤き夕日の美しきかな

古川 一成

信貴の山映ゆる深緑せみしぐれわが故郷をおもいおこせし

富永 和文

御船山みふねやまに雲のかかりて雨の中出発したりわれらのバスは

名和 長泰

〔第二日目〕以下略

かうやつて歌を作り、五十人分をそろへますとお互ひ何に心をとどめ何を歌つてゐるかが分かります。共感が芽生えました。最初はやや抵抗のあつた生徒達でしたが段々楽しみにして盛り上がりました。かうして実名で出ますと正直に詠まざるを得ない。ふざけたやうな歌は少なかつた。そして言葉はいつまでも残ります。大事に保存してゐる生徒もをります。自分と他人の間の共感もありますが、意外にいまの自分と過去の自分との出会ひもあるのです。例へば富永君の歌ですが、言葉も間違つてゐますが、故郷を思ひ出したといふことは分かる。「信貴の山映ゆる深緑」で、何かに映えてゐるが、よく分らない。せみしぐれを聞いて故郷を思ひ出したことは分かる。もう少し慣れてくるといいのですが、かういふことかな

と思つて直してみました。

信貴の山のせみしぐれふるこの道はわが故郷に似ればうれしき

遠く故郷を離れてきた山の中で聞くせみしぐれが故郷とそつくりで嬉しかつた、さういふ歌にあらたまつていけばいいと思ひます。

『短歌のすすめ』に学ぶ

では、合宿参加者の必携書となつてゐる国文研叢書『短歌のすすめ』を一緒に読んでみませう。(昭和四十六年当時、現代仮名づかひで書かれたものですが、ここでは歴史的かなづかひに直してあります。また特に強調したい注意点はゴチツク体にしました)。

「さて、歌をつくるには歌といふものは一体どういふものかあらかじめ知つてゐなければならぬのですけれども、それは歌を作る人めいめいの心の中にあることです。歌をつくる人はめいめい自分の心の中に、これが歌だといふ考へを持つてゐて、それにならつて歌をつく

るのです。それは漠然とした考へですが、いろいろな歌を読んである内に何か共通した性質といふやうなものをめいめい心に作りあげてみてそれにならふのです」(三十五―六頁)。

「歌をつくる人は誰でもひとの歌を読んでではじめて歌といふものを知り、それにならつて歌をつくつてみて、さらに深く歌を知り、その経験によつてまたひとの歌をさらに知るやうになり、——このやうにしてだんだん深く正しく歌を知るやうになるものです」(三十六頁)

「ともかく、私たちは、自分の心の中にある歌にならつて歌を詠むのです。さうすると、人はすぐ、それは模倣で創造ではない、個性が無いと言ひますが、かうする以外に、歌のつくり方がありませうか。勝手気儘に言葉を並べて、それが歌だと言つても、通用しません。歌もまた『学ぶ』ものであるはずです。マナブとはマネブとも同じで、真似をすることです。模倣です。ただうはべだけの模倣ではいけないので、ことばづかひを通して心のととのへ方を学ぶので、——つまり自然に真似をしてゐるやうにすべきで、形だけ心にもない真似をしてはいけないのです。もし、心にもない真似だと思つたら、さうでないやうに改めるのがよいのです」(三十七頁)

短歌には「一首一文」といふ形式上の原則があります。「歌を作る人は誰でも自分の心の中にある理想の歌にならつて歌をつくりまゝ。つまり自分の心を歌といふ形にととのへまゝ。

五七五七七といふ音数律で一息によみ上げerのです。三十一音一息ですから、一文が原則となります。一文といふのはワン・センテンスの意味です。これを『一首一文』と言ひます（三十八頁）。

短歌では一首が一つの文です。文章の（。）が歌の最後にくる。倒置法とかあるにしても一つの文章であるといふ大事の原則があります。

例へば次の歌が一首一文の例です。

ひしがし
東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ

柿本 人麿

東方の空に暁の光が射しそめるのが見えたので、ふと振り返つてみたら夜中照してゐた月は西の空に傾いてゐたといふ意味の歌です。一首二文、一首三文の例もないことはないのですが、まづ一首一文の形で詠み始めてゆくのがよいと思ひます。

「なほ、第三句（いはゆる上の句）で切れ、一首二文になつたもの（五七五・七七。）を『腰折れ』といふのです。人間でいへば、上半身と下半身をつなぐ中心となるべき『腰』が『折れ』てゐるといふわけです。作者の心が分裂してゐるといふのか、主体性が無いといふのか、中

心が無いといふのか、一首の統一性を失つてしまつたものをいふのです」(四十三頁)。

俳句は短歌と違つて「二句一章」(二句二文)です。俳句の一句は二つの文で成り立つてゐます。

菜の花や月は東に日は西に

蕪村

「菜の花や」で切れ、「月は東に日は西に」の内容とは別の内容になつてゐます。

短歌の調べについて、少し読んでみます。「短歌の場合には言葉のつづき全体に作者の精神といふものが行きわたるわけなのです。はじめから終りまで一貫した精神が流れてゐる、これを『調べ』といふわけですが、一首一文といふことはその調子が一首全体に行きわたるといふことにもなるわけです」(前記の人麿の歌も

ひしがし
東の野にかぎろひの立てみえてかへりみすれば……

と一貫して流れていくので、『て』といふところで切つてはいけません。すなはち、東の方の野にかぎろひの立つのが見えて、ふとふりかへつてみると西の方には月が傾いたといふ(これは冬の情景です) 暁の、寒い、雪の降つた情景を言つてゐるので、その中における人

磨の行為をそのまま言葉にあらはしたところに、人磨の思想、生活感情といふものが生き生きと現はれてゐるのです。さうしてそれが千三百年後の今日のわれわれの心にも、さながら人磨が生きてゐたときに感じたであらう如くに迫つてくるのです」(四十七頁)。

「次に内容に関してまづ大切なことは、自分の体験を歌ふといふことです。自分の感情を歌ふといふことです、これはいまさらいふまでもないことだとは思ひますが確認しておく必要があります」(四十八頁)。

「次に右のことと関連しますが、歌には理屈を詠んではいけないといふことを言っておきたいと思ひます。このことは短歌においては特に注意しておかなければいけないので、いはゆる客観的に自分の感情とは別なものをよんでは、それは歌にはならないのです。正岡子規はそれを『理屈を詠むな』といふ言葉で言つてゐます。そこにいはれる理屈といふのは『概念』を歌にしてもだめだ、といふことなのです。たとへば『民主主義とは多数決原理に基づくものである』などといふことを言つても、それは歌にはなりません。『社会的需要に対し供給の足らざる時に物価はあがる』など、かういふ内容を、五七五七七にすることはわけもないでせうが、それは歌とは言へないのです。」「頭の中で、つまり理的に考へられてをるものは歌にはならない、数学の定理や計算や単なる知識は歌にはならない」(五十一頁)。

次に「題材と素材について」ですが、「素材、——すなはち何を歌によむかといふことですが、これは何でもかまはないわけです。思想も歌になりますし恋愛も民族的感情も自然の風景も、失敗も成功も、喜びも悲しみも、すべてよむことが出来ます。ただ大切なことは出来るだけ生き生きと、大胆に現実的に詠むといふことです。」(五十二頁)。「私たちがほんたうに歌にしたいと思ふのは切実な感動なのです。すなはち普通の言葉にはならないやうな深い感動を表現しようとするときに、歌がつくられるのです。したがってそのやうな非常に深い感動といふものを日常の口語で詠みますと、その感動が薄つべらなものになつてしまひます」(五十三頁)。

「結局一番大切なことは感動の深いことを詠むべきだといふことになります。もちろんそれは現在の感じといふものに限定する必要はありません。自分がかつて経験したことで深い感動をおぼえたことでもいいわけです。もつともその感動が完全に消え去つてゐるものはだめですが、どんなに遠い昔のことでも、そのときの気持が直接にある、いまそのときのことを思ふと自分の心は非常に感動する、といふことなら、それは立派に歌になります。ともかく感動が薄いとだめなのです」
「ともかくも自分の人生体験の中で強い感動をもつて経験したことを歌に詠んでいただきたいと思ひます」(五十四～五頁)。

連作短歌について、少し説明いたします。

「私どもは、現代短歌は連作短歌中心であると考へてゐます。連作短歌形式といふのは明治になつて正岡子規が打ち出したのです。複雑なおもひを一首の歌に詠んでしまはうとすると、抽象的な概括的なものが出来てしまひます。ところが歌といふものは、頭の中で考へてでつちあげたものを作るといふことではいけないのですから、それをさけるためには、一つの体験を何首にも分けた方が、抽象的にまとめることをしないで、自然に詠めることになります。歌を作る場合に、一首も出来ないのに何首も作れといふのは無茶だといふ人もゐますが、実際にはそんなことはありません。複雑な経験を一首にまとめて作つてしまはうとすることの方が苦勞が多いのであつて、何首にもわけて作らうとすれば、それほど苦勞しないでできるものです」(五十五、六頁)。

自分で歌を作つたあとに次は推敲を重ねるわけです。自分の感動のより正確な表現はどういふ表現か。自分の感情を言葉の上に表現していく訳ですけれども、自分の経験がどういふことだつたのか、自分にとつても分かつてくると思ひます。自分が感動したものは一体何だつたのかを自分自身で確認するといふことです。

今日は、これから短歌創作を兼ねバスに乗つて富士山五合目まで出掛けますが、その際一

気にすぐには歌はできないかとも思ひます。そこでメモをとつて下さい。目に入った景色、何に心が動いたか等々についてまづ書き留めて下さい。後でそのメモを見て思ひ出しながらも歌はできるはずです。

歌会始のエピソード

最後に、私の勤めてをります学校の中学三年生が今年（平成十一年）一月の宮中歌会始の選に預りましたので、その時のエピソードをご紹介します。歌会始の御題は「青」でした。

新しき羽を反らして息づける飛翔間近の青スジアゲハ

中尾 裕彰

（ここで歌会始の模様を中継したテレビのビデオを上映）

この短歌は、中尾裕彰君が中学三年の夏休みにキアゲハの観察をした経験が元になつてゐ

ます。羽を「反らして」とか、文語になつてゐる「息づける」といふ表現は、やはり実際に観察したから出てきた言葉であり短歌だと思ひます。

中尾君は歌会始に選ばれて上京し、その際の皇居での出来事を感想文に書いてゐます。まづ、天皇皇后両陛下に拝謁した際、皇后様が二年前に入選した本校の国語教師の大津留敬先生、中尾君の先生でもあるのですが、その入選歌

あかときの光の中に髪を梳く白寿の母のすがた静けし

大津留 敬

を覚えてをられたこと。ついで、両陛下と入選者との懇談が終つて両陛下がご退出の際に皇后様が点字で詠進し、見事選ばれた盲目の清水さんのところまで歩を進められ、「ごきげんよう」と告げられたこと等々の、実に感動的な場面を瑞々しい感性で綴つてゐます。

とにかく短歌を作つてみませう。「一時間で歌ができる」のは事実です。

短歌入門

創作短歌全体批評

熊本市役所情報企画課

折田
豊生



はじめに

これから、皆さんが昨日お作りになつた短歌について、私なりの感想を述べさせていただきます。この後の班別での短歌相互批評の参考にしていただければ幸ひです。

昨日、名和長泰先生が丁寧な短歌創作導入講義をして下さつた訳ですが、皆さんの短歌が名和先生のご指導に沿つて作られてゐるかどうかをチェックすることが、私の批評の内容になります。名和先生がご指摘になつた幾つかのポイントを思ひ出しながら、お聴きいただきたいと思ひます。

批評と添削

まづ、男子学生班の歌から始めます。

富士の霧何とも見えぬ我の目を亡き先人はいかに思ふか

自己凝視の歌といつていいでせうか。いいテーマなのですが、「亡き先人」が漠然としてゐて、イメージが掴みにくい。誰か具体的に思ひ浮かべてゐる人がゐるのであれば、そのことが分かる様に詠んだ方がよいでせう。

他の人が作者の気持ちを辿れる様に詠むといふことはとても大切なことで、体験を正確に詠み、表現に客観性を持たせることは、短歌創作の基本の一つです。また、「我の目を」と「いかに思ふか」のつながりは不自然であり、「亡き」と「先人」は重複表現です。

上の句の「富士の霧」には、「富士の霧の様に私の心の中にももやもやしたものが立ち込めてゐて」といつた意味が込められてゐるのでせうが、一文になるためのつながりがないため、腰折れになつてしまつてゐます。

以上を踏まへて、

確かなるものを掴めぬこの我を先人はいかに思ひますらむ

と添削してみました。欲を言ふなら、あの人の気持ちに応へたい、といつた積極的な詠みぶりがほしいところです。



○
合宿に来るまで皆に理解されず孤独だったよわが魂は

人と話をするときに、「わが魂は孤独だった」などは言はないでせう。短歌を詠むとなるとつい特別な表現をしたくなるものですが、ありのままに自然に詠むことがいい歌を詠む秘訣です。

またネガティブな表現でなく、「心から語り合へる友達にめぐり合へてよかつた」と詠んだ方が素直ではないでせうか。

合宿に來りて心通ひ合ふ友とはじめて巡り合ひたり

と添削してみました。どうでせうか。

なほ、普段、皆に理解されてゐないと考へることも問題で、自分の方から心を開く様心がけると、よりポジティブな心持になつていけるのではないかと思つた次第です。

○

大らかに見守り下さる富士山にバスから降りて心寄せたし

富士山が擬人化されてゐます。擬人化はよく使はれますが、下手をすると不自然な表現になりかねません。現実的に詠むとすれば、少なくとも、「見守つてくれてゐるやうに見える」と詠むべきでせう。

また、結句の「心寄せたし」も、「心が惹かれる」と詠んだ方が素直ではないでせうか。

見守りてくるるがごときおほいなる富士山に我は心惹かるる

としてみました。

○
発表をせねばと心あせれどもまとまらぬをもどかしく思う

合宿研修に一所懸命取り組んで下さつてゐる様子がよく分かります。「まとまらぬを」が字足らずになつてゐて不安定ですが、「まとまらざるを」とすれば定形のリズムに乗せることができます。

「発表」は、「発言」とか「質問」とかの表現に変へると、班別研修の場面か講義の折の場面かがより具体的に掴める様になるでせう。「思う」は、「思ふ」に訂正。

思ひがまとまらなくても、素直に話せば心は通ふものです。短い研修期間ですから、遠慮しないでおほいに語り合つてもらひたいと思ひます。

○
様々に知的戦ひくり広げられ我は実感の言葉はきたし

班別研修の真剣な様子が窺はれますが、上の句三句の表現は些かオーバーでせう。皆の討

論が知的戦ひに過ぎなかつたのか、もう一度よく思ひ返してみてはいかがでせうか。

下の句の二句もやや肩に力の入った表現です。「皆が理屈めいた討論をやつてゐる中で、自分は実感のこもつた言葉を吐くのだ」と言つてゐても、いい研修にはならないでせう。

様々に友らとともに我もまた心をこめて語り合ひたし

お互ひに心を開いて語り合ふと、短歌もまた、自然な気持ち、自然な言葉で詠める様になると思ひます。

○

考えを否定されてくやしけど何とも言えぬこの快感

これも班別研修の折の作品でせうか。二句と結句が字足らずになつてゐてリズムが壊れてゐますが、「快感」にポイントが置かれてゐるところに前向きな気持ちが感じられ、好感が持てます。「快感」があるのだから、「考えを否定されて」といふのは、作者の思ひ過ごしでは

ないのでせうか。

もの言えばやり込められてくやしけれど友と語るは快きなり

あるいは、

論さること多くしてくやしけれど眼開かれ快きなり

と添削してみました、異なる意見にも耳を傾ける姿勢が大切です、常にその様な気持のゆとりを持つてほしいと思ひます。

○

壇上で涙ぐみつつ熱弁す師に惜みない拍手をおくる

見上げれば明日の「晴れ」を予感さす富士の夜空の満天の星

一首目は、山口秀範先生の合宿導入講義について詠まれたもので、緊張したいい歌です。ただ、拍手は講義の後のことですから「熱弁せし」とするべきでせうが、リズムがやや乱れてしまひます。「語られし」でも十分意を尽くしうるのではないでせうか。

全体を文語で表現して、

熱をこめ涙ぐみつつ語られし師に惜みなき拍手をおくる

としてみました。

二首目は、登山前後の状況を詠んだものです。第三句は「予感させる」とするべきでせうが、これもまたリズムが乱れてしまひます。

文語表現にした上で、次のやうにしてみました。

見上ぐれば明日の「晴れ」を思はする富士の夜空の満天の星

○
バスケット走って飛んで汗だくだ肌をたたけばしぶきもはねる

レクレーションのときのことを詠んだ歌です。具体的で実感がこもつてゐるのですが、残念ながら一首一文の原則が守られてゐません。口語表現のまま一文にしてみますと、

バスケットで走って飛んで汗だくの肌をたたけばしぶきもはねる

となるでせう。定形の韻律に字数を合はせるためとはいつても、接続助詞など必要な言葉を省くと、腰折れになつてしまひます。

また、短歌は口語で詠んで悪いことではないのですが、口語はどうしても余韻に欠けるため、軽い調子の歌になつてしまふ。ゆくゆくは、伝統的な文語表現ができる様に勉強してほしいと思ひます。文語が分かる^と昔の歌や文章が読めます。それはすなはち、山口先生が合宿導入講義で指摘なさつた「歴史に一步を踏み入れる」ことに他ならないのです。

文語だと、次の様に表現できるのではないでせうか。

レクレーションの折に

走り飛びバスケットボールに興じたり汗の吹き出で飛び散るまでに

女子学生班の歌に移ります。

星野貢先生に班討に来て戴きし折

日の本の成り建つ由来はむつびあふ世界にぞあると師は語らるる

具体的で分かりやすい歌です。詞書の「班討」を「班別討論」に、「成り建つ」を「成り立つ」に、「由来」を「所以」に訂正すればよいかと思ひます。

○

富士山のふもとに居ること知らさんと友へ絵はがき出したしと思ふ

言ひたいことが一首一文ですつきりと表現され、友達を思ふ気持ちがよく伝はつてきます。力まずに詠むことの大切さを教へてくれる作品です。

「いる」は「ゐる」に訂正。

○

ぎこちない言葉の中にも暖かい班友達の心伝わる

いい班別研修が行はれてゐる様子がわかります。気持が纏まつてから話さうと思ふと、つい話しそびれてしまひます。ぎこちなくとも、素直に語ることが大切です。

歌の内容からして「班友達」はやや硬い。漢語表現が適切な場合もありますが、ここでは「友ら」の方が適切ではないでせうか。

また、「言葉の中にも」と「心伝わる」のつながりも正確ではないので、全体を文語表現にして、次の様に添削しました。

ぎこちなき言葉の中にも暖かき友らの心はこもりてありたり

○
体調の悪しとふ我をこまやかに気付かひくるる友はやさしも

しみじみとした付き合ひが偲ばれるいい作品です。

「とふ」は「といふ」の意味で自分のことを表現するときには使ひませんから、「体調をくづしし我を」としてはいかがでせうか。「気付かひ」は「氣使ひ」。

次に、社会人班各班の中からお一人だけ取り上げさせて戴きます。

山口秀範氏の導入講義を聞きて

みまかりし師の君の文を繰り返し引き給ひつつ偲び語りぬ

悠久の日の本の姿を信じつつ極め学べと厳しく語りぬ

単にその場の状況を詠んだ歌のやうですが、山口先生のご講義の雰囲気は伝はつてくる歌

です。緊張した詠みぶりの中に、作者の真剣な思ひが窺はれ、正確に詠むことの大切さを教へられます。

さてここで、事務局にアルバイトで来てゐる中学生と高校生の皆さんの歌を紹介します。

目の前のどんとそびえる富士山をさみしくするようにおおう雨雲

夜空を見あげてみれば心うつ数えきれない星のかがやき

朝の富士どんとかまえてりりしいが夜の富士山しゆんとする

雨雲が立ちはだかりて富士の山願い通じず景色見送り

富士の山雲におおわれ休火山朝昼晩と姿を変える

素直な詠みぶりが感じられます。短歌は上手に作らうとすると失敗するものです。素直に正確に詠む様に心がける。さうすると率直にもものを見、率直にもものを言ふことができる様になると思ひます。

最後に、国文研の先生方の短歌を読んでみたいと思ひます。

この合宿で、皆さんと同じ様な経験をなさつてをられる中で、先生方がどこに心を止められ、どの様に感じてをられるか、また、どの様に表現なさつてをられるかに注意しながら読んでいただければと思ひます。

(巻末の「合宿詠草」の項に掲載につき省略)

をばりに

以上で短歌の全体批評を終はります。

これから皆さんは、各班で相互批評をされる訳ですが、相互批評をするにあたつて注意すべきことを一つだけ申し上げておきたいと思ひます。

それは、批評を始める前にまづ作者の気持ちを十分に理解する様に努めることです。助言は愛情を伴つてこそ意味があるのですから、内容が分からないときは、作者の気持ちをよく聴いてあげる様にして下さい。

さうして、皆で知恵を出し合つて心と言葉が一つになる様に努めていけば、まごころのこもつたすばらしい歌ができていくものと思ひます。

短歌は、「敷島の道」と呼ばれることがあります。短歌を作り、また読むにあたつて、一人びとりがまごころを大切にし、通ひ合はせてこそさう呼べるのであつて、短歌が古来大切にされてきた所以はまさにそこにあると思ひます。その意味では、相互批評は敷島の道の原点と言つてもいい訳ですから、和やかに、かつ、真剣に取り組んで下さい。

そして、合宿の後もぜひ敷島の道に勤しんでいただきたいのですが、私の経験では、手紙の端に短歌を添へるのが一番無理なくできる方法である様に思ひます。

また、合宿参加必携書の『短歌のすすめ』は、私がこれまで見てきた中では最高の短歌創作のテキストです。折々にお読みになつて、敷島の道をより深めていただければと思ひます。それでは、充実した班別の短歌相互批評ができることを祈りつつ、私の話を終はらせていただきます。

一年の歩み

広島防衛施設局施設企画課長

第四十四回合宿教室運営委員長

山根 清



平成十年夏、「第四十三回全国学生青年合宿教室」が熊本県にある「国立阿蘇青年の家」において開催され、全国から集った学生青年達は四泊五日間を寝食を共にしながら学び、語り合った。合宿終了後、翌年（平成十一年八月）の再会を約して各地に戻った参加者達は、合宿教室での感動を単なる「思ひ出」に終はらせることなく、日本人として如何に生きるべきかを自分に問ひかけつつ、新たな活動、研鑽を開始していった。

各地区での輪読会・勉強会

東京では地区活動の中心である中野区の「正大寮」や各大学において学生、社会人が集ひ、輪読会や勉強会が続けられていった。

正大寮では、國武忠彦先生（昭和音楽大学講師）のご指導で、吉田松陰著『講孟餘話』や『古事記』の輪読会が始まった。『講孟餘話』とは、吉田松陰が萩の野山獄にて同じ獄中の囚人に『孟子』を講義した際の講義録である。「吾願はくは諸君と志を励まし、士道を講究し、恒心を錬磨し、其の武道武義をして武門武士の名に負くことなからしめば、滅死すと雖ども万々遺憾あることなし。豈愉快の甚しきに非ずや」との松陰の言葉を偲びつつ、参加者

は輪読を続けていった。

さらに正大寮では、今林賢郁氏（新日本製鐵(株)勤務）のご指導で、「東京裁判」や大東亜戦争等をテーマとした近現代史の勉強会も毎月行はれた。極力、原文や一次資料を基にして学ぶとの方針から、東京裁判における清瀬一郎弁護人の冒頭陳述書等を皆で輪読、輪講した。参加者は独立主権の確保、人種的差別の廃止、東洋の平和確保といった近代の我が国の宿命を理解しつつ、歴史の真実を学ぼうと一所懸命学んでいった。

亜細亜大学では、東中野修道教授のご指導で勉強会が毎週開かれ、学生・OBが集つて小堀桂一郎編『東京裁判——日本の弁明——』を輪読・輪講していった。

また、「防大輪読会」、「四土会」、「柴田会」、「太子会」をはじめとする在京の学生・社会人の勉強会も盛んに行はれていった。

関西では、関西信和会の毎月の例会が千里中央公民館にて営まれ、学生と社会人が毎回体験或は研究発表を行った。又、短歌の会も行はれ、その詠草は電子メールで各地に届けられた。その二、三を紹介する。

見あぐれば上の梢の葉の紅く染まりはじむる紅葉の木はも
緑なす下葉と梢の紅き葉の秋の日射しに映えてうるはし

台風一過

濁り水流るる賀茂の中州なるたふれし草に白鳥の見ゆ

京都大学四年生 岩 脇 千 裕

福岡では、新しく「三水会」が始まり、福岡商工会議所ビルに地区の学生・社会人が毎月集ひ、岡潔と小林秀雄の対談集「人間の建設」を輪読すると共に、九月二十一日（平成十年）にインドのニューデリーで開催された国際児童図書評議会（IBBY）世界大会で皇后陛下がビデオにて講演された「子供時代の読書の思い出」を皆で味読した。なお、「国民文化懇話会」も毎月開催され、福岡地区での研鑽、交流が続けられた。

熊本でも、会員による発表形式の例会が大江市民センターにて毎月営まれ、会員相互間の研鑽が行はれていった。

地区合宿

東京地区では、平成十年十月十日、十一日、来夏の合宿教室開催地である静岡県御殿場市にある「国立中央青年の家」で学生主催の一泊二日の秋合宿が行はれた。秋合宿は吉田松陰の『講孟餘話』の輪読と昭和史を学ぶことを主たるテーマとしたものであった。参加者の一人横畑雄基君（帝京大学三年生）は、「頭で分つてゐても行動に移す事は難しい気がするのだが、しかし、松陰のやうに先づやつてみなければどうなるのかも分らないのだし、もつと自信を持つて何事にも進んで行くことが大切だと感じた」と合宿感想を述べてゐる。又、鈴木良登君（麗澤大学三年生）は、「夏合宿で味はつた感動を忘れないやうに、様々な形で自分の史観や考へなどを確立してゆきたい。その第一歩が今回の合宿だと自分では思つてゐる」との決意を述べた。

関西地区では、平成十年十二月五、六日にかけて「高砂青年の家」にて学生、社会人の参加する冬合宿が行はれた。参加者の一人庭本秀一郎君（京都大学四年生）は、「自分の研究テーマである出光佐三についても、皇室についても、日本人についても、もつと自信を持つて語

れるやうにならなければならぬと思つた。もつと勉強し、苦勞を重ね、誇りをもつて生きる
 ことが出来るやうになりたいと思ふ。それが今日集まつてくれた友らへの礼儀とも思ふ」と
 の決意を感想文に記してゐる。

熊本地区では、平成十一年三月二十日、二十一日、「熊本県青年会館」にて社会人を中心
 とする春合宿が開催され、オリヴィエ・ジェルマント著『日本待望論』の訳者である宮崎
 大学助教授吉田好克先生を講師にお招きした。その御講演の中で、先生は「現在の我が国に
 欠けているものは、神聖・靈性であり、文化・文明といふものが人間に生きがひを与えるも

合宿名	年月日	場所
東京地区秋合宿	平成十年十月十日、十一日	静岡県「国立中央青年の家富士のさと」
東京地区正大寮合宿	平成十年十二月十九日、二十日	東京中野「正大寮」
熊本地区秋季合宿	平成十年十一月二十八日、二十九日	熊本県「青年会館」
関西地区冬合宿	平成十年十二月五日、六日	兵庫県「高砂青年の家」
熊本地区春季合宿	平成十一年三月二十日、二十一日	熊本県「青年会館」
関東地区会員合宿	平成十一年四月十七、十八日	東京「全国神社会館」

のであれば、神道を根幹とした二千年に亙る日本の伝統・文化が日本人に生きがひを与へてゐないはずがない」と語られ、「神聖・靈性」といふ目に見えないものが私達の精神を支へてゐるものであることを御指摘下さつた。

九州・関西巡訪

各地区の学生間の交流を図るべく、東京正大寮の伊藤俊介君（早稲田大学三年生）、浦義勝（早稲田大学三年生）、横畑雄基君（帝京大学三年生）の寮生三名が平成十一年三月十五日～十八日にかけて関西及び福岡を巡訪した。関西では京都で学生間の交流を図り、京都御所等も見学した。又、福岡では九州地区の勉強会「三水会」にも参加し、充実した時間を過ごすことが出来た。正大寮生三名は、この巡訪で、学生間の日頃の研鑽が如何に大切かを実感して帰京した。

国民文化講座

平成九年に引き続き「世界における日本の使命」との基調テーマで「国民文化講座」が学
士会館及び国立教育会館で都合四回開催された。今年はサブテーマを「混迷を増す現代日本
の根元的課題に取り組む」として、「東京裁判」に代表される戦後思想への批判・検証のみ
ならず、近現代の歴史に虚心に触れ、祖国日本が背負ってきた諸問題を学び合った。

第一回は平成十年十二月五日に学士会館にて拓殖大学日本文化研究所所長の井尻千男先生
が「市場原理と共同体原理の大激突」と題してお話しをされ、現在のやうに一面的真実であ
る「市場主義原理」(アメリカニズム)を過大視してゐては伝統ある日本の「共同体」が破壊
されてしまふ危険があるとのご指摘をされた。

第二回は(平成十一年)二月十四日に国立教育会館にて拓殖大学総長の小田村四郎先生が「現
代日本の『病根』と戦前の思想問題」と題して、国家、歴史、伝統文化の喪失を標榜するや
うな戦後日本の思潮形成の底流には、日露戦争後からの反国家・無国籍思想とマルクシズム
の流れがあることを指摘された。

第三回は四月十一日に防衛大学校教授杉之尾宣生先生が「戦史に学ぶ失敗の本質」と題し
て、ミッドウェー海戦等の戦史を引用されつつお話し下さり、時代や戦況の変化に対応するこ
との困難さと大切さをご指摘された。

第四回は六月十三日に岐阜女子大学教授ペマ・ギヤルポ先生が「祖国チベットと日本」と題し、学生時代に合宿教室に参加されたときの体験や中国に併呑されたままの祖国チベットの現状と苦悩についてお話しされた。

また、五月十六日には第一回新潟県「県央文化講座」が「明るく生き活きとした心をとるもどすために」といふテーマで開催され、講師としてアサヒ飲料(株)常務取締役坂東一男氏が「楽しき哉、我が会社人生——元気を出さう——」と題して、医療法人好日庵施設長・医学博士江里口淳一郎氏が「和歌と日本人——和歌は決して古臭いものではない——」と題して、また国民文化研究会常務理事長内俊平氏が「たて糸——いま私たちが最も心すべきこと」と題して講演された。

小田村寅二郎先生の御逝去と夏合宿への勧誘

平成十一年四月から、各大学では新学期を迎へ、活潑に新入生勧誘活動が開始され、私達の呼びかけに応へてくれた新しい友との研鑽が開始された。新たなる友も加はり御殿場での合宿教室の勧誘活動も日増しに熱を帯びてきた。

さういふ最中、平成十一年六月四日、国民文化研究会前理事長・小田村寅二郎先生が御逝去あそばされた。先生は旧制一高在学中の昭和十年代から、祖国の伝統を懐疑する知的傲慢を低流とする大学の「学問と思想」の混乱混乱を正すべくその覚醒運動の先陣に立たれ、戦後は、この合宿教室の開催や言論活動を通じて、日本の伝統や国柄の特質について学生青年達を御指導下さった方である。先生は前年平成十年夏の阿蘇合宿に病軀を押して出席されご挨拶下さったが、「私達は悠久の昔から続いてきた日本をもう一度見直し、祖国日本の立ち直る道を見いださなければならぬ」との先生のその際のお言葉を偲びつつ、間近に迫つて来た静岡県御殿場市の「国立中央青年の家」での第四十四回目の合宿教室（富士合宿）への思ひを新たにした。初めての富士山麓での合宿開催を目指し、学生・社会人一緒になつてその準備を行つていった。

合宿教室のあらまし

帝京大学法学部四年

横
畑
雄
基



第一日目

(八月一日・日曜日)

第四十四回全国学生青年合宿教室は、霊峰富士の雄姿を間近に仰ぐ静岡県御殿場市の「富士のさと 国立中央青年の家」において開催された。初めての開催地であったが、全国各地からの参加者は、入口に張られた「友よと呼べば友は来たりぬ！」の横断幕に迎へられた。参加者は受付を済ませると、ただちに宿泊棟の各班室に入り、初めて会った班員たちと挨拶を交はして、開会式に臨んだ。

参加者

(学生班 四十三大学) (洋数字は参加学生数)

東北女子大 4 東北女子短大 3 東北栄養専 1 福島県立医大 1 獨協大 1 千葉商科大 1
麗澤大 1 東京大 2 東京農大 1 東京学芸大 1 国立音大 2 武蔵野音大 1 学習院大 5
日本大 2 大正大 1 亜細亜大 2 武蔵工大 1 大妻短大 1 早稲田大 4 慶応大 3 帝京
大 1 明星大 2 防衛大 2 静岡大 1 京成大 1 同志社大 1 関西大 1 大阪外大 1 近
畿大 1 島根大 4 北九州大 2 九州大 3 九州女子大 1 福岡大 1 福岡工大 1 福岡教

育大3 九州産業大1 中村学園大2 東筑紫短大1 佐賀大5 長崎大6 長崎県立大1
 鹿児島大1

計八十一名(うち女子二十四名)

(社会人・教育参加者) 十四名 (招聘講師) 二名 (大学教官有志協議会・国民文化研究会) 七十名 (事務局) 七名 (写真班) 一名 (見学参加者) 三名

総計 一七八名

8月4日(水) 第4日	8月5日(木) 第5日
(起床)	(起床)
洗面・清掃	洗面・清掃
朝の集ひ 班別散策 朝食	朝の集ひ 地区別連絡 朝食
講義 小柳陽太郎先生	台本を顧みて 山根清氏 参加者による 全体感想自由発表
質疑応答	感想文執筆 及び 第三回短歌創作
班別研修	
昼食 休憩	清掃 昼食 班別懇談
講話 夜久正雄先生	閉会式 宝辺正久先生
第二回 班別輪読	解散
第二回短歌創作	
夕食 入浴	
第二回班別 短歌相互批評	
夜の集ひ	
就寝 消灯	

第四十四回 (平成十一年) 全国学生青年合宿教室「日程表」	8月1日(日)第1日	8月2日(月)第2日	8月3日(火)第3日
	6:30	(起床)	(起床)
	7:00	洗面・清掃	洗面・清掃
	8:00	朝の集ひ 班別散策 朝食	朝の集ひ 班別散策 朝食
	9:00	講義 井尻千男先生	講義 長谷川三千子先生
	10:00	質疑応答	質疑応答
	11:00	班別研修	記念写真撮影 班別研修
	12:00	昼食 休憩	昼食 休憩
	1:00	短歌創作導入講義 名和長泰先生	綱引き大会
	2:00	リクリエーション ハイキング	創作短歌全体批評 折田豊生先生
3:00	開会式 上村 和男先生 オリエンテーション 山根 清氏 大日向 学氏	第一回短歌創作	第一回班別 短歌相互批評
4:00			
5:00	班別自己紹介		
6:00	夕食	夕食	夕食
7:00	入浴	入浴	入浴
8:00	合宿導入講義 山口 秀範先生	輪談導入講義 国武忠彦先生	青年体験発表 林あやみ氏 藤田和雄氏 講話 桑木実秀先生 慰霊祭の説明 山内健生先生
9:00	班別研修	第一回 班別輪談	慰霊祭 班別輪談
10:00			
	就床 消灯	就床 消灯	就床 消灯

開会式

麗澤大学四年の鈴木良登君の開会宣言の後、主催者を代表して本会理事長上村和男先生は、ご自身の合宿参加経験を顧みて「当初は、生命体として国をとらへるといふことがなかなか理解できなかつた。合宿参加を続け、学ぶ中で少しづつ見えてきた。皆さんもわからない問題を大切に心に抱いて生きていつてほしい」と訴へられた。

続いて、参加者を代表して帝京大学四年の横畑雄基が「皆さんと共に歴史を学び、現代の問題を考へたい」と挨拶した。

次に、山根清合宿運営委員長は「合宿の趣旨は心を開いて語り合ふといふ点につきる。出会ひを大切にして心を通はせ富士山のやうに晴ればれとした気持で過さうではありませんか」と呼び掛けられた。最後に大日方学指揮班長から諸注意がなされて合宿は始つた。

合宿導入講義「合宿教室の目指すもの」 (社)国民文化研究会事務局長 山口 秀 範 先生

先生はまづ大成建設勤務時代、任地ナイジェリアの大きな満月を見て詠まれた短歌を紹介され、奈良時代(八世紀)の阿倍仲麻呂の短歌を偲ばれて、「月を見たことによつて故郷を思

ひ出す、友達を思ひ出すといふことの切実さをこの歌を通してしみじみと感じました」と述べられた。シカゴでは先生は新規建設プロジェクトにおいて、半年にわたる交渉の末、一度は振り出しに戻されさうになりながらもなんとか契約に漕ぎ着けられた体験を話され、その時の自詠を紹介され、川出麻須美の「極まればまたよみがへる道ありて生命果てなし何かなげかむ」の歌を偲ばれて、「私にとつて、あるいは諸君にとつても、歌は生き方そのものであつて欲しいと思ふのです」と強く述べられた。

最後に先生は「私にとつて忘れられない衝撃は、帰国して私が見た日本の子供達の顔色が暗かつたことです。それは我々大人達が、子供達が顔を輝かせるやうな教育を行つてこなかつたからです。しかし諸君はそれを大人のせゐにする歳ではもうありません。今の日本がかしいとしたら、諸君の力でそこから始めること。それが日本の青年の生き方だと思ひます。小田村寅二郎先生はこの合宿を四十三年間、その思ひだけでやつてこられました。それを我々はなんとか受け継ぎたいと思つてゐるのです」と切々と訴へられてご講義を終へられた。

班別研修

講義の後、参加者は各班室に戻り、導入講義について「班別研修」を行つた。まず皆で講

義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかつたこと、重要なことは何かを話し合ひ、さらに班員一人一人がどのやうに受け止めたかについて、話し合ひが進められた。なほ、この班別研修は、以後の各講義終了毎に行はれ班員相互の心の交流が深められていった。

第二日目

(八月二日・月曜日)

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。今次の合宿では、「青年の家」の合同の朝の集ひに参加するといふ形で、他団体と共に行はれた。霊峰富士を仰ぎつつすがすがしい空気の中、国旗掲揚の後、体操を行つて、一日の研修をスタートさせた。



講義「アメリカニズムとどう戦ふか——市場原理と共同体原理の大激突——」

拓殖大学日本文化研究所所長

井尻千男 先生

先生は、「グローバル・エコノミー」とか「グローバルイズム」といふのはアメリカニズムに他ならず、「地球儀を抱きかかへてゐる」やうなアメリカが自国の利益を追求するものとして相応しいが、正反対の世界観を持つ日本が、その資格もないのにアメリカと同じやうな事を言つてゐる、といふのが私の基本的認識であると述べられた後、アメリカの現代の苛酷なまでの自由主義が生まれた所以について、「一九六〇年代の“公民権運動”によるあらゆるマイノリティの反乱が、米国内で民族間の覇権争ひをひき起こし、ならば市場で強弱の決着をつけようではないか、とアメリカは考へた。ポーターレスと言ふ言葉に日本人が読みとらねばならないのは、熾烈な国内抗争をしてきたアメリカのさうした国内事情が裏側にあるといふことです」と我々の注意を喚起された。

更に先生は、「国民・市民」と対比して「消費者」（共同体に帰属しないで、マーケットの価格に敏感に反応する人々）に触れた後、「自生的社会秩序」（ハイエク）を前提に市場原理が重なつてゐれば自由主義は機能するが、八〇年代にその基盤にズレが起こり、共同体原理と市場原

理との関係が調和から対立へと移つた。それが今の局面であると言及された。

その後、マックス・ウェーバーの『古代ユダヤ教』に触れながら、ユダヤ資本がパリーヤ資本（共同体に属さず移動する資本）であること、又その由来について「旧約聖書・申命記」に言及され、そこにユダヤ人の共同体と市場に関するダブルスタンダードがあり、この二重基準を持たない民族は亡ぶと強調された。そして最後に、「活力あるマーケットは活力ある人間がつくる。マーケット以外の原理をどれだけ持ち得るか。ここに心を留めてどう生きるべきか考へてほしい」と述べてご講義を終へられた。

短歌創作導入講義 「短歌創作を通じて広がる共感の世界」

久留米大学附設高校教諭 名 和 長 泰 先生

はじめに先生は、かつてこの合宿教室で知合つた遠方の方と短歌を通して、交信を始めたことで、互ひの一語一語をも大事にする「心の交流」「共感の世界」を共有し得たと語られ、その経験は、教師生活の「大きな励み」となつたと語られた。その先生ご自身の教へるクラスにはグループに入れない「孤独な生徒」や、二年近く経つても同級生の顔と名前が一致しない者がゐた。生徒同士のつながりの稀薄さに「愕然と」され、修学旅行中に生徒と担任に

よる『創作和歌集』を出してみたところ、「好評」を博し、「十年以上経つた今も大切に保存する生徒も」ゐると述べられた。「自身の切実な体験を正確に伝へる努力」が和歌へと結実すれば、友らとの「広がる共感の世界」を作つていけると、和歌による人との付け合ひの真価を、創作上の留意点等を交へながら先生は懇切に説かれていった。

レクレーション

講義後、参加者は、「短歌の創作」を兼ねて、二台のバスに分乗し富士登山に出発した。バスで五合目まで行き、そこから宝永火口を見下ろして戻つてくるコースを散策の予定であったが、突然の雨のため、残念ながら予定を変更し、引き返すこととなつた。その代はり、翌三日目の昼食後、「綱引き大会」が実施され、楽しいひとときを過ごした。

輪読導入講義 「古事記——倭建命——」

昭和音楽大学講師 國 武 忠 彦 先生

先生は、平塚江南高校校長であられた昨年、オーストラリアからの留学生に日本史を教へたが、『古事記』の物語を「面白い、楽しい」と大変興味を持つてくれたことから『古事記』を教へると日本の歴史が大変分かりやすくなると語られ、早速、本論にはいられた。そして、

本居宣長の言葉を引用されながら、『古事記』が、支那文化全盛の時代に、日本の古来の物語と言葉が滅びることを気遣はれた天武天皇によつて企画され、稗田阿礼により口承され、三十余年後、その意志を継承された元明天皇の命により、才能豊かな太安万侶の苦心惨胆惨憺の文章化の努力があつて初めて出来た稀有の書であることを語られた。続いて、『古事記』の倭建命のくだりを心をこめて読み味ははれながら、丁寧に分かりやすく解説していかれた。特に、弟橘比売命が倭建命のために走水の海に入水されるくだりでは、皇后様の御講演に（平成十年九月 IBBY世界大会のビデオテープによる基調講演）に触れられ、「さねさし相模さかむの小野」の御歌について、「むごい運命を自ら担はれながら恐らくは生涯で最も愛と感謝に満ちた瞬間の思ひ」を歌つた歌と語られ、愛と犠牲が一つのものを感じられたといふ皇后様の御心を偲しのばれながら語られた。そして、よくよく『古事記』を読み味はつて欲しいと訴へられてご講義を終へられた。

班別輪読

講義の後、参加者は各班に分かれて「班別輪読」を行つた。國武先生のご講義の中で紹介された『古事記』の文章を、皆で声に出して輪読した。古代の人たちの思想や息吹を直接感

じることのできたひとときであつた。

第三日目

(八月三日・火曜日)

講義 「国体」の思想

埼玉大学教授 長谷川 三千子 先生

先生は、まづ「国体」といふ言葉については余りにも間違つた考へ方が流布してをり、この講義ではこの言葉から我々が学ぶべき神髄を取り出すための手がかりを話してみたいと述べられた。その手がかかりとして、まづ幕末の後期水戸学の第一人者藤田東湖の『弘道館記述義』を紹介された。その中で「宝祚之を以て無窮」「国体之を以て尊嚴」「蒼生之を以て安寧」「蛮夷戎狄之を以て率服す」の四つが「国体」を考へる上で大事なポイントであるとされ、特に東湖が「蒼生之を



以て安寧」の解説の中で、天皇は国を治めるあたつて伝統的に「蒼生」つまり人民の安寧を最大の目的とされてきたことを述べてみると、ところを詳しく紹介され、東湖はこれこそ日本の国体の特色として誇るに足るものと考へてゐたとみてよいと述べられた。

さらに『日本書紀』に書かれてゐる仁徳天皇の国見のエピソードを紹介されながら、当時、すでに人民を本もととすることが代々の天皇において伝統として引き継がれ思想となつてゐたことを指摘された。そしてその伝統が現代にも引き継がれてゐることを大東亜戦争の「開戦の詔書」「終戦の詔書」によつて示された。そして藤田東湖の触れてゐない「国体」の思想の特色として、昭和天皇の終戦時の御製を紹介され、「身はいかならむとも」とお詠みになられた御心の下に民の安寧がはかられてゐる点を述べられた。

最後に丸山真男氏の文章に述べられてゐる「国体」に対する歪んだイメージが今なほ日本人の「国体」に対する理解となつてゐることを指摘され、この誤解を解くには、今見てきたやうに歴史に立ち戻つて我々自身の目で日本の国体をもう一度再発見することが大事であると述べてご講義を終へられた。

創作短歌全体批評

熊本市役所 折田豊生 先生

先生は、刷り上げられたばかりの三百余首からなるホツチキス綴ちの歌稿の中から約二十首を選び、作者の気持ちを推し量りながら適切な表現へと丁寧な添削してゆかれた。御講義は時に笑ひの起る場面があつたり、皆で思ひに心を寄せたり、秀歌を味はつたりと会場は一体となり和やかな雰囲気の中で進んだ。そして、相互批評の際の留意点を述べられた後、「合宿を終へた後も短歌の勉強してもらひたい。中でも歌を——敷島の道——として我々の先祖が代々大事にしてきた理由は、そこにまごころが込められてゐる歌を通じ言葉を遣り取りし磨き合ふことを大切にしてきたからです」と語られ、「そのためには友に手紙を書きその中に一首添へるのが一番良い。理想は手紙の上で相互批評を行ふことです」と強く勧められた。

班別短歌相互批評

全体批評の後、「班別短歌相互批評」が行はれた。歌をつくつたのは初めてといふ参加者が多かつたが、皆、一人ひとり歌に心を寄せて、作者の思ひに沿つた正確な表現を求めて心を砕いていつた。人の思ひを正確に受け止めること、自分の気持ちを伝えることが如何に難し

いかを実感させられ、その一方でお互ひの心が通ひ合ふ充実したひとときとなつた。

青年体験発表

最初に、岐阜県で学習塾の講師をされてゐる三林浩行氏が登壇された。氏は、日本のために身を削り、時には命を捧げ、奮闘した人物を学んでいくにつれ、日本の国に対する愛情が湧き、さういふ人達のお蔭で今日の日本があることを知り、日本の国の爲に何かをしようといふ内発的な気持ちが起こつてきたことを語られた。同様の体験を味はつてほしいといふことで、高校生や社会人を対象に、「人物歴史講座」を学習塾で企画実践されてゐることを話された。続いて、幕末の激動の中での吉田松陰のやむにやまれぬ憂国の行動と草莽崛起の志を現代に於いても受け継いで行かなくてはならないのではないだらうかと、情熱をこめて訴へられた。

次に、アサヒ飲料(株)の澤部和道氏が登壇された。最初に、氏は自信を持つて会社の製品を販売できるやうになるまでの営業活動の体験を語られた。続いて、学生時代、東京の正大寮で先輩に導かれて吉田松陰の『講孟余話』の輪読を始めたこと、その文章を通して、日本を思ひ、囚人と共に学ぶ生き生きとした松陰の真摯な生き様に触れることができた喜びを話さ

れた。特に、「至誠にして動かざるもの未だこれあらざるなり」といふ言葉に感銘を受け、社会生活での励みとされてゐることを語られた。素晴らしい生き方をされた先人の姿に学ぶことは、日本の国柄や良さを知ることになり、誇りを持つて日本を語ることができるとはなにかと、力強く語られた。

講話 「ビルマでの死線を越えて——若き友らに伝へたいこと——」

市ヶ谷漢方クリニック院長

桑 木 崇 秀 先生

先生は大東亜戦争開戦前後の青年時代を「いづれ近いうちに軍服を着て戦はざるを得ないだらう」との覚悟のもとに生きてゐたと回顧された。軍医として加はつたインパール作戦が緻密性を欠き、物量の差も大きかつたため、悲惨な結果となつた。マラリア、アメーバ赤痢、栄養失調の三つの病気になるものが続出しと述べられた。「陸軍病院入院中、パーキル博士の『ビルマの薬用植物』なる本を入手、夢中で翻訳し、それを前線に持つて行き、現地の僧侶に植物について教はりながら、必死で鉄カプトで薬草を搗いて薬を作り、苦しむ兵士達に飲ませた。それが戦後漢方医学を志す契機となつた」と語られ、さらに「これだけは知つて

ほしい」と、好き好んで戦つたわけではない、軍紀も厳正であつた、戦後の復興は昭和天皇の御存在を抜きには語れない等々ご体験に即して切々と説かれたのであつた。

慰霊祭

慰霊祭に先立ち、神奈川県立厚木南高校教諭の山内健生先生が先人に敬悼の思ひを寄せることこそ最も人間的なことであり、もし今日の日本でそれが等閑視されてゐるとしたらよくよく考へてみなければならないと問題提起をしつつ、「慰霊祭の意義と祭次第」について説明された。

その後、合宿教室の全参加者は、屋外の齋庭に整列した。まづ、長内俊平先生（本会常務理事）が、お祓ひに代へて三井甲之先生の和歌を朗詠され、慰霊祭は開



始された。次に警蹕の声の響く中、「戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い命を捧げられた、すべての祖先の御霊」を最敬礼でお迎へした。参加者一同を代表して、小野吉宣先生（本会理事）が祭文を奏上され、次いで、松吉基順先生（本会監事）によつて御製拝誦が行はれた。続いて、上村和男先生（本会理事長）の玉串拝礼に合はせて一同で拝礼。その後、「海ゆかば」を全員で斉唱し、最敬礼のもと御霊をお送り申し上げ、慰霊祭は滞りなく終了した。

左は奏上された「祭文」と拝誦された「御製」である。

祭文

ここ 霊峰富士の裾野の広ごれる高原の中 国立中央青年の家に集へる社団法人国民文化研究会理事長上村和男をはじめ我ら 第四十四回全国学生青年合宿教室を営みて

三日目の夜を迎へぬ

今し 天つ日はかくろひ高原にそよ風吹きて 星影近き合宿地の清しき広庭を 斎庭と定めまつりて

とこしへにみ國守ります遠つみ祖達をはじめ み國の為に悲しき生命を捧げ 尊きみ

國を守りましし もろもろのはらからのみ霊を招ぎまつり なくさめまつらむと み魂
祭りを仕へまつらむとす

顧みれば 昭和天皇の 御聖断を仰ぎ戦火をさまりて後 混迷を極めたる時代に 故
小田村寅二郎大人の命を先頭に日本國民としての「大道」を求め 「祖國日本」の真正
なる独立を果さむと合宿教室を営み はや四十あまり四つの回を重ねたり

しかれども 政治・経済 更に教育・マスコミの各界の混迷いよいよ深まり 國民の
深き憂ひとなれり

この美はしきやまとしまねの内・外に みつるまがごとのことごとを 力の限り打ち
払はんと ここに謹みて祈りまつらんと告げまつらむ

われらは井尻千男・長谷川三千子両先生をはじめとする諸先生の御講義に 古事記の
輪読に はたまた短歌の創作に 心を開き心をかたむけ語りかはし 汝いまし祖おやたちの尊き
み言葉を学び おのおのものが文化防衛の戦士となりて 祖國日本を とことはに榮え
ゆかしめむと誓ひまつらむ

天がけるみ祖のみたまよ 願はくは われらのゆくてをまもらせ給へと 第四十四回
合宿教室参加者一同に代り 小野吉宣謹み敬ひ恐みも白すまを

御製

明治天皇

神祇

神垣に朝まゐりしていのるかな國と民とのやすからむ世を

をりにふれて

久方のあめにのほれるこちしていすずの宮にまゐるけふかな

をりにふれて

國のためうせにしを思ふかなくれゆく秋の空をながめて

神祇

めにみえぬかみの心に通ふこそひとの心のまことなりけれ

虫声非一

さまさまの虫のこゑにもしられけりいきとしいける物のおもひは

昭和天皇

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

稚内公園

樺太に命をすてしたをやめの心を思へばむねせまりくる

祭り

わが庭の宮居に祭る神々に世の平らぎをいのる朝々

今上天皇

沖縄平和祈念堂前

激しかりし戦場の跡眺むれば平らけき海その果てに見ゆ

硫黄島

精魂を込め戦ひし人末だ地下に眠りて鳥は悲しき

第四日目

(八月四日・水曜日)

講義 「君臣の情——日本の歴史を貫く『まごころ』の世界——」

(社)国民文化研究会副理事長 元・九州造形短期大学教授

小柳 陽太郎 先生

先生は天皇と国民との間にどのやうな情感が交はされてきたかといふ事実を、私達の目と心でしつかりと受け止めて欲しいと強調された。幕末動乱の最中、孝明天皇から將軍家茂に賜つたご宸翰を紹介され、お二人の間に正に親子の情愛ともいふべき関係があつたからこそ、日本は内憂外患の時代を切り抜けられたと語られ、孝明天皇の次の御製を紹介された。

澄ましえぬ水にわが身は沈むともにごしはせじなよろづ国民

身を捨てて国民を救ひたいといふお氣持で生きてをられたといふことを当時の国民が知り、天皇に何とかお応へしたいといふ氣持が澎湃として全国に漲つた。先生はのち明治時代、政治の中心的存在となつた三条実美が文久三年孝明天皇にお叱りを受け、都落ちしてもなほ天皇をお恨みすることなく、深くお慕ひしたといふ美しい「君臣の情」のお話をされた。長

谷川三千子先生も引用された昭和天皇の終戦時の御製についても、身を捨てて国を守るといふお気持ちは、孝明天皇のお気持ちと全く同じものであると指摘された。

先生は下村海南著『終戦秘史』の中の、御前会議で陛下の終戦のご聖断をお聞きした総理大臣以下の涙ながらの模様を伝へた個所を引用され、これが戦後のスタートであり、皆の心が一つになつたといふ事実があつたからこそ戦後の復興があつたと語られた。そして、今上天皇は皇太子のころから「象徴としての天皇」について深く考へて来られて、「国民の悲しみを国民と共に味はふのが象徴だ」と仰言つたと述べられた。副題の「日本の歴史を貫く『まごころ』の世界」について、日本は天皇といふご存在によつて「まごころ」が一筋に守り伝へられてゐる、皆さんは天皇のお気持をお偲びする努力を惜しんではならない、この点が現代日本で最も欠けてゐるのではなからうかとお話を結ばれた。

講話 「古事記のいのち」

亜細亜大学名誉教授 夜久正雄 先生

先生は、まづ最近刊行された『王書』（岩波文庫）と『古事記』とを比較されながら話をはじめられた。そして神話（神々の話）、英雄伝説（神々と英雄との共存の物語）、歴史（人の世の物

語)の三部構成として区別しながら連続させて書きあげた建国の物語『古事記』の作者の知恵の意味合ひについてお述べになられた。そして、中国・インドからアジア、西欧に互る「歴史」の著述の仕方を『古事記』と比較されて、「歴史的事実」かどうかだけで神話や英雄伝説を考へるのは間違ひでそれは「神話」と「歴史」を混同するものだと指摘された。次に先生は、『古事記』の言葉に強く打たれるものがあるとご心境を披歴されて実際に一節を読まれた。そして「妾、御子に易りて海の中に入らむ。御子は遣さえし政遂げて覆奏まをしたまはね」との弟橘比売の命の御言葉がわかり、それにより感ずるものがあるといふことは、千三百数十年前の人の気持ちがあ今の私に通じてくるといふことで、これが「古事記のいのち」なのです、と述べられた。最後に「皆さん是非『古事記』を読んで下さい」と言はれて、ご講話を終へられた。

第二回短歌創作・相互批評

夕食をはさんで、第二回の「短歌創作」と「班別相互批評」が行はれた。参加者の歌もさすがに二回目となると、オーバーな表現が影をひそめて、自分の思ひを素直に表現したもの

が多くなり、相互批評でも相手の気持ちをよく味はひながら言葉を求めてゆくといつた交流が実現し、お互ひの気持が通ひ合ふなごやかなひとときとなつた。

夜の集ひ

厳しい日程を送つてきた合宿教室も最後の夜を迎へた。「夜の集ひ」は屋外でのキャンプファイアーとなつた。各班ごとの様々に趣向を凝らした出し物（歌唱や寸劇など）に合宿参加者は心なごむ楽しい時間を過した。

第五日目

（八月五日・木曜日）

合宿を顧みて

合宿運営委員長 山根 清 氏

氏はまづ、今日のわれわれが霊峰富士を仰ぐ気持は祖先と同じものであり、「古事記」の言葉に感動するのは古人の人生観に通ふものがあるからであると述べ、「私達は確かに自分を日本人であると実感できたのではないでせうか」と話された。更に、外来文化との交流接触



の歴史を偲び、その中に連綿と受け継がれた「ことば」こそ固有文化そのものであると指摘され、全員で詠草に励んだ短歌の世界を讃へられた。そして終戦の御聖断に思ひを馳せ、私達が防衛すべきものは、「日本の国柄」つまり君臣に通ひ合ふ情そのものではないかと訴へられた。

最後に、今後の互ひの交流が広がり深まることを期待するとともに、今次の合宿を支へて頂いた方々、中でも亡き小田村寅二郎先生に感謝申し上げたいと締めくくられた。

全体感想自由発表

続いて四泊五日を振り返つて思ひのたけを発表する時間に移つた。

「六年前から参加してゐるが、当初の反発は消え、合

宿での付き合ひや言葉のやりとりが今は無性に好きだ」内容についてゆけないと嘆く友に涙ながらに話す班長の姿や、相互批評で班が一つになれたことで、他者に没入してゆく世界を感じた」「初日に帰りたくなつたが、叱責や励ましのお蔭で理解がすすみ、今では日本の言葉がこんなに美しいものかと思ひ、短期間で成長した自分に驚いてゐる」などの感想に続き、壇上で自作の和歌を朗詠する者もあつた。「読書の中で普段は肩に力が入りすぎてゐた。むしろ己が身を抛つてでも愛する人を守らうとする素朴な感情こそが大事であると感じた」「この合宿は小田村先生の遺志を継ぐものと感じた。今後は知識と実感の一体化が目標である」など数々のみづみづしい所懐が披露され、一同感銘を新たにした。

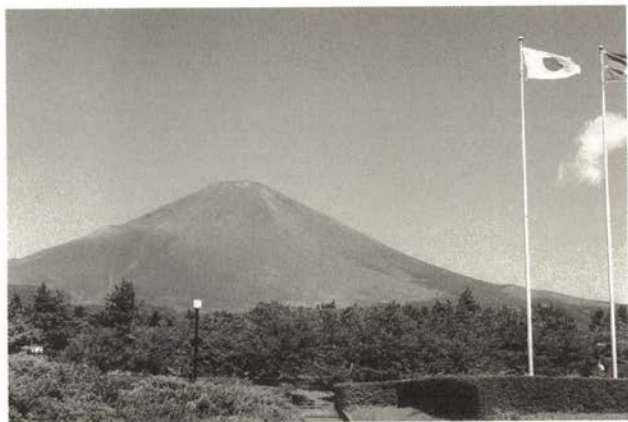
閉会式

参加者を代表して福岡教育大学教育学部二年の小林国平君が、「日本や古典の良さを実感しました。そして御製や皇后陛下のお言葉に接し、両陛下の思ひがひしひしと心に響き、胸があつくなりました。今の気持を忘れずに勉学に励み、多くの友と来年も会ひたい思ひます」と決意を語り、続いて主催者を代表して国民文化研究会副理事長の宝辺正久先生が、「素晴らしい日本の国柄、国を尊重する心の大切さに気付き、その心をお互ひ歌に詠み交はして、励

「まし合ひ交流を続けていきませう」と挨拶された。防衛大学人文社会科学部四年の清水洋平君が閉会を宣言し、合宿教室は全日程の幕を降ろした。

（平成十一年十一月発行の『第四十四回合宿教室感想文集』所載の「合宿教室のあらまし」を参照して、まとめました。）

合宿詠草



富士山

あふぎ見れば雲一つなき大空に富士の高峰はそびえ立つかな

鹿児島大 農四 葉棚 奈緒子

青空にすそ野広げて堂々とそびえ立ちたる富士は雄々しき

島根大 教育五 三島 明

富士山のふもとにゐること知らさんと友へ絵はがきを出したしと思ふ

長崎県立大 経済二 橋本 陽子

いにしへと今も変はらぬ富士の山朝日を受けて青く輝く

慶応大 法二 斎藤 崇

車窓から生まれて初めて見た富士はりりしく強く美しく立つ

北九州大 法三 松岡 貴之

白雲しろくもに輝く大富士仰ぎ見ればみ山に神のやどるかと思ふ

九州女子大 音楽四 石松 知恵

交流

顔知らぬ同志の集ふ合宿は期待と不安が入り交りけり

学習院大 法二 佐藤洋平

友どちと語り合ふごと己が身を高めゆかんとひたに思はる
東京農業大 応用生物科学一 菅間 勇

ぎこちない言葉の中にも暖かい班友達の心伝はる
武蔵野音大 音楽四 小林 祐子

日の丸のはためくみつ朝日背にともに汗するラジオ体操
伊佐ホームズ(株) 青木 一俊

班友と絆の芽生えを感じつつ我らの負へる責任を思ふ
亜細亜大 経営三 福田 進治

全員が心あはせて合掌しいただく食事はたのしかりけり
林兼産業(株) 山中 康司

全国から集ひし友と交流し仲良くなれてうれしかりけり

佐賀大 経四 小宮 宏

いつの日か素敵な人と逢へるやう今は我身をひたすら磨かむ

東北女子短大 保育二 橋本 みどり

短歌創作の折に

日植緑地(株) 杉山 忠

夕暮れの静寂なりしこの時に鳥のさへづり心地よきかな

福岡工業大 工二 小林 広和

時を経て友との絆深まれば惜しく思へり別るる時間を

講義

山口秀範先生の導入講義を聞きて

東北女子大 家政三 小野 慶実

涙して先生（小田村寅二郎先生）の心受け継ぐと語らるる師に我も続かむ

長谷川三千子先生の御講義を受けて

九州大 法四 星野 大輔

國民をいかになるとも護るこそ天皇の道すめらみことにあるらし

身はいかにも民を護らむと天皇は宣らせたまひき

長谷川三千子先生の質疑応答の時のお姿を見て

佐賀大 教育四 橋本 さつき

学生の問ひし言葉にいくたびも笑みて深くもうなづく先生はも

小柳陽太郎先生の御講義を聞きて

同志社大 法一 石井 一賢

国民と苦楽をともにとつとめらるる天皇すめらみ仰ぐ吾が国柄は

マッカーサーへの直訴状を読む

帝京大 法四 横畑 雄基

ひしひしと天皇きみを想ひし國民くになみのあるべき姿ここに見いづる

輪読の途中で涙する友もあり吾あが目頭もまた熱くなる

小柳陽太郎先生の御講義

九州大 医一 中島 健太郎

天皇の国思はるる御心は昔も今も変はらざりけり

残波ロイヤルホテル 上原 真紀

先生の古事記のお話し聞きぬれば古典の魅力に我すひ込まるる

夜久正雄先生の御講話

明星大 人文一 久田 広光

古事記ふるこじのいのちを味はふ先生しの声は心の中に深く響けり

繰り返し繰り返しつつ読みゆきて古事記のいのち受け継ぎゆきたし

『古事記』

国思しのびの歌を読みて

長崎大 教育三

辻 雅充

ふるさとの大和の国のすぐそばで亡くなりにつけりヤマトタケルは

「白鳥の陵」を読みて

日本大 通信教育

石井 信博

白鳥に姿変はりて天翔ける倭建命やまとたけるのみこと美し

京都大 文一

服部 源憲

友どちと声を合はせて『古事記』を読めば強きしらべの胸に迫りく

千三百年の時経たるとは思はれぬ『古事記』のしらべ我に迫りく

倭建命の話を読みて

長崎大 教育四

外村 聖典

たけき皇子の命果てなむ時せまり故里思ひ歌を詠みたまふ

故里を「国のまほろば美うらはし」と詠みたまひたる歌ぞかなしき

弟橋比売の御歌を拝して

福岡県中小企業経営者協会

本田 武生

幾年を経るも心に伝はりくる言の葉の調べ美しきかな

慰靈祭

祭文をまことをこめて奉る先生の声に身の引き締まる

早稲田大 政経四 伊藤俊介

しめやかな慰靈の御歌を聞きながら亡き人の御靈みたまに思ひはせたり

慶応大 理工一 堀江良明

響きて慰靈の庭に流れゆく御歌聞きつつ先人を思ふ

島根大 法文一 池田敏晃

国のため斃れし人を思ひつつ声の限り海ゆかば歌ふ

響き来るラツパの音はみまつりのみたま鎮むる如くきこゆる

長崎大 教育三 中園まどか

英靈の見守りありて我が命今ここにありどしみじみ思ふ

決意

合宿をともに過ごししみ友らとの楽しき思ひ出決して忘るまじ

獨協大 外一 中田俊太郎

防衛大 人文社会四 清水洋平
素直なる感謝のこころ忘れずに進みてゆかむわが人生を

中村学園大 家政二 松田幸子
たくさんの人と出逢へしこの集ひみな言葉を中心にきざまん

新企業産業(株) 杉村崇治
みともらと合宿終はりて離れども心は一つ国想ふこと

中村学園大 家政二 井上香織
合宿で多くのことを学び得て忘れてならじと思ふけふかな

大学教官有志協議会・国民文化研究会

亜細亜大学名誉教授 夜久正雄

カッコーの声に目覚めぬ驚きて起きいでて見れば御殿場の宿

起きいでて宿の広庭めぐりつつ富士のすがたをさがせど見えず

建物の上に見えたる富士の峯いただきあかく朝日に映ゆる

をりをりに高なきわたるカッコの声のきこえてつかれやすまる
心しる友らとあひて語らへばゑまひ和みてうれひわするる

(社)国民文化研究会理事長 上村和男

富士の峯を朝ごと仰ぎ美しき姿に心あらはれにける

朝あけに峯はあかねに輝きて雄々しき姿せまりきにけり

慰霊祭

(株)宝辺商店代表取締役会長 宝辺正久

祭場へとくらし夜道を並みてゆくわれらの足音ひびきて反る

夜道ゆくわれらが足音あおとに亡き友も加はり歩むと思ひつつゆく

富士の野に篝火たきてをぎまつるみたまにささぐと祝詞のりとのる声

大みうたしづかに高くとなへまつる声の夜空に透るかしこし

このみちをただゆきなむと亡き人に祈るなりけり富士慰霊祭

○

「感想自由発表」終りて深く息づけり富士を覆へる雲に向ひて

富士と古事記に象徴されし合宿と山根運営委員長述べ結びけり

運営するものみな言へりけりこの集ひは小田村前理事長見守りまししと

合宿第一日目の朝

元九州造形短期大学教授

小柳 陽太郎

すがやかに晴れしみ空にまなかひに迫りて仰ぐ富士の神山

待ちに待ちし富士合宿の朝は来ぬ裾野さはやかに風は吹きつつ

西空に遠くかかれる有明の月もさやかに仰ぐ朝かな

雪はなけれ赤肌色の山肌の雄々しき富士に心ひかるる

「夜の集ひ」に「冬の夜」を合唱す

故理事長のこよなくめでし「冬の夜」を偲びつつ歌ふ迫る思ひに

燃えさかるファイヤーをかこむ友ら二百声をかざりにうたふこのうた

明治のみ世のかなしき民のなりはひのひた偲ばれてなつかしきうた

この歌の導きのままに日の本の心ふるさとに帰るうれしさ

歌ふままに胸は迫りてあふれくるおもひにたへず涙流れつ

なき師の君もともに歌ひませ若きらとともにうたひつく「冬の夜」のうた

元社国民文化研究会事務局長

長内 俊平

合宿もつひに終りぬなき大人の霊のうつしき導きのもと

大空もよく晴れたり富士の嶺も朝夕あしたゆふべに向ひ仰ぎつ

郭公も空高く鳴けりひぐらしも朝夕あしたゆふべにかなしく鳴ける

みくにのいのちにつらなる思ひに結ばれし友らは昨日の友にはあらず
手をとりにて励まし合ひつつ己が地ゆ歩みてゆかむ國のまさ道

青年の家より富士山を望む

拓殖大学総長 小田村 四郎

ゆく夏の空澄みわたりまなかひに仰ぐ富士が嶺あざやかに映ゆ
夕暮れて頂近く点々ともし火光る山小屋ならむか

合宿終了す

くさぐさの思ひのたけを語りゆく若き友らの姿たのもし
樂しかりし五日の集ひけふ終へて家路をさして山下りゆく
をちこちに分れゆくとも国を思ふ心一つにつとめゆかなむ

夜久正雄先生の御講話を聞きて

昭和音楽大学講師 國 武 忠 彦

会ひたしと師の君待ちて今日の日は迎へる日なりうれしきかな

若き日に『古事記』フルコトヅミを教はりし師の君はいま杖つきてをり

三十年の歲月過ぎて今ここに再び学ぶ幸せを思ふ

老いたりと師の君はのたまへど声張りありて何と健やか

師の君の「古事記」^{フルコトアミ}をよみあぐるなつかしき声に耳澄ますなり
還らざるオトタチバナの悲しみも師の君の声にて今よみがへる
師の君と別れて仰ぐ富士の嶺は夕映えのなかすべて見せたり

山口秀範さんの合宿導入講義

日本インドネシア・エル・エヌ・ジー(株)取締役

澤部 壽 孫

活き活きと君が語れば若き日も目を輝やかせ聴き入る如し
在りし日の師の君ビデオに語りますみ姿拝せば胸あつくなる
師の君のいまさぬ合宿たとへなく寂しきなかに始まりをれば
日の本のまさ道求めたたかひの一生終へましし師の君なりき
師の君の志^{こころ}受け継ぎ生きゆかむ力湧き来る友の語れば

山口秀範兄の合宿導入講義を聞きて

新日本製鐵(株)プラント事業部次長

今 林 賢 郁

みまかりし師の御姿を写しつつ君は語りゆくあふるる思ひを
なつかしくまた慕はしき師の君のいまさぬ淋しさしみみに思ふ
足らはざる身にはあれども賜はりしみ教へ継ぎて生きむと語りぬ

小田村理事長のお姿なき開会式にて

(株)講談社・資料センター室長

磯 貝 保 博

壇上でみ声するどく訴ふるみ姿なきはさびしかりけり

足らざるを互ひにおぎなひみ友らと心を合はせ共に進まむ

夜久正雄先生のご登壇

神奈川県立厚木南高校教諭

山内 健生

杖つきて背はかがめどわが耳に入りくるみ声は力強しも

説きたまふみ声は変はらずみ力のみなぎりこもれる『古事記』のお話

ふるごとのふみ読み上ぐる師の君のみ声清しく講堂に満つ

福岡県立嘉穂高校教諭

小野 吉宣

ひもろぎに幽冥へだつる神々を呼び給へり松吉兄は

祭文を奏上するとき早も来て我は進みぬ祭壇の前

神々に頭をたれて柏手を打てば虚空にすひこまるること

神々よ見守り給へと合宿の開かれゆく様奏上しけり

新しき神となられし師の君の御名をし呼べば胸つまりけり

胸せまり悲しかけり目にみえぬ神となります師の君思へば

(社)国民文化研究会事務局長

山口 秀範

神去りし師のみ思ひに支へられ四十四回も恙なく終ふ

深々と閉会の一礼しつつふと「昇神の儀」に臨める心地す

五日間の集ひの折り節師の君のみ霊と共に過ごせし我らは
逝きませしゆこの二月のゆくりなき日々は遠のきいま胸軽し

合宿地到着

熊本市企画調整局情報企画部情報企画課

折田豊生

富士の峯を仰ぎつつあれば相次ぎて逝きましし師のみおもしろのばゆ

さはやかに夏風わたる富士の野に今年も学びの集ひ開かむ

おほいなる道に連なる喜びを友らとともにとひたに思へり

熊本県立教育センター指導主事

白濱裕

故郷に臥し病みませる師の君に見せばやしるけき富士の高嶺を

山根清運営委員長

ひたすらに心砕きてつとめこし君の苦勞の偲ばるるかな

山根清運営委員長「合宿を顧みて」

(株)日本興業銀行証券調査課長

小柳志乃夫

ゆきませし師の君を偲び壇上に「ありがたうございました」と頭を下げぬ

この一年努めきたれるわが友の心偲べば涙ぐましも

小田村寅二郎大人を偲びて

不動産鑑定士

松吉基順

先達の大人逝きませど力あはせ友ら集ひぬ御殿場の里

友らと共に君が代唱ひ御殿場の集ひ始まれど大人はいまさず

亡き大人の遺せしみ心友らと共にいや継ぎみ霊をなごめまつらむ

御殿場の我らが集ひ天翔けり守らせたまへ大人のみ霊よ

○

セミナーの講義の流れ今年にも関連しあひて奇しきなるかな

小田村の大人のみ霊のよりそひて守りましたしか我らが集ひを

み祖らのみ守り導きありてこそ我らが営み永久にと祈る

講話を終へて

市ヶ谷漢方クリニック院長

桑木崇秀

言ひたきことの余りにも多くして何も言へず無念の思ひ胸をかき上ぐ

日の本は今や危ふし若きらよ国の礎守るは君らぞ

今はただ若きら頼む年老いて心あせれどせんすべなければ

舞岡八幡宮宮司

關正臣

古の人等挙りて仰ぎけむ富士の御山をあふぐ我等も

いづかたに分れ住みても富士の嶺に励みしことを思ひ出してむ

元佐賀商業高校教諭

末次祐司

生涯に一たびはとの願ひ果し富士のすそ野の集ひ嬉しき

古ゆみおやも仰ぎし富士の嶺は神々しくも空にそびえり

神富士と拝み仰ぐみおやらの姿偲べば靈氣身に満つ

大君と民とを結ぶ一本の大きいなる柱貫きてあり

小田村寅二郎先生を偲びまつりて

目に見えぬ大人のみ靈に導かれ若き友らはふるひ立ちたり

乃木神社

松吉宣和

靈祭る齋庭しつらへ謹みて仕へ奉らむかがり火のもと

山口秀範氏の導入講義を聞きて

川崎重工業(株)

山本博資

みまかりし師の君の文を繰り返へし引き給ひつつ偲び語りぬ

悠久の日の本の姿を信じつつ極め学べと厳しく語りぬ

新潟工科大学教授

大岡弘

朝晴れの森にこだますカッコウや仏法僧の声のどかなり
天皇の御成婚祝し建てられし施設使ふを畏しと思ふ

広島防衛施設局施設部企画課課長 合宿運営委員長 山根 清

逝きませし師の君偲びつともどもに合宿教室営みにけり

悠久の祖国のいのちをとのたまひし師をしのびつ合宿せしも

大空にそびえ立ちます夏の富士朝夕眺めつ合宿せしも

有明けの月も残れる大空にそびゆる富士を巖かに見き

古への人もうたひし富士の嶺をながめてをれば心はるるも

山口秀範先輩の合宿導入講義

福岡県立春日高校教諭 與 島 誠 央

神あがりまします小田村先生を「真の勇者」と感ぜしめたり

国憂ふあふるる思ひはせきをきり先輩のみ声はつまりふるへる

目に見えぬ国のいのちを友みなに感ぜしめたりこれの講義は

短歌相互批評にて

日本真空技術(株)超高真空事業部SE課 北 浜 道

思ひひそめ言葉を捜し一つ一つ友の思ひを偲びゆきけり

自らの思ひに適へる言葉なりと友は面はを輝やかせけり
心働かせ友の心を偲びゆく学びの道が続けゆかなむ

安信住宅販売(株)新宿センター課長代理

松吉基光

いそがしき録音の合間にこちよき風の吹き来てしばし憩ふも

熱を発す放送機材に囲まるる我のもとまで山風とどきぬ

山口秀範先輩の合宿導入講義

神奈川県立厚木東高校教諭

大日方学

師の君の神去りまして今ここに集ふ縁えんじの奇しとのたまふ
我もまた深き縁につながりてあるを思へば安らぐ心地す

夜久正雄先生のご講話をききて

(株)日本教文社第二編集部

坂本芳明

老体をおして古事記を語りたまふ師のみことばのありがたきかな

合宿を終へて

いにしへゆつたへきたれるまごころの道を友らとふみてゆかまし

薄闇に浮かぶ富士を見て

熊本地方法務局大津出張所

徳田恒稔

おどろおどろ薄闇に浮かぶ富士の山かしこ恐き姿が我に迫りく

レクリエーションの折

日本会議

茅野輝章

五合目をめざす行手に雲たちこめて行手さへぎる雨のうらめし
友ら皆よろこぶ顔を楽しみに一年準備つづけしものを

小田村寅二郎先生を偲びて

日本青年協議会

大葉勢清英

悠久の歴史につらなるこの国の理念にかへれと師はのたまひし

学風のまが正さむと合宿をつづけこられしみこころ偲ばる

富士山を見しをりに

雲一つかかることなく大空にそびゆる富士の姿雄々しき

あとがき

第四十四回合宿教室は、昨年八月上旬の四泊五日の間、「富士のさと 国立中央青年の家」(静岡県御殿場市)において大学生・社会人及び関係者合計一七八名の参加者によつて「学問・人生・祖国・国際情勢」をテーマに真剣な研鑽がなされた。本書は、この合宿研修において繰り広げられた各種講義等を中心にその要旨を収録したものである。どうぞあらためて味讀いただき、人生の栞としてまた、日本のあるべき姿をもとめるための指針として活用されんことを願ふ次第である。

さて、今夏で、四十五回目を迎へる合宿教室は、八月三日(木)から七日(月)の日程で、「国立阿蘇青年の家」(熊本県)を会場として開催される。主要講師の明星大学教授・東京大学名誉教授の小堀桂一郎先生(演題・国際的視野から見た日本の国柄)と亜細亜大学教授の東中野修道先生(演題・戦後日本人の歴史認識―南京事件から見る)を初め、諸講師の登壇が予定されてゐる。全国の学生、青年諸氏のご参加を願ひつつあとがきとする。

平成十二年三月

編集委員 山内 健生

磯貝 保博

——日本への回帰——
(第35集)

平成十二年四月十五日発行

定価 九〇〇円

送料 二四〇円

編者

大学教官有志協議会

国際民俗文化研究会

編集委員代表

上村和男

発行所

国際民俗文化研究会

〒一五〇—〇〇一 東京都渋谷区東

一十三—一四〇二

TEL (〇三) 五四六八—六三三〇

振替〇〇一七〇—一六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替えます

大学教官有志協議会 編
監 国民文化研究会

